
【碧いキャンパス】

イラリバナナ「市川昭子」

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【碧いキャンバス】

【Nコード】

N5223J

【作者名】

イラリバナナ「市川昭子」

【あらすじ】

イタリアに来て2年を経過した28歳の中野圭子は、隣人マルコの紹介で自分のデザインしたリングを届けた相手、セルジオと恋に落ちる。コートダジュールに家を持ち上流社会に生きるセルジオとの恋は、決して甘いものではなかったが、家族の辛らつな批判と反発にも耐えながら、二人の世界を守り抜く決心をする。二人が約束した愛の世界は碧いキャンバスに描かれ、詩情豊かに育まれてゆくが…。

第1章 新しい道に賭けて

第1章 新しい道に賭けて

元来、手先の仕事が好きだった中野圭子は、幼い頃から母親の目を盗んでは、

裁縫箱からいくつかの糸をポケットに入れ、部屋に持ち帰った。

そして、宿題が終わればその糸を取り出し、指編みでループを作った。

小学校低学年の間は、ループで満足し、自分のランドセルの脇に蝶結びを

したりして遊んでいたが、高学年になると三本にまとめたループを三つ編みにし、先頭部分には色変わりのループで小さな球を作り、ネックレスに仕立てたりして楽しんでいた。

母親は裁縫箱から無断で持ち出すことだけは注意したが、器用に糸を練って一本のループに仕立てるそのことに注目し、裁縫箱にはいつも不足した糸を補充しておいてくれた。

高校を卒業した圭子は、両親の希望であった大学への進学の際は選ばず、宝飾デザイナーという道を志した。

娘の意思を尊重した両親は、大学の代わりにその道の専門学校に入ることも勧めてくれたが、圭子は実践の中で夢を叶えたいと再び両親を説得し、高校卒業と同時に友人の紹介で宝飾品を専門とする都内のデザインルームに入った。

そして、デザイナーたちの助手として働きながら学んでいたが、何年経つても先が見えず、デザイナーの道をあきらめようと思いはじめたその矢先、何気なく応募した小さなコンクールで佳作という自作のまさかの入選を知った。

それを機に一度はあきらめたデザイナーへの道に再び心が揺らぎ、

二十六歳の秋、父の進言もあつて意を決して芸術の宝庫ともいえるイタリアへ一人旅立った。

圭子はローマの発祥の地と伝えられる下町、トラステヴェレ地区の一角に居を構えて間もなく三年目の秋を迎えようとしていた。

ローマに来てからはアルバイトで生計を立て、週三日間、彫金の工房に通つて

プロとしての修行を積んでいたが、悲しいとき、辛いとき、また、予想以上のデザインを思いついた喜びのときなど、ことある度にイタリアへ旅立つきっかけを作ってくれた父親との会話を思い出し、姿なき父親に語りかけるのが癖になっていた。

父親は常に三年前のあの晩夏の夕刻のままであり、語りかける自分もあの日のまま、二十六歳の圭子自身であつた…。

三年前の晩夏であつた。デザインルームに通うことに懸念を抱き始めた圭子は、

今の自分の苦悩と迷いを打ち明ける相手に、現実的なものの見方しかできない母親ではなく、何も言わないが常に優しく見守ってくれている父親を選んだ。彼ならきつと突破口になるような助言をもらえるのではないかという期待もあつた。逆に甘えてはいけない、と叱られる可能性もあつたが、

圭子はそれでも父親の今までの淡々とした生き方に共鳴を覚え、尊敬すら抱いていたから、勇気を出して打ち明けた…。

彼は何も言わず腕を組んだまま娘の話し終えるまでじっと耳を傾けていた。そして、今の自分に不満を抱き、涙が今にもこぼれんばかりに苦しんで訴える娘を見つめ、

少しだけ笑って目で慰めた。そして、こう言った。

「圭ちゃんの夢は？どこに行ってしまった？夢を語れない人間には進歩はないよ。」

先のない道を歩んでいるだけだ。多分、今の圭子がそうなんだろうね。

だとしたら現実を打破しなければいけない。どうしたらいいって？圭子の夢はまだしぼんでいないと信じる。だから初心に戻って夢を追い続ける

しかないと思う。ただ、夢を追い続けることは大変に難しい…。今の圭子はある意味では追い続けることに挫折したから苦しい…。でも、夢を諦められないのなら、答えはひとつ。追い続けるしかないんだ。

これから少しだけパパのことを話そう。そこから何か感じてもらえたらと願うから」

当時、繊維会社の部長であった父親は、部長職に就いたその日、社会人として最後の居場所であることを自覚した、そのときのことを話したいと言った。

「念願の部長職に就いたその日、五年間はこの座を守れるが、その先の社会人としての場所は保障されず、もしかして、社会的に完全に抹殺されるのかもしれないと思った。そんなとき、初めて今まで

歩んできた道を振り返ったみた…。しかし、私の歩んできた道には、なぜか未来の自分の老いばれてゆく影しか見えなかった。

つまり残されているものがなにもなかったんだ…。

でも、それは間違っていた。見えなかったのではなく、見えるもの、つまり形のあるものを残せなかったからだって気がついた。

無味乾燥でなんら個性のない道を歩んでいるのを知ったんだ…。

その時のシヨックは何年経っても忘れることができないほど、

大きかった…。もちろん、現実にはママがいて圭子が居る家庭はあった。

幸せの構図も私にはあった。でも、パパ個人の世界は皆無だった。若い頃から興味を持っていた写真の世界も、時間がないと理由で趣味にもしないで今まで生きてきたことをそのとき、初めて後悔した…。

夢を追うことを忘れてしまっていた…。夢のない無味乾燥な人生が
いかに淋しげに見えるか、振り返ってみて初めて知った…。

自分という人間の存在が薄っぺらでなんら価値のない存在に思えた…。

だから、圭子には自分の夢の世界を簡単にあきらめないでほしいと思っ
った。

ママは圭子のことを心配をして猛反対だが、圭子の夢がイタリアにある
なら、

行ったらいい。思ったが吉日だ。そう信じるなら行ったほうがいい。
パパだって心配は多々ある。なにせ我が家の大切な一人娘だからね。
でも、大切だから充実した人生を生きてほしいと思う親心のほうが
強い。

なにかあつたらすぐ帰国すればいい。実行する前から諦めてはいけ
ない”

圭子は数日前に何気なく話したイタリアへの留学の話を真剣に考え
ていくれた

父親に驚きながらも心から感謝した。そして、その晩から圭子も両
親も膝を

交えて話し合いを続け、半月後、三人が納得する形でイタリアの留
学が決まった。

それは同級生の父親がミラノに単身赴任していることから、
ローマでの下宿先と生活の基盤となるアルバイト共々世話を

してくれることで、両親も圭子自身も不安材料の大半が払拭され、

一気に話が進んだのである。

残る不安材料は片言しか理解できないイタリア語のみとなったが、しばらくは英語での生活に我慢をすれば、なんとかなることを両親も了解し、

その年の秋、二人に見送られて圭子は成田を後にした。

第2章に続く

第2章 圭子の挑戦

第2章 圭子の挑戦

ローマ発祥の地といわれるトラステベレに來た当初は、右も左も判らない日本人であったが、持ち前の貪欲さと勤勉さが、この二年間でイタリア語をマスターし、彫金の腕もかなり上がったと師であるピアンキ氏は言う。

イタリア人の友人も数は多くないが少しずつ増えてゆき、気の許せる親友も出來た。

圭子の口癖である「今が旬」は、そのまま今の彼女に値する言葉であらうか、

ローマで三年目の秋を迎えていたが、未だ見るもの聞くものが目新しく、

新しい発見を誘うローマ散策をこよなく愛している圭子であった。

7

圭子の下宿先となっている石造りの四階建てのアパートの隣人であるマルコは友人以上、親友以上の付き合いをさせてもらっている一人で、

彼の両親や兄弟たちとも常に交流があるが、なかでもマルコの父親はこのほか圭子を可愛がった。持前の世話好きがそうさせているのだろうが、圭子にはなによりも心強い存在であった。

マルコは高級服地販売と紳士服のテーラーを営む叔父の店に勤めていた。

彼の希望ではなかったが、叔父のアントニオに子供がないことから、ゆくゆくは彼の店を引き継ぐ約束で、仕事に従事していると聞いている。

三十一歳にもなったマルコは、結婚もせず幾人かのガールフレンドと

気ままなデートを繰り返しながら、叔父の気に入る相手を物色していた。

親譲りで面倒見がよく気のいい青年であることで、圭子はなにかといえれば彼に相談し、悩み事を聞いてもらうことも多々あった。

そして、時の流れの中で、マルコは休みの日には自宅で制作に励む圭子の部屋に来ては、イタリア芸術の蘊蓄を並べたり、圭子の作品を評価したりして時間を潰すことが多くなっていた。

また、その日の夕刻は彼の母親が夕食のお裾分けを圭子の部屋に届けるのが常であったが、いつもそれを機に彼は部屋を出て行った。家族同然という意識の中で、圭子を異性として認めるマルコの精一杯の礼儀であったが、時には折角の休みの日を気ままに一人で過ごせない苛立ちが重なり、夕食前に帰ることを強要したこともあった。

そして、もしかしてマルコと結ばれるのかもしれないという、漠然とした予感もあったが、その予感は常に頭痛を伴うものであることが圭子の気持ちをしなせていた…。

そして、六月の末、それまでの慣例を破る事件が起きた。

土曜日の夜、マルコが突然部屋に尋ねてきたのである。

夜、しかも休日ではない土曜日に訪ねて来たことは今までなかっただけに圭子は驚き、ドアを開けることに躊躇したが、急用と言いながら執拗にノックするので、仕方なくドアを開けた。

マルコは上気した顔で入り口に立ったまま、圭子の顔を見るなり言った。

「先週僕に見せてくれた紳士物のリングはどうした？今、手元にあるかな？」

あつたら見せてほしい。ないの？どうしたの？」

焦るようにしてリングの行方を問いただすマルコの表情は、
いつものだじゃれも全く出ず、真剣そのものの顔で圭子に迫った。

「もうないわ。あれは没にしたの。でも、どうしたの？マルコはあの作品は

駄作って言ったでしょう？だから糞に障って溶かしてしまったの。
姿かたちも

まったく消え失せたの」

それを聞いた途端、入り口に腰を下ろし、がつくりとうなだれた。

「どうして君はいつもこんなに間が悪いんだ？折角のチャンスかもしれなかったのに。

なぜって？なぜチャンスなんだって？実はね、明日、スペイン広場
近くの

ホテルにテーラーの仕事で出向くんだけど、相手はモンテカルロに
住む

金持ちなんだ。叔父の店の仕立てが気に入っているその客は、

シーズン毎に叔父の店で新調するんだ。今度もローマに来たついでに
夏服の注文があった。僕は叔父の代理で洋服生地の見本を持ってゆ
くことに

なった。だから、圭子のこの間の男物のリングを見せて気に入って
もらえたら、

注文が取れると思ったんだ。だって、あのリングは僕にとっては駄
作だが、

金持ちが好みそうな雰囲気だったから。だから、慌てて来たのに残
念…。

いい話になる可能性があるとなんとなく予感もするしね」

話を聞きながら、世の中そんなに甘くないだらうけれど、

もし、自分がデザインした作品が売れたら…。

そうなったらどんなにか幸せかと圭子は思った。

そう思ってしまったから、圭子は思案してマルコに言った。

「他の作品では駄目かな…？気に入ってもらえないかもしれないけれど、

後につながるように頑張ってみるから。明日私をお供に連れて行ってくれない？」

マルコは笑った。笑いながら圭子の頭を指差した。

「そうだよな。僕はあの作品しか頭に浮かばなかったけれど、作った作品は

山ほどあるんだったね。いいだろう。リングはいくつか用意できる？極力金持ちが喜びそうな作品を持ってゆくんだよ。

結果はどうであれ、思ったが吉日。やるだけやってだめならそれでよし。

でも、万が一、相手が気に入ってくれたら、圭子はそれを機にデザイナーの道が

開けるかもしれない。そうだろう？面白くなってきたぞ！」

圭子はマルコが部屋から出て行った後、手元に置いてある紳士物のリングとブレスレット、

そして、奥様に女性物も何点が用意した。出来る限り高級感にあふれる作品を用意した。

初めて自分の手で売り込むことに挑戦する圭子は、その緊張感と超高級ホテルに

宿泊するセレブ階級の人に会うことが楽しみで、興奮してその晩は寝付かれなかった。

第3章に続く

第3章 ス페인広場で

第3章 ス페인広場で

マルコと圭子は午前十一時の約束に遅れないように車で家を早めに
出た。

しかし、ラッシュのない日曜日だったことから、
スペイン広場に着いたのは約束の三十分も前であった。

時間に余裕ができてしまった二人は、とりあえず駐車場に車を預け、
荷物を持って広場に面したカフェテラスで時間を潰すことにした。

圭子はこのような日のためにと思って、大切にしまっておいた

新調のスーツを着て見たが納得がゆかず、何度も手を通した

お気に入りのグレーのワンピースに黒のジャケットを組み合わせただけで、結局、圭子好みのシンプルな装いを選んだ。

出掛けにリビングの片隅に立て掛けてある等身大の姿見に

自分を映すと、一年前も二年前も何ら変わり映えのしない
洋服を着ている自分に言った。

“セレブか上流階級か知らないけれど、私にはこんな単純な服装が
一番似合うんだから。笑いたかつたら笑えばいいわ…。そうでしょ
う?”

“でも、本当はもう少しマシな服があれば良かったわね…”

カフェテラスに座った圭子の落ち着きのなさに気づいたマルコは、
セレブ階級の人に会う、ということだけで緊張感に襲われている
のを見抜き、圭子の肩を叩きながら言った。

「圭子も女だったか。さつきから髪に何度も手を当てたり、
後ろの窓ガラスにウィンドーに映る自分の姿にためいきを
ついたりして。でも、気にするな。圭子はこの世に

ほかの女性がいなければ一番きれいで格好いい女なんだから。自信を持つんだね。ただ、その服は少し地味すぎるけどな」と慰めながら茶化した。口下手でいながら毒舌のマルコにしては、いつもと異なつて柔かな口調であつたことで、自分に対する思いやりと彼の精いっぱい励ましてもあるような気がして、圭子は素直にうなずいた。

十一時時近いスペイン広場には観光客が三々五々集まり始めていた。その勢いには、いくつもの反物の見本を入れた大きなポストンバッグを

持つて歩くのが、困難になりそうな混雑がやってくる気配があつた。また、今はローマは観光には最適な気候ということもあり、世界中から多くの観光客がこぞつて訪れる季節でもあつた。広場の風物詩ともなつているツツジが階段を埋め尽くすのも今である。

圭子は観光客を眺めながら、ツツジで華麗に彩られたスペイン階段を想像し、花の香りが漂う中を一人歩く自分の姿を思った…。優しい風の中を彷徨する自分も垣間見た気がした…。ローマ随一のポイントとして多くの人々に愛されているこの広場が、まるで自分のために広がっているかのように、すっかり夢の中の主人公になりきつた圭子は、広場の騒音も人声もすべて遠くにし、澄み渡つた青空の向こうに笑いながら誰かと話しこむ自分も見えていた…。

そして、時折、夢想の世界と現実の狭間に立つた時、ローマに住みながらまだ、一度もローマ随一のその景観を目の前にしたことがないのに気がついた。テレビのニュースでしか見たことがなかったことに、雑誌やインターネットのニュースでしか見たことが

なかったことに気がついた…。

マルコはそんな圭子の顔の前に手をかざした。

「夢見る夢子さん。もう夢の世界は終わりにしてホテルに行こうよ。でも、いつも思うんだけど、圭子は不思議な女だよな。

今のように少しの時間があると、周りを一切気にしないで自分だけの夢の世界に入ってしまうんだから。

どうしたらそうできるのか、俺にいつか教えて

ほしいね。もしその術が使えれば、現実逃避ができるからね。

嫌なことからも哀しいことから逃げることができる…。いいね」

真面目に言っているのかどうか判らなかったが、でも、

圭子は現実逃避など考えてもみなかったし、そんな仰々しく考えながら夢の世界に入り込んでいるつもりもなかった。

ただ、マルコに指摘されたように、今を見ないで済むことに心地よさを感じているのかもしれないと思った。

スペイン階段を上りきってから数分の所に建つ超高級ホテル

ビル・リーベラが二人の目的のホテルであるが、

そこは緑鮮やかなボルゲーゼ公園を背景にした

中世の古城を改装して開かれた名門ホテルであった。

誰もが一度は泊まってみたいホテルに挙げる、

優雅でリッチなホテルで知られていた。

スペイン広場の一角で夢の世界にいた圭子は現実に戻り、

まだ一度も足を踏み入れたことがない上流社会という異質な

世界に生きる人に逢うために、マルコと共にその中世の古城に向かった…。

第4章に続く

第4章 初対面

第4章 初対面

瀟洒な外観が一際立つビラ・リーベラを前にした二人は、深紅の燕尾服を身にまとったドアマンの丁寧なお辞儀で迎えられ、ホテルのロビーに案内された。

明るい陽光の下から薄暗い照明のロビーに入った二人は、目が慣れないことで身動きができないまま、

ドアマンが目の前から消えるまで立ったままだった。

そして、彼が去った後、勧められたソファに座ることなく、圭子は興味深げに周囲を見回した。

昨夜から何度も想像して楽しんでいた超高級ホテルの内装を、早く見たかったから、目が慣れるまでもう少し時間が必要だったけれど、我慢できずに歩きながら見回した。

ロビーには想像していた以上の格調高い調度品が置かれ、天井には大きく豪華なシャンデリア、ロココ調に彩られた重厚な雰囲気を漂わせるソファセット、大理石のテーブルなど、圭子の想像をはるかに逸脱した絢爛豪華な世界が展開していた…。古城を改装したとは聞いていたが、目の前にしているそれらすべて、中世からの遺物だろうと思った圭子は、驚きを隠せなかった…。そして、桁違いの豪華さに次第におののきはじめ、その重圧で押し潰れそうになっていた…。

マルコはどうやら圭子とは違う意味で燕尾服の男が消えるのを待っていたようで、自分たちの視界から彼が消え失せた途端、茫然と立ち尽くす圭子に言った。

「もう我慢が限界！トイレに行く。圭子は？行っておいた方が

いいと思うよ。あのソファの裏側にあるから」
そう言い終えたマルコは、圭子の返事を待たずにソファの
向こう側にあつという間に走り去った。

現実を凝視できずにいた圭子も、なぜかマルコの後を追ひ、
化粧室に入った。といっても用足しをするつもりではなく、
マルコに言われたから、行かなければならないという義務感に
背中を押されるようにして化粧室のドアを開けていた。
内装の感動から冷めやらぬ圭子は、無意識に化粧室に入り、
鏡に映った自分の姿を見たとき、初めて現実を取り戻した。
驚きで自己を喪失したのだろうか、あるいは自分を
押し潰すほどの存在感のある遺物に出会ったからであろうか、
影の薄いみすばらしい自分を鏡の中に見ていた…。
圭子は凜と背筋を伸ばした。負けまいという意志で背筋を伸ばした。
そして、急いで身なりと髪を整え、鏡の中の自分を見つめた。

“どうしたの？なにに負けるの？圭子は圭子。誰にも負けないよう
に、

余裕、余裕を持って作品の説明をすることが今のあなたの役目。
せっかくのチャンスが無駄にしないように頑張らなければ！”
気持ちを整えた圭子は、自分を叱咤し廊下に出た。
マルコは既に用足しを終えて廊下で待っていた。

マルコは圭子を伴ってフロントに出向き、宿泊客である
セルジオ・カルツティ氏と面会の約束を伝えた。
スタッフはすぐさま部屋に電話を入れ、その旨を伝えている。
返事を待つ間、何気なく彼らを見ていた圭子は、
フロントの中にいる五人のスタッフの誰もが同じ燕尾服で、
誰もが同じ動きをし、同じ愛想笑いを口元にたたえていることに
気がついた。まるで感情を押し殺した機械仕掛けの人形のように…。

そして、客人と眼が合えば、無意味な笑いをなお一層長く続ける…。傍で見ている圭子にまで、彼らの笑いはふりまかれていた。これも超高級ホテルのなせる技なのかと、圭子は余裕の中で苦笑した。

スタッフの一人がマルコに伝えてきた。

「セルジオ・カルツティ様から部屋に来てほしいとの返事です」

二人は燕尾服のスタッフの案内で、五階のカルツティ氏の部屋へと向かった。

深紅の絨毯を敷き詰めた廊下、壁に掛かった名画、スタッフの優雅な物腰、

そして、嘘っぱい愛想笑い…。すべてが圭子にはまるで異次元の世界のようで、現実味がなかった。そのせいか、思ったより緊張していない

自分を見つめ、歩きながら胸を撫でほつとしていた。

カルツティ氏の部屋に着くまでの間、燕尾服の男は、

圭子の服装や顔に何度か目を向けていた。圭子はその男が何を気にしているのか、漠然としながらも気づいていたが、

見下げるような顔で苦笑いをするその態度にマルコも気付き、その男を睨みつけるような素振りをして、彼なりに応酬していた。

圭子は物怖じしない性格であったが、その様子を見ながら、場違いな場所に足を踏み入れたことを後悔した。

分不相応な夢を追いかけている自分が情けなくなってもいた…。

これから会う人がどんな人物かは判らないが、燕尾服の男同様に、この格好ではバカにされるかもしれないと思えた。だから、

圭子はこのままカルツティという人に会わずに帰りたいと思っていた。

しかし、時は既に遅く、五階の目的の部屋の前なのであるう、燕尾服の男は、ドアをノックし、インターフォン越しに

客人の訪問を部屋の中の人物に告げていた。そして、マルコと圭子に丁寧なお辞儀をして去って行った。

二人が燕尾服の男を見送る間もなく、部屋の中からドアのカギを開ける音がした。

圭子はその音に反応するかのようにはマルコの顔を見上げた。

マルコはちょうどネクタイの歪みを直しているところだった。

圭子の向けた視線の中には自分のことで精いっぱい

マルコがいた。自分のことなど忘れたかのようなマルコだった。

だから、圭子は突然、極度の緊張感に襲われた…。

心細かったかもしれない…。見ず知らずの世界に

一人放り出されたのかと錯覚したのかもしれない…。

とにかく、緊張のあまり足が音を立てて震え出したからたまらない。

懸命に止めようとしても足の震えは止まらず、

困り果てている最中に、無慈悲にもドアが開いてしまった…。

「お待ちしていました。あれ？マルコさん一人ではなかったのですか？

いつもお一人だったのです。でも、お嬢さんで良かった。部屋に一輪花が咲くようで明るくなります。ここは歴史があります。ただで

辛気臭いですから。さあ、遠慮なくお入り下さい。もう一人分、

お茶を追加しましょう。お嬢さんは何が好きですか？」

真っ白なシャツとラフなジーンズ姿のカルツティ氏が明るくい口調で二人を迎えた。

育ちの良さが身体全体に溢れ出た彼の視線の中に入った圭子は、突然頭が真っ白になり、なお一層足の震えがひどくなっていった。

マルコが部屋に入った。圭子もその後ろから入ろうとするが、震える足は前に出ず、だからといって後ろにも下がらず、

どうにも足が動かない…。恥ずかしさで身体じゆうが熱く、まるで熱に冒されているような苦しさも襲ってきた…。
情けなかった…。とにかく恥ずかしかった…。

自分は今にも泣き出すのではないかと構えたそのとき、カルツティ氏が笑いながら手を差し出した。

そして、怪我人を支えるような感じで圭子をそつと抱き寄せ、部屋の中まで誘導して、大きなソファに座らせてくれた…。

まるでお伽話の中の王子様のようにスマートで、優しいカルツティ氏の

腕の中だったから、圭子は再び自己を失いひどい眩暈の中で彷徨し始めていた…。

第5章に続く

第5章 君の世界に

第5章 君の世界に

メイドが三人分のお茶とクッキー、果物を乗せて部屋に入ってきた。彼女はリビングを通り抜け、奥にあるキッチンにそれらを並べている。

カルツティ氏はメイドをキッチンから見送った後、ソファに座る圭子とマルコを手招いた。

気持ちの高ぶりがようやく治まった圭子はマルコと共に、カルツティ氏が待っている大きな丸テーブルのあるキッチンへと移動した。

ガス台やオーブン、冷蔵庫などが備えられたその部屋は、一見キッチンではあるが、大理石の料理台や

中央に置かれた大理石の大きな丸テーブル、そして、

各所に置かれている大理石の彫像など豪華なインテリアに包まれていた。料理するための部屋であるうが、

それだけの目的の部屋ではなく、いつだったか映画で観たことのある料理を楽しみながら、お茶などを飲んだりしてくつろぐ、多目的な部屋でもあることが圭子には予測できた。

そして、今はマルコの持ってきたサンプルの布やデザイン画を並べるために、大きなテーブルを必要としたから、

カルツティ氏はリビングからこの部屋に移動したことも状況から察することが出来た。

テーブルに夏物の見本の反物をいくつもいくつも並べたマルコに、カルツティ氏はお茶を勧め、注文の品について打ち合わせを始めた。時折、デザイン画を手にしながら、テーラードカラーは

いつもより少し細めでステッチを効かせてほしい、ただし、コントロールを余り強くしてほしくない。また、サイドベンツの裏地はいつものように絹を使用、丈は前と同になど、テキパキと注文を付け、要領のいい物言い話を進めていった。圭子はカルツティ氏のリズムミカルな言葉さばきに聞き惚れ、言葉の余韻の中に酔いしれるようにして彼の顔を見つめていた。

デザインの次には三十種類ほど持ってきた見本の中から、三点を選ぶという大変な作業に取り掛かったマルコは、カルツティ氏が手に取った布地の特徴を、彼もまた機械仕掛けのように

テンポのある口調で、相手に解りやすく、そつなく説明をこなしていった。

カルツティ氏は何を基準にして布地を選んでいるのかは解らなかったが、マルコ同様にリズムミカルな手さばきで仕分けをし、最後に五点を残して、

その中から三点を選びマルコに渡した。その間、三十分と掛からなかったのではないかと、圭子は後になって思い返していた。それほど彼の決断は迅速で、無駄のない見事なものであったからである。

マルコも彼に劣らず、迅速な注文を聞き逃さず懸命にメモも取り、仕立てに必要な事項もいくつか尋ね、すべて終わったときには、疲れ切った表情で額の汗を拭っていた。

圭子はマルコの仕事に対する真剣な表情を初めて見たことで、彼の仕事への情熱を見直していた。

マルコの仕事が終わったことで、生地の見本を一緒に片づけていると、

傍らで手持無沙汰そうにしていたカルツティ氏がマルコの肩を叩い

た。

「ところで彼女、圭子さんと紹介されましたが、彼女はマルコの助手では

なかったのですか？僕はてっきりそうだろうと思っていましたが、でも、

失礼かもしれませんが、助手らしき仕事をしていなかった気がして

…。

もしかして恋人かな？それならそれで結構。うれしいことですが」とカルツティ氏は手を止めた圭子にも向けて言った。

相手は二人のリアクションを楽しむようにし、

軽い笑いを交えながら、疑問を投げかけて来たのだった。

圭子とマルコは同時に顔を見合わせた。そして、

同時に圭子の今日の目的を思い出していた。

「そうでした。僕は彼女のことを名前だけで、ちゃんとした紹介となぜ

ここにいるかを説明していませんでした。失礼をしました。

実は彼女はアクセサリーのデザイナーであり制作者です。

オリジナリティに富んだ素晴らしい作品を制作しています。

もし、ご迷惑でなかったら彼女の作品を見て頂ければと思って、

あなたに断りもなしに彼女を連れてきたのですが…」

そう言っつてマルコは立ち上がり、改めて圭子を紹介した。

カルツティ氏はぶしつけとも思えるマルコの願いに、快く承諾したが、

「ただ今日は十二時に昼食の約束があるので、それまでだったら構いません。時間がありませんから、早速彼女の作品を見ましようか」

と言っつて彼は腕時計を見た。時計は十一時半を少し回っていた。

圭子はその瞬間、作品を入れた箱が自分の手元がないことに気が付いた。

マルコも同時に圭子がショルダーバッグ以外、なにも持っていないことに

気がつき驚いた。しかし、マルコはすぐには現状が把握できなかったことで、

取り乱す寸前のところに止まっていた。

そして、傍らで茫然自失となっている圭子の手を握りながら、次第に焦りが募る中で自問した。

“スペイン広場までは圭子は確かに箱を胸に抱えていたが、その先、ホテルの

ロビーに入ったときには、もう抱えていなかったのではないのか？”

“いいや、あった。胸に抱えていたから、ショルダーバッグが肩から落ちて

いたにも関わらず、上に上げられなかった。だから俺が上げてやった…。

あの時確かに箱を抱いていたはずだが…”

二人はカルツティ氏の怪訝そうに見つめる視線の中で、

ひたすら今来た道を振り返っていたが、なにも見つけることができない圭子は、カルツティ氏を無視しマルコに叫んだ。

「私の作品はどこにあるの？どこに落として来たの？

盗まれてしまったの？どうしよう、どうしたらいい？お願い答えて！」

マルコに当たったところでどうにもならないことは、承知していたが、

もし手元に戻ることがなかったら、という恐怖の選択肢が待っているから、

人目も構わずマルコに叫んでしまった…。

金銀、そして、高額なルビーなどの宝石をデザインしたものが数点含まれていることもあるが、圭子にとってなによりも大切に愛着のある作品ばかりを詰めてきたことで、それらを失う代償は精神的に大きな痛手であったから…。

そして、どこで箱を紛失したのか判らず絶望的となった圭子は、それでも空を仰ぎ、悲しみを避けようと天井を仰ぎ見ようと頭を上に向けると、

圭子の視界の一番端にいる、自分と同じ悲しい世界の舞台に立つカルツティ氏の姿に気がついた…。

圭子はそんなカルツティ氏に無言の言葉を掛けた。

“私の悲しみの世界にどうして入ることが出来たのですか？”

カルツティ氏は圭子に静かに近寄り、そっと肩を抱いて答えた。

“君の世界が気になったから。君のひたむきな悲しみが気になったから…”

第6章に続く

第6章 夢の途中で

第6章 夢の途中で

焦り、あるいは怒り、困惑する二人を見ていたカルツティ氏は、状況を把握したのだろう、おもむろに椅子から立ち上がり、座っている圭子の後ろからなだめるように両肩にそっと手を置いた。肩に置かれた手のぬくもりが身体に伝わったとき、

圭子はさつき見たあの悲しい世界の中に、
今もカルツティ氏と共にいるのではないのかと錯覚した…。
だから、思わず後ろに立つカルツティ氏の顔を仰いだ。

彼はそんな圭子に何を意味するのか、少しだけ笑ってうなずいた。
そして、片方の手を肩から下ろし、圭子の差し出した手を握って言った。

「きつと見つかりますよ。だから落ち着いて。さあ深呼吸をしようか。
次に目をつぶろう。そうそう。その調子。もう一度深呼吸をしまし
よう。」

そして、圭子さんは少しの間、僕の質問に答えて下さい。いいですか？
「
そこまで言ったカルツティ氏は肩においた手も握っていた手も放し、そのまま後ろから前に回って、正面に立ち圭子の手を取った。
そして、質問の続きを始めた。

「今手元がないその箱はホテルまでは持って来たのですか？
持って来た。そうですか。どこまで持ってきたのかは判らないので
すね？」

では、この部屋に来るまでにホテルのどこかに立ち寄りましたか？
化粧室とか電話ボックスとか。化粧室に立ち寄った？

そうです、圭子さんの大切な箱はきつとそこにあります」

圭子はまるで催眠術にかかったかのように、カルツティ氏の声に従い、彼の誘導で記憶をたどりながら質問に答えていたが、気がつくともカルツティ氏は既に圭子の元を離れ、壁際に設置されている電話でフロントに連絡をしていた。もちろん、用件は圭子から聞き出した三十センチ四方の箱が入った赤いバラの花柄の紙袋がロビーの化粧室に

忘れ物としてなかったかどうかの問い合わせだった。

受話器を置いたカルツティ氏は、心配げな表情で自分を見つめる圭子に向かって、間もなくあなたの遺失物は戻りますよ、と占い師のようなこと言った後、カルツティ氏はマルコの横に座りなおも続けた。

「それにしてもあなたは面白い女性ですね。大切なものを一時間近く忘れているなんて、暢気な性格なのかあるいは、ひとつのことに夢中になるとすべてを忘れてしまう？そんな人なのかな？いずれにしてもあなたのような人と毎日一緒にいたら、きつと退屈という言葉には縁のない生活が送れるでしょう。毎日探し物だね」と笑いながら優しく圭子を見つめた。

電話の後、彼の予想通り圭子の遺失物は五分後に部屋に届けられてきた。

圭子はカルツティ氏に感謝の気持ち言葉を言葉だけではなく、どうやって表しているのか思索しながら、今届けられたばかりの箱を紐解こうとしていると、カルツティ氏は圭子の手元を見ながら止めた。

「圭子さんには申し訳ないと思いますが、先ほど言いましたように、

今はお二人と過ごす時間がありません。でも、あなたの作品を是非、拝見したいと思っておりますので、もし、明日午後五時からお時間を頂ければ、うれしく思いますがいかがですか？」

二人はお互いに顔を見合わせ、明日彼と会うことを無言の内に了解し合った。そして、マルコがカルツティ氏に答えた。

「明日、午後二人で再度、お伺いさせて頂きます。

お忙しいのに彼女のためにお時間を空けて頂き、心より感謝します。それと今日は大変に失礼を致しました。でもあなたのおかげで彼女の大切な

作品が手元に戻ることができました。ありがとうございました」

圭子はホテルを出てからも地に足が着いていないような、不安定な状態から

解き放たれず、マルコとも一言も言葉を交えないで自分の部屋に戻った…。

圭子の箱の紛失騒ぎの余韻が未だ消えないマルコも同様で、

明日は荷物が少ないことから、車ではなくバスで行こうという約束だけは交わし、

お互いの家の前までこれといった話もせず別れた。

部屋に入った圭子は、着替えを済ませてすぐ、

シャワーも浴びずに疲れた身体をベッドに横たえた。

そして、ホテルを出てから何度も繰り返し思い出していた

あの紛失事件が、自分の意思に関わりなく再び脳裏に蘇った…。

しかし、ベッドに臥した圭子の頭の中は、帰路に形容されてしまったのか、

いつしかカルツティ氏の魔術にも似た甘く優しい言葉遣いが走馬灯のようにめぐり、

甘い陶酔にも似た余韻が漂っていた。そして、その余韻の中で、再び催眠にかかったかのように深い眠りに就こうとしていたが、

眠りに就く途中には、真っ白なワイシャツに紺色のジーンズをスマートに着こなした
背の高いイタリア人の青年が、圭子の好きなミモザの花を手にして待っていた…。

その青年はたった今別れてきたカルツティ氏に似ているのがうれしく、
圭子は青年に向かって走り出していた…。

第7章に続く

第7章 約束の時間に

第7章 約束の時間に

まだ疲れの残る身体をもてあましながら、圭子は朝を迎えた。今朝四時過ぎという早い時間に、マルコからの電話で起こされた。それから四時間後の八時過ぎまで眠るのでもなく、起きるのでもない中途半端な状態でベッドにいたこともあって、目こそ開いて天井を見上げているが、

頭が冴えず心地よい目覚めには程遠かった。

その上、マルコからの電話は、お得意さんとの打ち合わせが夕刻まで入ってしまったから、カルツティ氏との面会は、自分に一人で行くように、という伝達であつたからたまらない。気が重く、ベッドから身体を起こす気持ちにもならず、数時間、時間を持って遊びながらベッドの中で悶々として過ごしていた。

中途半端な時間の流れの中で、昨日の出来事を思い返していた。何度も何度も昨日という過去を振り返り、悔やみ、悲しみ、そして、昨日の失態を引きずる今日、一人で再び彼に会うことが、恥ずかしくなっていた。傍らにマルコがいてくれれば、恥ずかしさも緩和され、初対面に近いカルツティ氏との会話にも困ることにはならなかつたはずなのに、と圭子は今更ながら、仕事上の都合とはいえ、マルコの勝手さに腹立ちを覚えていた。その上、昨日のホテルのスタッフの態度を思い返すと、どんな洋服を選んでいいのかも判らなかつた。ただ、選ぶほど何着も外出着を持ち合わせない圭子であつたから、一通り悩んだその後には、着てゆく洋服を決めていた。

軽い昼食を済ませた圭子は、シャワーを浴び、身支度を整えた後、

昨日、着用をあきらめたグレーのスーツとインナーには
淡いピンクのノースリーブを合わせ、清楚な雰囲気ですべてをまとめ
た。

自分が一番心安らく色遣いを選んだことで、ようやく本来の落ち着
きを

取り戻した圭子は、今一度全身を鏡に映し、衣服を整えた。

そして、手荷物を確認して、午後三時過ぎに部屋を出た。

今日はトロリーバスを利用してポポロ広場まで行き、

そこからホテルまでの三十分ほどの距離を歩こうと思っていた。

時間に余裕を持って行動するのが圭子の信条ではあるが、

家から広場まではバスで約一時間で行くことができることから、

三時過ぎに出発するのは少し早すぎると思ったが、

今日は昨日の恥ずかしい教訓を背負っていたから、

約束の時間だけには遅れまいとする気持ちは大きく、

所要時間に一時間の余裕をもって出掛けた。

その先、どういう結果になるのか皆目見当がつかなかっただけに、

時間だけは厳守しておかなければならないと思っていたから、

約束の一時間前にホテルまで行き着きたかった。

健脚には自信があったので、ポポロ広場から目的のホテルまでを

三十分ほどと計算した圭子は、約束の時間の五時前には

十分間に合うだろうと予測していた。しかし、予測は予測でしかな

く、

今日もまた落とし穴にはまったのか、まずはトラステベレから

ポポロ広場までのトロリーバスの運行が滞り、

予定より二十分ほど遅れて終点の広場に着いた。

しかし、一時間の余裕をもっていたから、その時点では心配はなか

ったが、

歩き出してしばらくすると、道路は工事のために前面封鎖されてお

り、

結局、通常の倍近い距離であるボルゲーゼ公園内の迂回路を歩く羽目になってしまったのである。

ヒールでの長距離の歩行は辛かったが、今更部屋に戻るわけにもゆかず、足の痛みよりなにより、約束時間に間に合うかどうか、心配で、圭子は走るようにして公園内を歩いた。

公園を出るまで時計を見ないで歩いた…。見ればきつと焦る気持ちが大きくなり、足のもつれもひどくなると思ったから…。

結局、ホテルに着いたのは約束の五分前を少し切っていた。

圭子は息せき切って歩いたから、胸の動悸が激しかったが、化粧室に入って髪の毛の乱れも直すことも顔にパフをはたくこともできなかつたが、疲れた足を休めることもできなかつたが…。ロビーを駆け抜け、フロントに走った。

スタッフの驚く顔をよそ目に、すぐさまカルツティ氏の部屋に連絡を入れてもらい、今度は案内なしで五階の部屋に直行した。

30

ドアを開けたカルツティ氏は、圭子の顔を見て一瞬、

驚いた風であったが、用意してあった笑顔で来客を迎えた。

そして、手を差し出し圭子をリビングに案内しながら言った。

「ご苦労様。ご機嫌はいかがですか？少し顔色がすぐれないですね？無理していませんか？もしかして走って来ましたか？身体が震えています…」

そう言われた圭子は、今朝鏡に映した寝不足で顔色の冴えない自分の顔を思い出し、化粧室に立ち寄って化粧直しをしてこなかったことを悔いた。

ソファに招かれ座った圭子の前には、昨夜、夢に見たあの青年と同じ格好をした

カルツティ氏が立っていた。顔こそ異なる気がするが、真っ白なワ

イシャツと

ジーンズを爽やかに着こなした夢の中の青年は、カルツティ氏であったのかと、

目を疑った。何度も目をしばたき見直したけれど、見間違っではないようで、

昨晚の青年が圭子の目の前にこやかに笑いながら立っていた…。

「飲み物は何にしますか？もし、よろしければ日本茶を入れてくれませんか？

日本人の友人に頂いたものですが、僕にはどうしていいのか判りません。

でも、一度自分で淹れたお茶を飲んでみたくて。だから昨夜から考えて

いたのです。圭子さんが来たらお願いしてみよう」と

夢の中で彷徨い始めた圭子の前を何度も行き来し、

日本茶を淹れてほしいと言う背の高いジーンズの青年に、

圭子は黙ってうなずき、彼に誘導されながら昨日のキッチンに入っ

た。その間、圭子は何度も相手の顔を見つめ、紛れもないカルツティ氏であることを

確認した圭子は、そっと胸をなでおろしていたが、一抹の不安と共に頭に宿った不思議な感覚はその後、一日中消えることはなかった。

第8章に続く

第8章 勾玉のストラップ

第8章 勾玉のストラップ

キッチンには圭子がくることを予想して、急須と小さな茶筒、二つの湯飲みがテーブルの片隅に用意されていた。

それらは黒塗りの小さな茶盆の中に納まり、

茶道具一式とまではいえないが、日本茶を淹れて楽しむには十分な道具であった。日本を離れて二年を経過している

圭子にとってそれらは懐かしく、また、新鮮なものとして目に映り、思わず手にとって眺めてしまった。

カルツティ氏はそんな圭子を見て言った。

「極普通の日本のお茶の道具と思っていました。それはそんなに珍しいものなのですか？」

圭子はすぐ傍らに立つカルツティ氏に笑いながら答えた。

「誤解させてしまったようですね。ごめんなさい。

余りにも小さく可愛らしい器だったものですから…。」

それとこのような本格的な茶道具をしばらく目にしていませんでしたから、懐かしくって思わず…。」

圭子の説明に納得したカルツティ氏は、お湯を沸かすためにレンジに向かったが、途中、振り向いて圭子の目を見た。

「圭子さんはもしかしてホームシックに？僕のせいですね。」

申し訳ないことをしてしまったのかも知れませんが…。」

そう言っただけで、今度こそは圭子の傍らに来て真面目な顔をして言った。

「昨晚、夜遅くでしたが、マルコから今日はあなたが一人で伺うので、

よろしくお願いしますと連絡がありました。彼は仕事でどうしても

夕刻は身体が空かないからって。そして、あなたを一人で僕のとこ
るに
行かせることを心から心配していました。失態を繰り返そう
心配だつて。だからもし、何か問題があつても僕に大目に見てや
ほしいと言っていました。彼はあなたのことをとても大切に
思っているのですね。僕は電話口で保護者のように心配している
彼がうらやましかつたし、幸せなあなたの顔もちらつきました」
そう付け加えて、圭子にも勧めながら彼が先にソファに座つた。

圭子は昨日の失態を思い出し、カルツティ氏の言葉をうなだれて
聞いていたが、マルコの思いもかけない自分への気遣いを初めて知
つた。

心配し過ぎの感もあり、子ども扱いされている腹立ちもあつたが、
それ以上に自分のことのように心配するマルコの気持ちのほう
うれしかった。だから、今日こそカルツティ氏に失礼のないように、
注意深く行動をし、頑張ろうと意を正した。

ガスにかけたケトルの笛がけたたましく鳴つた。お湯の沸騰を報せる
その音は中世の古城にはふさわしくなく、異常なまでに大きかつた
ので、

圭子の身体は驚きで椅子から浮き、悲鳴に近い声を出して、
隣に座っていたカルツティ氏の腕を思い切り掴んでいた。

カルツティ氏もケトルの笛ではなく、それと同時に発せられた
圭子の悲鳴に驚き、圭子と共に驚きの声を上げていたから、
キッチンにまるで声の修羅場と化し、二人は椅子から立ち上がった
後の数秒間、何事が起こつたのか現状を把握できずに
啞然として立ち尽くしていた。

ガスレンジの前に走ってガスを止めたカルツティ氏は、未だ恐怖に
震えている

圭子の傍に戻り、子供をあやす様にしてそつと抱きしめた。
「もう大丈夫ですよ。僕が悪かったのです。こんなケトルを使ったから。」

圭子さんを驚かしてしまいました。怖かったのですね？

こんなにまだ身体が震えています…。許してください…」

そう言つて圭子の顔を覗き込んだカルツティ氏は、親指を

圭子の顔に当て、流れている涙をそつと拭いた。

その瞬間、圭子は我に返りカルツティ氏から身体を離した。

見詰め合う二人の間には、瞬時だったが優しい時間が流れ、

お互いの存在をこのとき、初めて意識したのではないのかと、

後日、圭子は友人に話している…。

ゆつたりとした時間を取り戻した二人は、お茶を楽しんだ後、
圭子は今日の目的であるカルツティ氏に作品を見てもらうために、
リビングに戻り、テーブルの上に持ってきた箱から作品を並べよう
と、

昨日と同じバラの花柄の紙袋から箱を取り出した。

バラの花柄の紙袋の底が少しだけ、破れているのを知っている圭子
は、

目の前のカルツティ氏に気づかれぬように、急いで折りたたもうと
すると、なぜか彼はその紙袋を手に取り、しげしげと眺めた。

何度も使っているから汚れてもいたから、

そんなにしげしげと見られたら…と恥ずかしかった。

カルツティ氏は紙袋を圭子に返しながら

「圭子さんは花がお好きなのですか？それとも絵画が好きなのかな？

この袋の絵柄はバラの花の油絵をモチーフにしているから、

それにとっても大切にしているように見受けられたから、気になつて
ね」

「…絵画も花も大好きですが、この袋は母がとても気に入っていま
して、

日本を出るときに数枚荷物の中に入れてくれたのです。でも、材質が紙なので、この袋が最後になりました。残念ですが…」

そんなやり取りの後、圭子は作品を彼の前に広げた。テーブルの上にはリングが十数点、プレスレットが六点、そして、小さな勾玉をあしらった可愛いストラップ一点が並んだ。

圭子は並べながらストラップまで入っていたことに驚いた。作品を収納するときに分れ込んだのだろう、すぐにその一点だけを箱に戻そうとすると

「それをどうしてしまうのですか？素晴らしい作品ではありませんか。」

最初に僕の目に留まった作品でもありません。それは頂けないのですか？」

カルツティ氏は箱に戻そうとする圭子の手元の勾玉を見てそう言った。

圭子はまた頭が真っ白になった…。

“ どうしてこの箱の中に勾玉のストラップが入っているの？

この作品が気に入った？どうして私ってこんなに間が悪いの…。

この勾玉は私の作品ではないの！母が私にくれたお守りのなのに…”
無言でそうつぶやきながら、情けなく涙が胸にたまった…。

自分の自信作ではなく、母が作ったストラップが素晴らしい作品だと言つて、

最初に目を付けたことが情けなくて、胸の中だけではなく、目尻にまで生暖かい涙がこぼれそうにたまってしまった。

カルツティ氏には決して見せていけない涙だったのに…。
見せてはいけない今日の涙だったのに…。

そう悔いながら圭子は、傍らに立っているカルツティ氏の顔を見上げた。

第9章に続く

第9章 圭子の祈り

第9章 圭子の祈り

頬に伝わる涙を拭いもしないで見上げる圭子に困惑しながらも、カルツティ氏は優しい笑みを浮かべ、昨日と同じように圭子の肩にそっと手を置いた。そして、彼の大きな手から身体にぬくもりが伝わりうとしているとき、今度は優しい吐息が圭子を包み始めた。肩越しに顔を覗き込んだカルツティ氏の甘い香りのする吐息だった。圭子の荒んだ心は、吐息の中、手のぬくもりに誘われて、魔術に掛かったかのように、彼の世界に極自然に溶け込んでいった。

圭子の高ぶった気持ちが徐々に落ち着いて行くのを確認したカルツティ氏は、ゆっくりと静かな口調で圭子に問いかけた。

「このストラップには何か意味があったのですね？知らなかったとはいえ、

僕はあなたを傷つけてしまったようだ…。もし、良ければ話してもらえませんか？なぜ涙を流さなければならぬのか、ならなかったのか…。

僕はあなたを二度も泣かせてしまったから、知らなければならぬ…。」

ケトルの音に驚き、恐怖の涙を流したばかりの圭子だったから、イタリア人青年の優しい世界に包まれ、彷徨していた圭子は、流れ落ちる涙を拭いもしないで、彼の前にいた…。涙の波で疲れていたから、少しでも彼の優しい時間の中に居たかった。

だから、涙も拭わず吐息の中に立ち尽くしていたが、

しかし、再び彼の手が圭子の顔の涙を拭おうとしたとき、圭子は甘えている自分に気がつき、恥ずかしいという感情を取り戻した。

人前でめそめそする自分のみっともなさにも気がついた。

正気を取り戻した圭子は、涙を拭った後、口を十文字に結んで意を決した。

圭子の意は、この場での自分を捨て、この場で起こったことのもてを忘れて開き直すことだった。

恥ずかしさとみっともなさを払拭するには、もう開き直すことしか術はなかったから…。自分をこんな形で誤魔化すことは嫌だったけれども、勇気を出して圭子は開き直った。

セレブであろうが上流階級の御曹司であろうが、開き直った圭子には、もう関係がなく、優しい顔をして立っているカルツティ氏を睨みつけた。

意を決したときの圭子の癖ともいえるその豹変は、瞬間でしかなかったから、幸いにも相手には見破られることはなかったが、自分には効果があり、

いつも怖いものを拭い去るときの圭子の取って置き的手段であった。

心の準備が整った圭子は、しっかりと相手を見つめ口を開いた。

「カルツティさん、ごめんなさい。私はあなたのところを訪れるべき人間ではありませんでした。住む世界がまったく異なるあなたの世界に

自分の作品を持ち込んで、あわよくば買って頂こうという汚い下心をもってここを訪れたのです。恥ずかしいですね…。

だから罰が当たったのです…。この勾玉のストラップを

あなたが気に入ったとおっしゃったことで、私は自分を悔いました。そして、先ほども言いましたようにこんな私に神様が罰を与えたのだと…。

しかも、それだけではなく、昨日と今日、このようにドジばかり踏んでしまう自分がここにいました…。なぜかいつもの自分を取り戻せなくなっていました…。これも神様が与えた罰なのでしょう…。

もうほとほと自分が嫌になりました…」

そこまで話した圭子は、凜とした態度を保ちながら、

一呼吸し、本題に入った。

「…実はあの勾玉のストラップは私の作品ではありません。

母が趣味で作っているものです。日本を出る時にお守り代わりに私に持たせてくれたのです。知らぬ間にこの箱に紛れ込んでいました。

そして、皮肉にもそれを見たあなたが気に入って下さった…。

私の作品ではなく、母の作ったものをあなたは気に入ったのです。

これが現実だつてよく解りました…。もちろん、あなた一人だけの評価が

すべてとは思っていませんし、決して僻みでこのようなことを申し上げたわけではありません…。

少しぐらい作品が売れるようになったからといって、いい気になるなつて…。

神様が今の私をお叱りになったのだと思っています。自分の力なさに情けなくなり泣いてしまったのです…。みつともないところをお見せして

しまつて…。本当にごめんなさい…。泣いたのは決してあなたのためには

ありませんから、気になさらないで下さい…。ご迷惑をお掛け致しました」

一気に胸の内を明かした圭子は、目の前の作品を片付け始めた。圭子の独白を聞き、考え込んでいたカルツティ氏が思い余ったように、

そして、少しだけ緊張しているかのように意を正して口を開いた。

「圭子さん、今夜時間がありますか？もし、よろしければ一緒に食事をしてもらえませんか？実は僕は今夜も明日も相手が誰もいず、一人で食事を取らなければならないのです。夕食の一人はとくにきつい。だから付き合ってもらえればうれしいのですが。もし、マルコモ一緒の方が良ければすぐ連絡して、時間を作ってもらいますから、考えてもらえませんか？」

圭子荷物を片付けながら下を向いたまま話を聞いていたが、なぜ彼が自分と食事をしたいのか理解に苦しみ、もしかしてからかわれているのでは、と思った。からかうにしては少し現実味がありすぎるとは思ったが、どの道、今更彼に向ける顔はなく、真面目な誘いであっても断ろうと彼の顔を見上げた。

後ろに立っているカルツティ氏の顔を見上げた圭子は、自分も立ち上がり、

振り向いた瞬間、カルツティ氏は圭子の顔を見ると同時に、突然、足元をすくわれるような感じでフロアに倒れ込んでしまった。

咄嗟のことで、何がなんだか判らなかつたが、

緊急事態が起こったことを察した圭子は、倒れた彼の足元に座り、

「大丈夫ですか？どうなさったのですか？痛みがありますか？」

仰向けに倒れているカルツティ氏は、圭子の声にうなずいた後、起き上がるうとはせず、近くへと手招いた。

「このままじつとしていれば、すぐに元に戻ります。心配は無用です。」

ただ、薬が必要です。冷蔵庫ぬ入っている水と一番上の棚に置いてある

ピルケースを持って来てくれませんか？薬が入っていますので…。薬を飲めば楽になります。心配はしないで…」
と微弱な声ではあったが、はっきりとした口調で圭子に応答した。

圭子は自分の事以外には、何事にも冷静に対処できる性格で、彼が倒れ込んだ時にまず心配したのは、周辺にガラスなどが割れた破片がなかったかすぐさま、周囲を見回していた。

もし、ガラス製品などが倒れ込んだ瞬間に割れて怪我でもしていたら、

現状を把握すると同時に、止血の準備も必要だったからである。

幸いにも二次災害ともいふべき事態はなかったことで、

圭子はキッチンに走り、カルツティ氏の指示に従って冷蔵庫からペットボトルに入った水とピルケースを取り出し、彼の傍に走った。

彼の元に戻った圭子は、まず頭に手を置き、熱があるか否かを確認し、

次にキッチンから持ってきたタオルで、彼の顔の汗を拭き取った。

“熱はなかった…。もしかして彼は心臓を患っているのかもしれない。”

とすれば身体を安易に動かすわけにはゆかない。この先、どうしたらいいのか…。この人をなんとか助けなくてはいけないの。ママ、教えて！”

そう祈りつつ、カルツティ氏の頭を少しだけ持ち上げ、薬を飲ませた。

そして、再び額の汗を拭い、ベッドルームから持ってきた毛布を掛け、緊急の場合を考えて、祈りながら傍らで見守っていた。

必死に祈る圭子の姿をカルツティ氏は朦朧とした意識の中で見つめていた。

けなげに病人を看護する圭子の姿は、人生の悲哀の縮図を見るような哀しみにもあふれ、自分だけではなく、見る者のすべての人を魅了するであろうと、
苦しい呼吸の中でカルツティ氏は感じていた…。そして、今、圭子という女性が
自分の命を永らえる唯一の助けであることが不思議でもあった…。

第10章に続く

第10章 甘い胸の痛み

第10章 甘い胸の痛み

朦朧とした意識のまま、圭子に見守られながら、カルツティ氏はフロアに横になっていた。苦しみも痛みも徐々に薄れてゆくその間、傍らには、自分自身の胸に手を添えて、静かに笑いかける圭子がいた…。懐かしい香りを漂わせた一人の美しい女性が、自分自身の胸に手を添えているのが不思議でならなかったが、カルツティ氏はなるがままに圭子の微笑みの中で少しだけ眠った…。

二十分ほど時の経過があつた。

静かに目を開けたカルツティ氏は、自分の身体の具合を伺うように周りを見回しながらそっと起き上がった。

心配げに自分を見つめる傍らの圭子の手を取り、

胸を押さえながら傍らの椅子に身体を預けた。

そして、圭子にうなずきながら優しい笑みを返し、口を開いた。

「もう大丈夫です。もう普通に動くことも出来ませんが、

あと少しだけ休ませてください。ありがとうございます…。

それにしても僕の言葉を忠実に守ったあなたは素晴らしい看護人でした。

そして、すべて迅速にことを処理してくれました。そのお陰で僕は生き延びた。心より感謝します。本当にありがとうございます…」

圭子はフロアから毛布を拾い、畳みながらカルツティ氏の顔色を伺った。

僅かに赤みを帯びてきた頬を見届けた圭子は、

ベッドルームに毛布を戻しながら、キッチンに立ち寄り、

先に用意しておいた湯冷ましのお茶を持って、カルツティ氏の前に置いた。

「さつき作っておいた日本茶です。熱いものを急に身体に入れることは避けたほうがよろしいと思いますので、冷ましておきました。汗をかいていましたから、お飲みになったほうが…」

カルツティ氏は目を丸くして圭子を見つめた。

「圭子さんは病人の世話がお上手ですね。日本で何をしていましたか？」

もしかして看護師だったのですか？あるいはドクター？」

圭子は笑って首を振った。突然倒れたカルツティ氏を前にして、もし、圭子が的確な判断とその後の処置をしたとすれば、それは母親の教えを守っただけであったことを、彼に言わなければならないと思った。

母は看護師を長い間職業としており、突然病に倒れた時の注意点など常に口にし、人工呼吸の方法も暇を見つけては、二人の子供に教えていた。中でもっとも重要なこととして、

“外傷のない人が倒れた場合は、動かさずまず医師を呼ぶこと。また、倒れた人が薬を持っている場合は、その本人が自分の一番の医者であることを忘れないで。その人の言う通りにするのよ”

という教えであった。ただし、薬を常に携帯しているその人の意識がはつきりしている場合のみで、その人の指示に従うのがベターである、ということなど母から教わっていた圭子は、

今、回復したカルツティ氏を前にして、改めて母の常々の教えに感謝していた…。

「いいえ、私ではなく母が看護師だったものですから、門前の小僧でいつしか、

看護の知識を身につけていたのだと思います。もちろん、常々母も

様々な病気やその処置の仕方など教えてくれましたから…。

それよりも、もう動かれて大丈夫なのですか？

お医者様をお呼びになった方がいいのではありませんか？

もし、よろしければ私がフロントに連絡致しますが…」

「いいや、もう大丈夫。いつもの発作です。心臓を少し悪くしています。」

だからといって重病ではありませんよ。この若さですからね。

少し無理をし過ぎなのかな？しかし、今日は通常よりひどかった。

圭子さんが居てくれなかつたら、大変なことになっていたかもしれない。

あなたのお陰で命拾いをしたと思います。ラッキーでした。

しかし、その代わりあなたを驚かせてしまった…。

この返礼にやはり夕食をごちそうさせて下さい。僕とは嫌ですか？」

昨日のあの優しく明るい言葉遣いのカルツティ氏に戻りつつあることに

安堵した圭子は、今、彼の誘いを素直に聞いている自分に驚いた。

僅か一時間ほどの時の流れが、彼に対しての気構えのような

ものを取り去っていたのか、二人だけの世界が広がり始めていたのか、

いずれにしても圭子の驚きは大きく、思わずカルツティ氏の顔を見

てしまった。

しかし、彼も圭子を見るさつきまでの固い表情が消え失せて、

より優しい大きな包容力で自分を包み込んでくれている気がし、

圭子は視線を彼に当たったことが急に恥ずかしくなった…。

彼も目のやり場に困ったのか、頭に手をやり下を向いてしまった…。

二人の間には、初めて異性として認め合った気まずい空気が流れた…。

甘酸っぱい思いに胸の痛みを覚えた圭子は、再びカルツティ氏に目を向けたその時、さつき見た頭の上にあつた左手の薬指にリングの跡の

あることを思い出した…。彼の手は既にズボンのポケットの中にあつたが、圭子の記憶には、くつきりと結婚指輪であろうリングの跡が見えていた…。

リングの跡は痛々しかったから、記憶はなお鮮明に胸の中に残り、だから、彼が“寂しい夕食…”と言ったことは嘘偽りのない言葉であることを

信じる事ができた…。そして、次には“今夜も明日も相手が誰もいず、

一人で食事を取らなければならぬのです…”

と切ない胸の内をなぜこんな自分に打ち明けたのか、気になった…。

圭子はカルツティ氏の再度の申し出を受けようと決心した。

しかし、たつた今息を吹き返した彼の外出には、無理があると思つたことと、

自分も周辺の人に気を使いながら食事をするのだけは嫌だったから、「夕食をごちそうになるのはうれしいのですが、このお部屋で夕食を頂くことは出来ませんか？私にとつてもあなたのお身体にとつても、その方がベターと思います…」

出前を承諾するわけがないと思ひながら、恐る恐る申し出てみた。もし、拒否をされたら誘いはまた改めて受ければいいと思つてのこととで

あつたが、以外にもカルツティ氏は少しの間思案したあと、快く承諾し、その後、うれしそうに言った。

「二度目もまた振られるのかとはらはらしましたが、良かったですね。

きつとこんな僕に同情してくれたんですね。でも、理由は何であれ、夕食を一緒にできることは僕にはうれしい…。ありがとう…。

ただ僕の身体を心配してくれて、部屋で食事をしたいということは

判りますが、

あなたのためにも、というのは、どういことですか？間違っていたらごめんなさい、

もしかして服装が気になるのではないのですか？

もし、そうだったら無駄な気遣いですよ。今の洋服も昨日も似合っていました。

あなたはきつと何を着ても似合うのではないのでしょうか。

なぜなら身体から素晴らしいオーラが出ていますからね。

自信を持って僕の相手だとみんなに自慢できる人です。

それにしてもあなたのその人思う気持ちと繊細な心配りに驚かされます。

今夜があなたにとって楽しいディナーになればうれしいのですが…」

嬉しそうに話すカルツティ氏の顔色は既に元に戻っていた。

圭子はこれから過ごす夜の一時を遠くに夢見ながら、

夕刻からのめまぐるしく過ぎた時間を振り返っていた。

そして、カルツティ氏には申し訳ないが、彼が突然倒れたことで、

圭子は彼との距離が近くなったことを実感していた。彼の世界を

少しでも見ることができたこともうれしく、彼の背中をそっと見つ

めながら、

テノールのように滑らかで美しい余韻を残す彼の言葉の中に身を託していた…。

第11章に続く

第11章 くちづけの余韻

第11章 くちづけの余韻

夕食はフランス料理レストランにデリバリーを頼もうとカルツティ氏は

言ったが、胃に負担のかかるメニューが多く、今の身体には決して良いことはないと言子に彼を納得させた。

こんなときこそ油分の少ない日本料理がふさわしいと思った圭子は、お愛想であつても日本料理も好きと言った彼の言葉を信じて、デリバリーをする日本料理店をフロントで調べさせた。

フロントからはいくつかの店を知らせてきたが、

その中から圭子も何度か足を運んでいる老舗を選び、

カルツティ氏の了解を得た後、圭子の判断でメニューを決めた。そして、部屋までの配達を依頼した。

料理が届くまで横になるように勧めたが、さっきの日本茶を飲みながら、

ゆっくりとした時間を過ごしたいと言う彼に付き合い、

リビングからキッチンへ移動した圭子は、ケトルをガス台に

かけた後、初めてカルツティ氏と面と向かって椅子に座った。

そのシチュエーションは、昨日の続きの場面でもなく、

今日の続きでもなく、なぜか二人とも改めて自己紹介をしなければならぬような、そんな雰囲気にも包まれていた。

不思議だった。初めて会ったわけではないが、

なぜかこれから二人の世界が始まるような気がしてならなかった。

その不思議な感覚は、圭子だけのものではなく、彼も同じように感じていたのだろう、向かい合って座った直後にカルツティ氏は圭子の顔をまじまじと見つめ、口を開いた。

「…僕たちはお互いの自己紹介を済ませていなかった気がする。だから改めて自己紹介をしようと思うけれど、その前にお互いの呼び名を

改めていいですか？といつてもあなたは僕の名前を一度しか口にしていませんが、カルツティさんでは肩が懲ります。ですから、僕のことはこれからセルジオと呼んで下さい。その代わり僕もあなたのことを

圭子さんではなく圭子と呼ばせてもらいますから。いいですか？」

圭子は少し恥ずかしかったが、セルジオの目を見てうなずいた。

そして、ガス台のケトルが悲鳴を上げる前にガスを消し、お茶を淹れた。

沸騰前の適温で淹れた煎茶は、渋みに甘みが加味され、最高の味となったはずである。圭子はその一服のお茶をセルジオと自分の前に置いた。

日本人でなくてもお茶の味は理解できると信じている圭子は、セルジオという一人の男性の味覚も信じ、尋ねた。

「今のお茶の味の感想を聞かせてもらえますか？」

セルジオは少しだけ考えたが、目を輝かせて再びお茶を口に含ませ、ワインの味見をするかのように口の中でお茶を転がした。そして、飲み込んだ後、圭子に答えた。

「圭子がなぜこのお茶の味を聞いてきたのか、僕には解りません。

さつき飲んだお茶とは味が違うからでしょうか？このお茶は甘い！

日本茶は苦いと思っていました。甘いお茶もあるんですね。

僕の観察は間違っていますか？でも、確かにお茶は甘かった…。

それとさつきのお茶は美味しいとは思いましたが、甘くはなかった。確かです。しかし、お茶の葉は同じですよ？」

圭子はセルジオの観察力の素晴らしさに感激していた。

煎茶が甘いと解る人間がそうそういるものではないし、ましてやカフエの国の彼が甘さを感じするとは思ってはみなかったから、驚きは大きく、セルジオをまじまじと見つめてしまった。

「…すごいですね。その観察力には脱帽です。せいぜいまるやかな味とか

さっきのお茶より苦味が少ない、とかその程度の見方をするのかなって

思っていましたから。でも、あなたの言う通り同じお茶の葉で、さつきと

今とでは異なる味になるのが、日本茶の特徴かもしれません。ただ、同じ葉っぱで異なるのは淹れる温度が違うだけなのです。それとここにあるのは煎茶ですが、お茶の種類によっても味が異なります。

それはコーヒーにも同じことが言えますね。ただ、日本茶はとてもデリケートな飲み物で、淹れる温度を少しでも間違えると、本来の味を

出すことができません。適温でうまく淹れることができると、今のように苦味も甘みも前面に出した日本茶を抽出する

ことができるのです。セルジオは先に熱いお湯で抽出したお茶と今、少し冷ました適温のお湯で抽出したお茶のどちらがお好みですか？」
「どちら也喜欢だと答えたセルジオは、圭子の日本茶の蒔蓄にしばらく耳を傾けた後、圭子の質問に答える形で自己紹介を始めた。

「圭子はさつき僕とマルコとの付き合いの長さを尋ねましたね。マルコだけではなく彼の叔父さんのパオロの店共々の話になります
が、

既に六年ほどの付き合いになります。きっかけは、友人からローマに超一流の仕立てをするテーラーがあるという話を聞き、すぐさま彼の店を訪ねたのが六年前。その場で一着だけ注文したの

ですが、
話し以上の腕でしてね。その後何着注文しても、彼の仕立てた洋服のすべてが

僕の身体に直ぐさま馴染み、着やすさはもちろん、どんなに乱暴に扱っても

型くずれひとつしないのです。彼の技にかかればどんな体型の人でもきつと身体にフィットした洋服を完成させると思いました。

いつだったか、仕事場を見させてもらったのですが、

そこにはパオロだけの世界が広がっていて、神聖な場所？

というような雰囲気は漂っていました。

僕はその雰囲気は飲み込まれそうな恐怖すら感じました。

それだけ彼の魂が仕事場に込められているからなのでしょう…。

僕はそれからというもの、パオロのように完成された人間像に憧れて、

自分という一人の人間の存在価値を高めるための努力を

するようになりました。少しずつですが、人に認められるような

そんな人間になりたいと思っ…。

そして、僕は圭子とはまだ僅かな時間しか共有していませんが、

一緒にいるとなぜかパオロを思い出すのです。昨日も今日もです。

彼の物造りの世界と圭子の物に対してのこだわり方が

自然につながってくるのです。そして、今、お茶へのこだわりを聞いていて、

僕の圭子の観察は間違っていないかと思いましたが

そこまで一気に話したセルジオは、圭子の手をそつと握り締めてから、

入れ替えてあったお茶を飲み干し、また話し始めた。

「さつき、ストラップの作品が紛れ込んでいたと知った時の圭子は、尋常ではなかった…。僕は何がなんだかすぐには判らなかったが、それは自分の作品ではなかったからだ。しかも、

そのストラップを僕が褒めたことで、傷ついてしまった。

しかし、それはパオ口と同じように自分の作品に対して大きなプライドあるからです。自分の作品と間違えて褒められれば、誰だって傷つくかもしれないが、圭子はそれ以上に悔しさもあって、思わず涙を流してしまった。可哀想とは思いましたが、でも、僕はすぐに

このプライドが圭子を芸術家として育てていると思ったのです。異常なまでに悔しがっていましたから。ですから、このままゆけばきっと素晴らしいデザイナーになれると僕は信じて疑いません。これから様々な経験を積み、できる限り高尚な芸術作品を見て歩き、芸術的な貯金を殖やしてゆけばきっと近い将来、夢がかなうと思います。

僕に出来ることがあれば、いつだって協力したいと思っています」

時折胸を押さえながら一気にしゃべり終えたセルジオの顔は、少年のように紅潮し、興奮していることがうかがえた。

圭子はうれしかった…。セレブと言われる手の届かない世界に生きている

セルジオ・カルツェイにデザイナーとしての資質があると誉められ、彼が尊敬する仕立て職人パオ口にも似たこだわりも賞賛された…。

「食事が終わったら圭子の作品をもう一度広げて、見せてください。慰めるわけではありませんが、圭子の作品はあつという間に片付けられてしまったから、僕はお母さんのストラップしか見ていなかったのではないのかと思います。ですから今度はじっくりと

拝見したいのです。いいですね？」

と自己紹介の後、最後にセルジオはそう結び、

再度お茶淹れようとガス台の前に立つ圭子の後ろに来て、

圭子の頬にそっと口づけをした…。

優しい吐息の世界に再び迷い込んだ圭子であったが、さっきとは異なり、くちづけの余韻の中で広がるその世界には、たった今心が触れ合った青年、セルジオ・カルツティが、手を広げて自分を待っているような気がした…。

第12章に続く

第12章 告白

第12章 告白

八時過ぎに注文の夕食が日本料理の店から届いた。

それは圭子の要望を取り入れたメニューにはないので、

懐石料理をアレンジし、松花堂弁当に見立てた高級感にあふれたものであった。

大きな四角の黒塗りの箱を十字に切って、四つに仕切られた弁当箱には、

刺身、焼き物、煮物、酢の物、豆類などが彩りよく並べられていた。そして、大きな目のポットが二つ添えられていた。

配達してきた店員の説明では、一つにはお吸い物が入っており、もう一つにはアルプスの雪解け水を使用したお茶専用のお湯が入っているということであった。

茶道具一式の入った茶箱も運ばれてきた。

圭子はまず、配達された一式の中からお茶の道具を出し、

淹れたお茶をセルジオの前に用意してから、

松花堂弁当を初めて食する彼のために説明をした。

三百年余り前、江戸時代から続く歴史ある松花堂弁当の蘊蓄はもちろん、

なぜ、弁当箱が四つに仕切られているのか、など圭子の知る限りを彼に伝えた。

セルジオは彩りよく、あまりにも美しく並べられた目の前の料理に感激し、

なお、その歴史の長さに驚き、そして、お茶を入れる圭子の手さばきにも

感嘆の声を上げた。そして、いつの間にかデジタルカメラを片手に、
松花堂弁当やお茶を淹れる圭子を写真に収めていた。

夕食は一時間ほどで終了した。程よい腹具合に満足したセルジオの様子を

見届けた圭子は、キッチンでお膳類を洗い出すと、

「それはそのまま店に返せばいいのではないのですか？」
とセルジオは肩越しに声を掛けてきた。

圭子は洗う手を止めないで、前を向いたまま答えた。

「そのまま返してもいいのですが、今日は時間も遅く、多分、
この食器類は明日回収するのではと思います。」

明日ということになると食べ残しの食べ物から臭いが出てきますし、
この箱にも臭いが染み付いてしまいますから、

だから、洗ってお返ししたいのです。もちろん、

この部屋に洗う場所があるからです……。もしキッチンがなかったら
ですか？布巾などで中の食べ残しを拭き取っておくと思います……」

セルジオはそんな圭子を気に入ったようで、笑顔だった顔がなお一
層、

喜びに満ちた顔になり、キッチンに立つ圭子を後ろから抱きしめた。

「君にはいつだって驚かされます。僕は昨日も同じことを言ったと
思いますが、

昨日も今日も僕は心から驚いているんです。

どうしてそんなに人の気持ちを考え、優しい行動ができるのか、

驚きだけではなく不思議で仕方がなかったのですが、今日はその原
因が掴めました。

育ちだったのです。ご両親の育て方と環境、色々な条件が圭子をこ
んなに

素晴らしい女性に仕立てたと思います。育ちの良さがこんなに素晴

らしい
思いやりのある女性を育てあげたのだと思いました。
とにかく君のオーラは前だけではなく後ろからでも輝いて見えます
からね」

圭子はセルジオの社交辞令に驚き、返事に困りながら、自問自答して
いた。

“ 育ちの良さですって？とんでもない。セルジオの方がはるかに育
ちが

いいし、彼こそ育ちから来る大きな包容力と傍に
いるだけで気品が漂って

くるのに。それこそそのオーラに包まれると私は
気持ち温まってくるの…。

私は普通の家庭でごく普通の教育を受け、普通の女性として育てら
れて

きただけ。でも、彼のご両親がどんな方なのかは知らないけれど、

私は世界の誰よりも両親の愛情をいっぱい受けて育ってきたことは
自慢できる。もし、それが功を奏して褒められているとすれば、

やはり彼の言う通り育ちからくるものなのかもしれない。両親に感
謝ね”

社交辞令かもしれないが、褒められたことに気を良くした圭子は、
すっかり自信を取り戻し、片づけが終わった後、

セルジオが淹れてくれたカフェを堪能していた。

セルジオは圭子の横に座っていたが、二杯目のカフェを飲み干すと、
今後の僕たちのことだけど、と慎重に言葉を選んで話した。

少しだけ二人の間に緊張感が漂った…。

圭子は具体的なことではなかったが、彼が何を話そうとしているの
か、

緊張感の中、予想できたから手が少しだけ震えていた…。

「もし、圭子が同意してくれるのなら、僕はこの先も時間が許す限り君と会いたい。

昨日、君たちと別れてからずっと圭子のことが気になってしまっただけだ…。

僕は君に恋をしていることに気がついた…。そして、さつき、僕はもしかして、

恋ではなく愛し始めているのかもしれないと思った…。

だからもし、圭子がよければこの先、会ってほしい…。」

セルジオも今までの明るさは消え、流れるようなテノールの声も出さず、

物静かであったが重い口調で自分の思いのたけを告げた…。

圭子は下を向いたまま、彼の告白を聞いていた。

冷静さを失わず、彼の一言一言を噛みしめるようにして

心の中に飲み込んでいたが、その一方で胸の動悸が激しくなり、手が震えがさつきよりもひどくなってゆくのが判った…。

予期しない彼の告白ではなかったが、でも、目の前で打ち明けられた圭子は、困惑しながら必死に答えを探していた…。

答えを見つけた圭子は、落ち着きを取り戻すようにして

ゆっくりとキツチンに立ち、セルジオに背を向けたまま言った。

「私もあなたと同じ、このままお別れするのは嫌です…。

でも、あなたを愛しているか否かはまだ判りません。

それにお互いにまだ何も知りません。

年齢も仕事も趣味も何もかも…。でも、思いました。

誰でも最初の出逢いはそうなのだって…。お互いに何も知らない他人なんだって。

ですから、そのことについては心配はしていません。でも…。」

そこまで話した圭子は、振り向き、セルジオの目を見て言った。

「マルコに聞く限りあなたは私たちとは異なる世界に生きています…。
あなたは私とは無縁の上流階級の人だと聞いていますし、
このホテルの部屋を見ても、私のようにごく普通の世界に生きる
人種と違うことぐらい解ります。その上、私は日本人です。
交際してゆくその間には様々な問題が起きそうで怖いのです…。」

セルジオは震えている圭子をしつかりと抱きしめた…。そして、
悲しげな表情で自分を見つめる圭子の口をそつと押さえ、

「この先、君の言うように色々な問題が起きるかもしれない。
起きないことを祈るが、起きないとは言い切れない…。」

でも、僕は君を決して悲しませるような状況には置かないつもりだ
し、

もし、何かことが起きても、君のその英知で乗り越えられるような
気がする。

もちろん、僕は出来る限り圭無駄な悲しみは与えない。心配もさせ
ない

つもりだ。だから僕に任せてほしい。いいね？」

圭子はセルジオの結婚指輪の跡を見たこともあり、
自分たちの間には多くの問題があるような気がしていたから、
もしかして不毛の愛の世界かもしれないと頭の片隅で思っていた…。
しかし、圭子の心を掴み取るためにその場凌ぎの安易な答えをしな
かった

セルジオだったから、問題が生じるかもしれないと正直に答えた彼
だったから、

今、圭子は初めて自分の相手として彼を信じることができた…。だ
から、

セルジオとの世界に身を投じることに躊躇いはなく、彼の熱い口づ
けを受けた…。

今芽生えた愛ではあるが彼と自分をも信じて生きたいと願ったから…。

時刻は日付が変わろうとしていた。二人で過ごす時間の経過の速さにセルジオは圭子への愛の深さを知った…。

圭子も同様に時間が止まってくれたらと願わずにはいられなかったが、
勇気を出し、自分の車で送るというセルジオの申し出を断り、
タクシーを呼んでもらって帰路に就いた。

ロビーまで送ってきたセルジオは、明日もう一度逢いたいと告げた
が、

圭子は工房に出る日であったことから即答を控えた。

そのときの落胆するセルジオの表情と別れを惜しむ哀しみは大きく、
家路に就く間、圭子は一人ロビーに残してきたセルジオの姿と
二人で過ごした僅かな時間を何度も何度も振り返っていた…。

第13章に続く

第13章 不信の目

第13章 不信の目

翌朝、圭子はいつもより二時間早く起床した。

工房へ出かける日でもあったが、宿題ともいうべき

作品を仕上げていなかったから…。朝食もそこそこに、制作途中の作品を完成させるために作業机に座ったが、

昨晚の深夜の帰宅だけではなく、寝付かれなかったことで

睡眠時間は皆無に等しく、ひどい頭痛とめまいに襲われ、

作業に集中できなかつた。途中、何度も洗面所に行き、

顔を洗い直しては再び作業台の前に座るが、

効果はなく、苛立ちは募る一方だつた。

それでもなんとかリングの研磨に取りかかるが、

ことある度に昨晚のセルジオとの会話が頭の中で繰り返され、

研磨機で自分の指を思い切り削っていることさえ、

すぐには気づかなかつた…。

作業着に血が付着していることに気がつき、そこで初めて痛みを

感じた圭子は、さして慌てる風でもなく、指の先から滴る血を

止めるのではなく、ただ呆然と眺めていた…。

心は心あらずのように、痛みの世界にもトラステレベのこの部屋にもなく、

セルジオに逢えない苦しさと哀しみの世界にしか心はなかつたから、

血が止めどもなく流れ落ちていても、他所事であつたが、それは長くは続かず、

突然、激しい痛みに襲われた圭子は、ようやく現実に戻つた。

とりあえず近くにあつたティッシュで指先を包み、バンドエイド

を探しに
立ち上がったが、その瞬間、痛みと共に制作に集中できない
自分への苛立ちが一拳に噴出し、痼癢を起しそうになったとき、
窓の外から自分の名前を呼ぶマルコの声が聞こえてきた。
苛立ちのまま会いたくはなかったけれど、ドアを開けなければ
きつと不審がると思い、ティッシュで指を押さえたままドアを開
けた。

マルコは慌てていたが、圭子の身体の一部始終を眺めると、
怪訝そうな顔つきに変わった。多分、自分がいつもとは違う
疲れきった顔だからと圭子は察した。
だからあえて取り繕うことは、しないで、そのまま疲れた風を装っ
た。
このときから、マルコだけではなく、自分も相手の出方を見、
お互いの腹の探りあい始めていたことに、圭子自身は気がついて
いなかった。

「圭子の悲鳴が外まで聞こえてきたから慌ててドアを叩いたけれど、
何かあったようには見えないね…。でも、確かに悲鳴が聞こえた」
悲鳴を上げたことさえ覚えていない圭子だったけれど、
無意識のうちに声を出していたかもしれないと思った圭子は、
極力、平静さを装って言った。

「研磨していたら手元が狂ってしまった…。そのとき、余りの痛さに
声を上げてしまったの。でも、もう大丈夫だから。心配させてしま
ったわね」

そう言っている間に彼は部屋に上がり、勝手にソファに座った。
マルコには入り口だけで帰ってほしかったが、
彼はそれだけの理由で訪ねてきたのではなかった。

ソファに座ったまま怪我をしている圭子の手を見上げたマルコは

「早く止血をしないと貧血を起こすぞ。薬はあるんだろう?」
そう言った後、圭子の顔をまじまじと見つめて言った。

「昨日は帰りがかなり遅かったようだが、商談はうまくいったのかな?」

彼は圭子の作品を見て何と言った?オーワンダフル!って言うてくれたのかな。

そうだったらいいのにね。しかし、深夜まで商談に時間が掛かるとはね」

マルコは何かを探るように執拗な目つきに変わっていった。

圭子はマルコの皮肉に満ちた口調とそんな目つきを初めて見たような気がして怖かった…。

彼にはいずれ話をしなければいけないと思ってはいるが、まだセルジオとの世界は始まったばかりである。

何事も起きてはいないし、マルコに報告するような具体的なこともなかったから…、それと自分にも考える時間が必要だったから…、だから、しばらくは黙っていようと思っていた。

しかし、マルコは昨日ホテルでなにがあったのか、執拗に探りを入れてきた。

昨日の帰りの時刻まで把握している様子であったから、昨夜のことを話さない

わけにはゆかないと思った圭子は考えた…。短い時間の中で懸命に思案した。

そして、一大決心をしてマルコに嘘をつくことにした。

「昨晚は大変だったのよ。また失態をしてしまったの。
約束の時間よりも一時間ほど遅れてしまっ…。

だから昨日と同じように何がなんだか判らなくなっているその最中、
今度はカルツティ氏に事件が起きてしまった…。

彼が私の前で突然倒れたの…。怖かった…。

でも、足元に人が倒れているじゃない。恐怖と驚きの中で、彼をなんとか助けなければと焦った…。

でも、幸いにも彼の意識はしっかりしていて、携帯しているお薬を服用してから元気になったから良かったけど。とにかく、色々なアクシデントが起きて、作品を見せる時間と精神的な余裕がなくなってしまったの…。

だから残念ながら作品のお披露目は次回に持ち越し。

帰りが遅くなったのは、私に迷惑を掛けたからそのお礼にって、夕食をご馳走して下さったから。

カルツティ氏は心臓を少し悪くしているようなの。かわいそうね…」

圭子はとりあえずはマルコに言い訳がましく昨日のことを話し終えた。

内容は少しオーバーな表現を除けば、決して嘘をつかなかったことに胸をなでおろしたが、すべてを話していないことが、彼を裏切っているような気がし、

自分のことを我が身のように思ってくれている

人の良いマルコに申し訳なく思い、心の中で謝罪し手を合わせていた。

圭子の釈明で納得したマルコは、その後、十分ほど部屋にいて引き揚げたが、

作品はどんなに頑張っても出勤時間の九時に間に合わないことで、体調が優れないことを理由にしてに工房を休むことにした。

一人になった圭子は、リングを片づけてベッドにもぐりこんだ。

セルジオとの甘酸っぱい世界に再び身を置いた圭子は、

いつしか苛立ちも消え、彼に逢えない哀しみも忘れて眠りに就いていた…。

傍らには真っ白なシャツと蒼いジーンズ姿のイタリア人の青年がいたことは

いつまでもなかった。

第14章に続く

第14章 初めての嘘

第14章 初めての嘘

目が覚めたのは午後二時過ぎであった。

知らぬ間に六時間ほど眠ったようである。

圭子はベッドサイドに置いておいた携帯電話を手にとった。

昨晚お互いの電話番号とアドレスを交換し合い、

毎日一度は連絡をし合う、という約束を交わしていたから…。

そして、昨夜の話では午前中にセルジオが連絡を入れると言っていたから、少し焦りながら電話を手にしていた…。

携帯電話には二通のメールと一通の不在通信が入っていた。

一通のメールはする休みした工房からの連絡事項であったが、不在通信ともう一通はセルジオからであった。

メールには電話をしたが君が出なかったの、という簡単な文面しかなかった。

その文面から仕事の途中にメールをしたためたのではないかと思っ

た。

圭子は三時間以上も前に送られているメールだったから、

直に電話で話したかったが、午後二時といえば誰でも仕事をしている時間帯であることで、電話は避けた。

それとメールには昨日の今日だから、まだあうんの呼吸ではなかったから、

圭子は言葉を選び余分なことは一切を書くことはしなかった。

「昨日はご馳走さまでした。そして、電話とメールをありがとうございました。」

お身体の具合はいかがですか？

今日は無理をしないでゆっくりとお休みください。

といつてもお仕事でお忙しいのでしょうか？もしそうであれば、あなたには休養が必要だと思いますので、くれぐれも無理をなさらないように。

私は今日は工房を休みました。一日部屋で作品を作る予定ですので、もし、お身体になにかありましたらすぐご連絡ください。では、また」

メールを送り終わってから、久々にたっぷりお湯を張った
バスhtubにつかるうと思ひ、バスルームに向かった。

普段は湯船につかるのが面倒ということと多忙な毎日を過ごしていることからその時間がなかったが、今日は心身共に少しでも穏やかな時間を過ごしたいと願ったのであった。

通常の女性のおしゃれにはなんら関心を持たなかった今までの圭子の生活パターンには、太陽が顔を出している明るい内にバスhtubに浸かるなど、

女性らしい贅沢を考えたことはなかったが、セルジオと知り合ったことで、

女性としての遅い目覚めがやってきたことには気がついてはいなかった。

初めて口づけを交わしたあの日からお互いに多忙を極め、

一週間の経過があった。その間、電話やメールで連絡を取り合っていた二人は、

時間の余裕ができたときに、一日ゆっくりと過ごそうという約束を交わしていたが、逢えなくなって八日を数えた早朝、セルジオから電話があった。

六時過ぎという朝早い電話は初めてだったので、圭子は携帯を握りしめたまま、

なにか変わったことがあったのではないのかと怖く、

しばらくの間、携帯を耳につける勇気が出なかった…。

「どうしたの？大丈夫？朝早い電話だったから驚いたんだね？悪かった…。実は今日時間が空きそうだから、夕方出てこられるかな？」

はつきりした時間は再度連絡するけど。そのつもりで圭子も時間を空けておいて

もらえないか？今日の今日だから無理かな？」

圭子はもちろん承諾したが、なぜこんなに早い時間に？と聞いたとき、

セルジオは思ったが吉日、と笑いながら言っただけのまま電話が切れた。

圭子は携帯を握りしめていた汗ばんだ手をゆっくりと拭きながら、先を急ぎすぎるセルジオが気になっていた…。

午後のランチタイムを利用して、セルジオから今度はメールが届いた。

「今客人とのランチタイムが終了。客をこれから空港まで送ってゆき、

その後はフリータイム。今夜ゆっくり逢えると思う。時間はまた連絡するから待っていてください。今客に隠れて洗面所でこのメールを書いています。愛している。チャオ」

圭子は客に隠れてメールを書いているセルジオの姿を思い浮かべ、おかしいやらうれしいやらで、思わず苦笑した。

夕刻、圭子は彼と最初に会った時のブラウスにジーンズを穿いてホテルへ向かった。

出がけに何を着て行こうかと迷ったが、迷っても数着しかないおしやれ着の中から

初めてのデートにふさわしいものは一着もなく、普段と変わらない

ラフな格好を選んだ。

セルジオは空港から電話をかけてきた時、
圭子の悩みを知ってか知らないか、今夜はローマ郊外の丘の上にある店に

食事に行くけれども、気軽な店だから心配しないで、と
そう言ってくれたことが救いであった。

ホテルに着くとセルジオは既にロビーで待っていた。

そして、夕刻ということで一刻も早くラッシュのローマの市街地を
脱出したいとあって、ホテルの前に用意してあった車ですぐさま出
掛けた。

セルジオは市街地を抜け出すには二十分ほどかかったと言いながら、
市街地を囲む城壁を出ると、緊張感から解放されたかのように笑顔
を見せ、

運転席の横に座る圭子の手を取って、軽くキスをした。

そして、市街地を抜け出した車は、郊外の爽やかな風が吹く

高原地方へ向かって、先を急ぐようにしてスピードを上げて走った。

二人の目的地は、ローマから南東に三十五キロほど行った先にある
小さな村、プレネステイニであった。

車を運転しながら、プレネステイニは大自然と歴史ある建造物に
囲まれた知る人ぞ知るリゾートであり、中世から交通の要衝として
栄えた歴史ある村でもあると説明された圭子は、

いつだったかマルコにも行こうと誘われたことがあるような気がし
ていた。

そこは丘陵地にあつて、ローマの夜景を眼下に見下ろすことができる
ロマンチックな雰囲気にあふれているともマルコは言っていたが、
セルジオも今同様に村が広がる丘からは、ローマを眼下にした
絶景が楽しめると圭子に言った…。

マルコに聞かされていたロマンチックなその村を一度は訪れて
みたかった圭子であったが、今、そのことをセルジオには正直には
言えず、
初めて聞く村の名前だと偽ってしまった…。なぜ嘘を言うのか自分
には

解らなかったが、なぜかその方がいいような気がした…。

第15章に続く

第15章 祈り・・・

第15章 祈り・・・

車はローマを出て一時間も経たない内にプレネステイ 二の村の入り口に差し掛かった。村に入るとセルジオは初めて村を訪れる圭子のためにスピードを落とし、自分も村の家並みを眺めながら運転した。

中世の面影を至るところに残した村プレネステイ 二は、所々に残る城塞に囲まれて、残照の中で静かに時を刻んでいた。そして、村の静かな佇まいの中、今、夕闇の帳が降りようとしていた・・・。

喧騒とはかけ離れた静かな村に身を置いた圭子は、初めて訪れたのになぜか故郷のような懐かしい香りを感じたのが不思議だった・・・。

懐かしさの中に、二人だけの時間が流れようとしていることも感じていた・・・。

その時、圭子はもしかしてここが、未来の自分の生きる場所なのではないのかと予感がし、気持ちを高ぶらせた・・・。

そして、きつとここには何か芽生える・・・、そう思ってしまった圭子は、

傍らのセルジオに無言で訴えた。

“ここにはあなたと私の世界がある・・・。私にはなぜか見えるの・・・”

圭子の無言の言葉に誘われるようにして、村の中腹に車を止めたセルジオは、傍らに降り立った圭子の身体をそっと引き寄せ、自分を見上げた圭子を

ごく自然に抱擁し、愛していると言った・・・。

甘い涙が流れ落ちる中で、圭子は幸せ過ぎて言葉もなかった…。

再び車に戻ったセルジオは、村の中を抜けて小高い丘に向って車を走らせた。

そして、程なくして丘の頂上に立つ一軒の小さな家の前で止まった。レンガを積み立てた家の外観は、まるでおとぎの国の館のようにレストランというには似つかわしくない可憐で優美な姿を見せていた。

車を降りてセルジオのエスコートで歩き出した圭子は、なにか気配を感じて何気なく振り向いた…。

圭子は驚いた。セルジオの顔を見て思わず悲鳴を上げてしまった。

エントランス後方の左手には、考えられないほどの広大な庭園が広がっていたからだ…。しかも、赤く燃えるような残照の中に、

野草と花々が咲き誇る花壇が点在する広大な庭園だったから、圭子は口に手を当てるほど大きな驚きの声を上げてしまった…。

そんな圭子をうれしそうに見つめていたセルジオは、

「ここが今夜のデートの場所。見たとおりレストランではないが、でも、食事の用意はできているはずだから」

そう言っつて圭子を前に向かせ、目の前のウッドイナ大きなドアを開けた。

ドアを開けるとすぐにマントロピースのある大きなリビングが二人を迎えた。

中央にはテーブルセッティングした丸テーブルがあり、真紅のバラの花を一輪差した花瓶を取り巻くようにして、五本の銀製のキャンドルが灯っていた。

白い豪華なケミカルレースのテーブルカバーの上には、グラスが数個と幾重にも重なった上品な柄の皿、

そして、何本も並ぶフォークとナイフがベージュのナプキンと共に揃えられていた。

華麗で上品なテーブルセッティングは、圭子の目を見張らせ、フリーズして身動きできなくなったように固まらせてしまった。

今まで映画やテレビでしか見たことのない優雅過ぎる、豪華過ぎるセッティングだったから…。圭子は言葉に詰まっていた…。

「僕たちの今夜のディナーはここで。実はここは僕のセカンドハウス。」

今晚はコックと世話役のジオルジョ以外はだれもいない貸し切りのレストランに変身。だから誰にも遠慮は要らないから、リラックスしてコック自慢の料理を楽しもう。

ところで寒くないかい？ここはローマと違って夜になると急に冷え込むから。

寒かったらすぐに言うんだよ。マントルピースに火を入れるから」

圭子は生まれて初めての専用シェフの素晴らしい料理を堪能し、

生まれて初めて貸し切りの仮のレストランで、

フランス料理のフルコースを楽しんだ。すべてが夢の中の出来事であった。

食事をしながらセルジオの食に対してのこだわりも知った。

それは決して食事の中身ではなく、食卓の雰囲気と共に

食事をする相手であることを圭子はこの夜、彼から告白された…。

そして、フランス料理といえども鴨やトリュフォなどの高級な素材を使わず、

地元で採れた新鮮な野菜や地元で飼育しているウサギ、そして、あまりある自然の中で育てた羊からとれるリコッタチーズや

ペコリーノ・ヨーグルトなどをふんだんに使った料理であったから、

圭子はごく当たり前の食材をを主にしたスローフードを楽しむ

セルジオに庶民性のあることと食に対しての心根の優しさも発見した。

食後、セルジオとテラスでに出て満天の星が輝く空を見上げながら食後のコーヒーを楽しんだ二人は、今後のことを話し合っつもりでリビングに戻ったが、セルジオはその前に見せたいものがあると言っ

前もって用意していた大きなショールを圭子の肩に掛け、懐中電灯を照らしながら庭伝いに家の裏側に案内した。

庭園の中の花壇は暗く既に見ることは出来なかったが、圭子の手を取って庭伝いに前を歩くセルジオの背中には、星に代わって輝き始めた月の光が反射していたから、圭子は月に祈った…。

“この幸せが長くいつまでも続きますように…。
私たちの未来がこの村で育ち慈しむことができますように…”

第16章に続く

第16章 自分を信じて…

第16章 自分を信じて…

庭の片隅に小さな家が見えてきた。

門灯に照らし出された入り口の脇の壁には、

「Serjio セルジオのアトリエ Atelier “Royal Camera”」
と大きく書かれている。圭子は小さな家の中に入る前にアトリエの名前を心の中で読み返した。

“ 碧い部屋…。ロワイヤル・カメラ。あおい部屋… ”

彼は鍵を開けて中に入り、灯りをつけた。

部屋の中は外から想像したよりはるかに大きかった。

圭子は招かれるままにリビングの中央に立つと、
セルジオは圭子の肩を抱いて言った。

「ここは僕だけのプライベート・ハウス。絵を描くのが趣味なので、アトリエにも使っている“ 碧い部屋 ” です。誰にも邪魔されずに考え事をしたり読書をしたり、絵を描いたりする、

僕にとっては現実逃避ができる最高の場所なんだけれど、

この部屋を圭子にプレゼントしたいと思っている。

といっても、僕と共有ということになるけれど。

絵を描くときも考え事をするときも圭子と共にいたいから。

受け取ってくれるかな？受け取ってくれるならここは圭子の自由に使って欲しい。

部屋を仕切れば、お互いに干渉し合わないで僕は絵筆を握ったり、本を読んだり、圭子はアクセサリーの制作をすればいいし、

デザインを考えたりすればいい。グッドアイデアと思わないかい？」

圭子は自分とのことをこの一週間余りの間に、未来の伴侶として考えていてくれたことを、セルジオの言葉で汲み取った。

マルコの紹介で知り合った一人のイタリア人青年セルジオとは、アクシデント続きの出逢いから再会、そして、今日という僅か三度しか

会ってはいないが、また、その間の電話やメールでのコンタクトも数は少ないが、

今圭子は数え切れないほど会って話をし気持ちを通わせたマルコより、

言葉少なくともセルジオの方がより深く気持ちを通じ合い、心が触れ合うことができる大切な人になっていると思っただけ。

そして、何よりも圭子を幸せにするのは、この村と同じにセルジオの傍にいと懐かしい匂いに包まれることであつた。

幼い頃から父親の胸が大好きだつた圭子だから、父親に似たセルジオの大きな包容力に魅入られたのであろう、

彼が遠くを見つめていても傍らにいてくれるだけで、温かで優しい空気が流れ、その甘い香りのする空気の中で、

いつしか安心して生きることが出来る自分に気づいていた。

“ 碧い部屋 ” は決してブルーではなかつたが、セルジオが案内する家の中には、海の香りがそれとなくしてくるような、そんな気がした。

圭子はセルジオの香りの一端には、もしかして、潮騒の聞こえる街が関わっているのではないのかと、気になり始めた矢先、

セルジオは圭子の正面に回り、真剣な面持ちで目を見つめた。
「 … 早すぎる決断とは思っているが、僕は君から離れることが

できなくなつてしまつたようだ … 。どうしても圭子と一緒に生きてゆきたいと

思ってしまった…。圭子が傍にいてくれると思うだけで、僕は生きる糧が
出来た気がして…。だから僕と結婚してほしい」
息苦しくなったように上を仰ぎ、深呼吸をした後、なおも言葉を続けた。

「…おざなりの言葉しか言えないけれど、僕のこれからの道には、圭子が必要なんだ…。お互いになにも知らないけれど、初めて会ったあの日から、僕の心には君がいた。寝ても起きてても仕事をしていても、

僕の傍らにずっといた…。だからこの先もいてほしいから…。離れていてもいつも傍らにいてほしいから…」

突然プロポーズされた圭子であつたが落ち着いていた。

この村に入ったときからこの先、彼と共に人生を歩むのではないかという、予感がしていたからかもしれない…。

だからプロポーズの言葉を聞いても落ち着いて考えることができた。彼の傍らにいるとなぜか懐かしい思いに駆られるから、

だから、いつの日かきつと共に人生を生きるのではないのかと、予測していたのかもしれない…。だからとても

早すぎる決断であることは圭子にも判っていたが、セルジオのプロポーズをその場で受けた…。

彼の気持ちに自分の思いをゆだねた圭子は、言葉では言い尽くせない自分の気持ちだったから、感涙に咽び、何も考えずにセルジオの世界に身を託した…。

そして、その晩、二人はこの碧い部屋で初めて契りを結んだ…。

圭子はセルジオと同じ世界に生きた実感を胸に、

彼の傍らで寝息を聞いていた…。そして、イタリアに旅立つ前のあの三年前の晩夏の夜を思い出しながら、父親に語りかけた。

“ パパ、これでいいのよね？彼のことはなにも知らないけれど、彼も私のことをなにも知らないけれど、でも、これでいいのよね？彼も私も同時に同じ思いの世界にいたから…。言葉がなくても同じ思いの

中で考えて決めたことだから…。迷いのない決心だったから…。だからパパの言う通り私は自分を信じたの…。

自分の気持ちを信じて決めたの…。だからこれでいいのよね？例えこの選択が間違っていたとしても、私は後悔しない…。

この先もきつと後悔しないと思う。だって自分だけではなく

今は彼も信じることができから、だから共に生きていたいと思ったの…”

第17章に続く

第17章 セルジオの過去

第17章 セルジオの過去

圭子とセルジオは翌日、碧い部屋の小さなキッチンでカフェを淹れ、用意してあったコルネットを朝食にして、二人きりで半日を過ごした。

たまたま日曜日ということもあって、朝食後、シャワーを浴び、着替えを済ました二人は、村はずれに建つ小さな教会で村人たちと共に礼拝を済ませ、再び碧い部屋に戻った。

そして、初めてお互いのことを話し合おうとしていた。

最初に口を開いたのは圭子だった…。セルジオが話し出す前に話しておきたかったから、リビングに座ると同時に口を開いた。

「私はあなたのすべてを知りたいとは思いません。ことに過去のことは…。それよりも今のあなたのことの多くを知りたい。あなたの仕事、毎日の過ごし方、趣味、好みの本、音楽などなど。そして、この先の私たちのことを話し合いたいと思います」
圭子は結婚指輪を外した左手の薬指を思い出したから…。
セルジオにあえて悲しみの過去に触れさせることを避けたかったから、

先手を打って、無理のない範囲で彼の話の話を聞きたかった。

セルジオは圭子の気配りに気がついたのか、左手を隠すようにしてその言葉にうなずき、話始めた。まずは自己紹介と家族構成だった。

「僕は三十二歳。圭子は二十八歳って言っていたから四歳年上になるね。」

そして、見ての通り純粋なイタリア人ではない。

イタリア人の母とフランス人の父親のハーフなんだ…。

兄弟は既に嫁いでいる五歳年下の妹アンジェラと六歳年下の弟ジュリオがいて、
弟は現在兵役中。両親は今コートダジュール。モンテカルロでのんびり

隠居生活をしている。実家はモンテカルロになるのかな。でも、僕はイタリアが母国と思っっているし、この村が僕の故郷と思っっている…」

ここまで一気に話したセルジオは、少し悲しげであった。寂しげでもあったが、

カフェを飲み一息入れた彼は、また、言葉を続けた。

圭子はさっきこの家を紹介するとき、“ここは僕のローマの家”と言った

意味をここで初めて知った。

「家族構成は以上かな。圭子は過去は知る必要がないと言ってくれたが、

それは多分、僕の過去を感じ取ったから気遣ってくれたと解っている…。

ありがとう…。でも、僕の過去は話さないわけにはゆかないし、圭子には僕のすべてを知っておいてほしいと思っっているから話したい。

…圭子の予測通り僕は二年前まで結婚していた。離婚の原因はともかく、
彼女との間には子供はなかったから、性格の不一致で離婚は成立した。

その後、彼女とは一切の連絡も付き合いもない…。
ただ、二度目の結婚となる僕を圭子は受け入れられるかどうか心配で…」

圭子は不安げな顔をして自分を見つめるセルジオの手を取った。

そして、顔を見上げて極力静かに笑った…。

「話してくれてありがとう。でも、さつき私はあなたに言いました。過去を知るよりも今のあなた、これからの私たちについて話したいと。」

もちろん、過去あつての今ですが、でも、離婚なさつてお互いに問題はないのでしょうか？ だったら私は何も言うことはありません。私は今あなたが私を愛してくれていることが重要なのです。

今を大切に生きてゆきたいと思っていますから…。」

その後、セルジオは自分の仕事のことに触れたが、

父親の複数の会社の重役の肩書きを持っている

とだけ言った後は、口が重くなり話すのが辛そうに見えた圭子は、きつとなにか事情があるだろうと察した。

圭子は雰囲気を変えるために、新しいカフェを淹れて小休止をした後、

自分の日本での家族構成や両親のことを話した。

セルジオは圭子の話の後、聞いた。

「ご両親に心配させてまでこのイタリアに来たことは、圭子にとってよかったのかな？ それとも後悔したことがあるのかな？」

圭子はその両方にうなずいた。良かったと思つたことは何度もあつたから、

でも、後悔したことも良かったと思つたより多くあつた気がするから、

だから、両方を肯定した…。

セルジオは圭子をしっかりと抱いた。そして、

「苦しく辛い日々を何度も迎えたんだね…。」

圭子はくじけなかった…。でも、もう泣かないでいい。

哀しみや苦しみに出遭つたら、お互い分かち合えば、きつと後悔するような苦しみにはならないはずだから…。

僕も苦しかったら、圭子にすがろう…。
病めるときも健やかなときも共に分かち合えるから、
だからもう大丈夫だ…。きつと大丈夫だから…」

二人は先行きの一抹の不安が付きまとっていたが、
セルジオは圭子だけではなく、自分にも言い聞かせるように、
何度ももうもう大丈夫だからと言った…。

その後も未来に向けて話が弾んだが、圭子は話しの中で、
気になっていた彼の病についても触れてみた。しかし、
彼は主治医がついているし、そんな重病ではないから
心配は無用と言って一笑に臥してしまった。

二人の間にはいつまでも話の終わりは見えなかった。

圭子は寒さを感じたことを機に、時計を見ると午後三時を回っていた。
た。

ローマに戻る時間が近づいてきた…。

離れがたく、離れたら最後二度と逢えない気がしてならなかったが、
圭子は明日を信じて立ち上がった…。

碧い部屋にはさよならは言わないで、また訪れることを約束して…。

広い大きな庭園には次の機会の散策を約束して、そして、

セルジオの後ろを押すようにして部屋を出た…。

外に出た途端、圭子はプレネスティ 二の異常な寒さに肩をすくめていた…。

第18章に続く

第18章 “私の故郷”

第18章 “私の故郷”

あえて告げるような間柄ではなかったけれど、これを機会に、マルコとの曖昧な関係をはっきりとした形で、圭子自身が認識しておきたかったから…、セルジオも彼との関係の聞く耳をもっていると思ったから…、だから、帰りの車の中で圭子は未だ話していなかったマルコとの関係をセルジオに告げた。

相思相愛の恋人同士ではないけれど、少なくとも単なる友人ではないことを告げた…。同時にこの二年間、彼の家族とも家族同然の付き合いをしてきたことも告げた。その中で、お互いに異性として感じ合うこともあったけれど、いつもそれよりもより強い家族のような愛情が見え隠れして、彼は異性として愛の対象にはなりえなかったことも正直に話した…。

話し終えた後、第三者には理解し難い関係だけに、セルジオがどう思うか気になった。そんな圭子を優しく見つめたセルジオは「二人の関係は圭子たちを少しの間見ている段階で、僕には理解できていた。圭子が思っているように、兄妹のような愛情が二人の間にあることを感じていた。僕にはうらやましいほど仲良しの兄妹に見えた。だからその後、僕はマルコ存在を気にしないで圭子への思いを育てたるくができたが…。しかし、彼は心の片隅で女性としての圭子を愛しているのではないかと思う…。

だから彼を無視して僕たちの関係は成り立たないし、圭子の家族も含めて周囲の人たちに祝福されて結婚したい。もしよければマルコには僕から話そうか？」

圭子はセルジオが話してくれればそれに越したことはなかったが、自分たちの関係を聞かされたときのマルコのショックが解るだけに言い難くても自分が言おうと思った。

アパートの前まで来たセルジオは、車を止めて改まった口調で別れを言った。

「いずれ僕の家族と食事をすることになると思う。

日程が決まったらすぐ知らせるから、待っていてくれるね？

今日はこのままプレネステイ 二へ戻って、ゆっくりと過ごすつもりだ。

本当に今日は幸せだった…。圭子と夢のような時間を過ごせるなんて思ってもみなかったから、僕は今最高にうれしい…。今までの人生の中で、

こんなに気持ち安らいだ日を送ったことがない…。

圭子に出逢えたことを神様に感謝しなければいけないね。

…圭子には心からお礼を言いたい。ありがとう…。

身体？大丈夫だ。もう大丈夫だよ。だから、この先、

なにがあっても僕のこととは決して心配しないで。いいね？

約束をしてほしい…。何があっても僕を信じていてほしい…。」

そう言っただけで部屋に入る圭子を見届けて去って行った。

部屋に戻った圭子は、セルジオの顔が青ざめていたことが気になった。

それと今生の別れが長期間の別離が待っている

かのような大げさな最後の言葉が気になった…。

そして、彼がなぜかこのまま遠くに行ってしまうような気がした。

根拠はなかったが、僅か数日の逢瀬であったが、

ブレネステイ 二の丘でも、ローマのホテルでも、いつだって愛の確認をする度に、嫌な予感が脳裏を横切り、不安を募らせた…。幸せの女神に会う度に、圭子の心には、凍りつくような不安が襲いかかった…。圭子はいったんはソファに身を託したが、心配の余りその場にじっとしていられなり、すぐに立ち上がった。そして、部屋の中を意味もなく歩き回った後、決心をした。彼声を聞いて安心したかったけれど、運転中に電話を掛けることはできなかつたし、たつた今別れたばかりで、電話を掛けるのも少しだけ恥ずかしかったから、メールを書くことを決めた。

「あなたはもしかしてこのまま遠くへ行くつもりではありませんか？なぜか私はそんな気がしてならないのです…。気のせいであればいいのですが…」

圭子は焦るあまり、短い文面で一通目のメールを送った後、すぐに二通目をしたためた。

「もしかして、あなたは私に今のすべてを話してはくれなかったのでは

ありませんか？私との約束を破って、あなたの苦しみの中に、一人だけで埋没しようとしていませんか？」

二通目は中途半端な形で、圭子の意思ではなく勝手に送られてしまった。

それでも言い足りなくて、三通目を書いた。

「あの碧い部屋に入ったとき、私はなぜかとても懐かしく思いました。

不思議な感情でしたが、それはローマのホテルで初めて会ったとき、あなたの香りを懐かしく思ったそのときからの続きのような気がし

ます…。

めぐり逢った最初のあの日から、あなたは私の生きる場所
だったって気がついていました…。

だから、あなたが僕の故郷だと言ったあの村を初めて訪れた昨日、
この村は私の故郷にもなるのかもしれない、
という予感さえ私には既にあつたのです。

村もあなたも私には既にかげがえの故郷になつていたのです。
だからあなたと共にいるとどんなにか安らぎ、心が癒されることか
…。

あなたといるとこんなにも優しく不思議な気持ちになるのです。

あなたは私の生きる場所だったので…。だからお願い…。」

圭子はメールを送信しながら、もしかして、手遅れなのかもしれない
と思つていた…。

セルジオは最後の別れを言った後は、既に旅路支度をして去る準備
をして

いるように見えたから…。

それを解つていながら、自分は止めることができなかつたから…。
だから、圭子は今、とても後悔をし、哀しみの涙の中を彷徨い始め
ていた…。

そして、そんな自分にもどかしくなつて、セルジオの携帯に電話を
掛けただけで、

何度掛け直しても電話にはつながらなかつた…。

第19章に続く

第19章 惜別の日

第19章 惜別の日

圭子は電話で呼び出すのを避けて、メールにしたことを後になって後悔した…。

何度かけてもつながらない電話に不安が募り、暗くなるまで心細い時間を過ごしたからだった。

いつまでもつながらない電話を母からもらったお守り代わりの勾玉のストラップを握りしめて待ち続けていたからだった…。

そして、セルジオからの連絡をもじっと待ち続けていた…。

そんな中、午後三時過ぎ、マルコがいつものようにドアをノックした。

午後の休憩時間を利用して三十分ほど圭子と共に、

お茶を飲むのがマルコの楽しみでもあった。

圭子は慌てて身だしなみを整え、薄暗くなっていた

リビングに明かりを点けてドアを開けた。

彼はご機嫌が良かった。変わったことはなかったか？と圭子に聞きながら軽くハグをして、いつものようにリビングのソファに座った。

しかし、いつもと異なる寒々しい部屋の雰囲気をいち早く

察知した彼は、ドアの前に立ち尽くす圭子に視線を移し、

下心があるときの鋭く光る目つきに徐々に変わっていった…。

圭子は構えた。自分の心を僅かでも見せてしまった悔いの中で、

マルコからどう逃げようかと思案した。必死に考えた…。

しかし、マルコは慌てる圭子も見逃さず、獲物を捕らえた

ハンターのような目つきで、ドアの前に立つ圭子の傍に歩いてきた。

そのとき、突然、圭子の手の中の携帯電話の呼び出し音が鳴り響い

た。

部屋中に緊張感が漂っていたそのときだったから、二人は飛び上がりばかりに驚き、圭子は思わず握り締めていた携帯電話を床に落としてしまった。

そして、気がつけば目の前のマルコにすがりつく自分がいた…。

すぐさま身体を離そうとしたが、その行為で気を良くしているマルコを

目の前にした圭子は、とつさに彼に甘える振りをし、徐に身体を離して電話を拾い上げた…。

身体の中にはマルコを騙そうとした自分の汚さをとがめる悔いが充満していたが、今は許しを請う余裕がなく、呼び出し音が鳴り続ける

携帯電話を焦る手でもどかしく開き電話に出た。

電話の相手はプレネスティ 二の館に詰めているジョルジョであった。

昨日、セルジオから世話係と紹介された初老の彼は、セルジオの幼い頃から今まで長い間、付き添っていたと聞かされた。そのとき、圭子は初めてセルジオが多くを語りたがらない上流社会の世界を垣間見た気がした。

館では挨拶程度の会話しか交えていない相手であったが、電話の先の彼は慌てている風で、挨拶もそこそこに用件を切り出した。

「圭子さん、これからプレネスティ 二に来て頂けませんか？お迎えのお車は

既にそちらへ向かっております。事後承諾で申し訳ありませんが…」「えっ？今からですか？でも、この場所はお判りなのですか？」

マルコがいるからそれ以上のことは口にすることはできなかったが、

ジオルジヨは今度は落ち着いた声で圭子の質問に答えた。

「住所が判つていますから大丈夫です。ご心配には及びません」とだけ答えて電話が切れた。

電話で話し終えた圭子を待つようにして、マルコは誰から？と聞いてきたが、

友達のお父さんから、と答えた圭子は

「友達になにかあったようなの。だからすぐ出かけなければならぬから」

とマルコを部屋から出て行くように促した。

マルコの表情から疑っていないことを確認した圭子は、素直に彼にお礼を言い、

部屋から送り出した後、すぐさま身支度を整えて自分も部屋から出た。

そして、さっきの電話はセルジオの携帯からであることを承知していた圭子は、

歩きながら彼の携帯に電話をした。ジオルジヨが電話口に出た。

なぜジオルジヨがセルジオの携帯で電話をしてきたのか気になったが、

それはプレネステイ 二に行ってから聞こうと思ひ、

車はピラミデ駅の前で待つように運転手に指示してほしい旨を伝えた。

マルコに迎えの車に乗るところを見られたくないからであった。

プレネステイ 二には昨日と同様に一時間足らずで着いた。

館の玄関で待っていたジオルジヨは挨拶もそこそこに、

庭に建つ彼のアトリエである碧い部屋へ圭子を案内した。

午前中までセルジオと共に過ごした思い出深い部屋であるにも関わらず、

二人がいた形跡のひとつも残っていないことが、圭子の胸騒ぎを

なお一層大きくし、傍にいるジオルジヨに助けを求めた。

彼は悲しげにうなずいた。そして、圭子の目を見て言った。

「セルジオはローマから戻ってからのこの部屋に入っていましたから、その間に掃除やら片づけをしたようです。あなたをお呼びだてしたのは、

見ていただきたいものがあるからです」

そう言って部屋の中央にあるキャンバスを指差した。

昨晩は窓際に後ろ向きに立て掛けてあったものだ。

覆いを取ると碧い色一色に塗り潰されているキャンバスが目に入った…。

が、しかし、その碧い色の下に文字の書かれているのが透けて見えていた。

ジオルジヨもそのことに気が付き、圭子を呼び出したと思われる。

窓際までキャンバスを動かし、外光に当てると文字がはっきりと浮き出てきた。

光は文字を探し、一文字一文字に丁寧に光当てている…。

そして、碧い絵の具に隠されていた文字は、光に反応して静かに浮き出してくる…。

その様は、まるで生き物のように動きがあり、生々しさがあつた…。

すべての文字が碧いキャンバスに浮き出したとき、

圭子は胸の動悸を抑えながら、無言で読んだ。

「この部屋は誰にも干渉されてはならない。

僕の人生の最後はローマでもなく、モンテカルロの家でもなく、

この自然に囲まれたスローライフを営むこの丘の上の村で終わる。

自然の中で生きる仲間として、常に自分を見失うことなく、

ここプレネスティ 二の村の生あるものたちと共に生き、

生涯の終わりはこの碧い部屋で迎えたい…。

そして、僕の生への別れの時が来たならば、

この部屋に多くの友人を呼び、別れの儀式を執り行う…」

不吉な文句のようにも思えるが、圭子にはセルジオのこの部屋に対する思いを

痛いほどこの文章から読み取れた。

また、昨晚、二人だけで結婚の契りを結び、未来へ向けての出発点として、

いかに彼がここを大切に思っているのかを理解している圭子には、この言葉の持つ意味は、過去への惜別の言葉であり、

これから自分らしく生きるための意志を自ら確認したのではないかと思われた。

ジヨルジヨは今日セルジオはパリに発ったことを圭子に伝えた。

やはり、過去に惜別するためにパリへ向かったと伝えた…。

圭子は悲しみの涙ではなかったが、急に胸に込み上げるものがあり、大粒の涙を流しながら、今日、朝焼けの空を仰ぎながらセルジオが言った言葉を思い出していた。

“僕は昨日までこんなに君を愛せるとは思ってもいなかった…。

こんなに圭子を愛することができるとは思ってもみなかった…。

だから僕はどうしても生きながらえなければいけないんだ…。

圭子の目を見て、前を向いて生きてゆかなければいけないようになったから、

虚構の世界を彷徨するわけにはゆかなくなったから…。

君をこんなに愛したばかりに、僕はもう後ろを向いて生きてはゆけない…。”

第20章に続く

第20章 地平線の向こうに

第20章 地平線の向こうに

ジオルジヨはセルジオはパリに発ったことを圭子に伝えた。過去に惜別するために、パリへ向かったと何度も圭子に言った…。そして、決して口外してはならないとセルジオに口止めをされているが、

あなたにだけは話しても罪にはならないだろうと言って、過去の何に対しての惜別なのかを話したいと言った。

そう言っつてジオルジヨは、窓際に立つ圭子をリビングに案内した。

ソファにお互いに向かい合っつて座った。

ジオルジヨは手馴れた手つきで、圭子の前で紅茶を淹れ、自分も一息ついてから話し始めた。

圭子はそのとき初めてジオルジヨの顔をまじまじと見た。

年輪が程よい皺となつて顔に出ていた。

そして、全身から気品と風格、人を見る目に敬意を示した優しさも漂つており、世話係というよりは、

映画の中に出てくるような物事を的確に処理する

利発な執事と言つた方が似合つていと圭子は思った。

素敵な初老の紳士を前にした圭子は、もし、ジオルジヨの言つ通り、幼い頃からセルジオの面倒を見てきたとすれば、

セルジオはジオルジヨの影響を大きく受け、きつと何事にも冷静に、諸事につつがなく人間味あふれる対処ができるのだらうと思つた。

それほど圭子の前に座る初老の男性、ジオルジヨからはヒューマンに満ちた温かなオーラが放たれていた…。

「圭子さん、あなたのことはローマのホテルでの初対面から、

今日までのことを彼から聞かされています。その中で、あなたはいち早くセルジオの病に気がついたことも聞いています。…そうなのです。彼は長い間心臓を患っています。

今も常々主治医の監視下にいるようなものです。

しかし、二年ほど前ですか、病状が悪化してきたことから、手術を勧められました。でも、セルジオはそのときも今もずっと手術を拒み続けているのです…。

でも、どんなに頼んでも手術には応じなかった彼が、

昨日、何を思ったのか、モンテカルロにお電話をなさって、お父上に友人の外科医に診てもらいたいと頼んでいらっしやいました。

その方は心臓病の権威でいらっしやいます。

セルジオは心臓の治療を本格的になさろうとご決心をなさったことを、お父上への電話で私は解りました…。

彼は一刻でも早く病気を治したいと思ったのでしよう、今日、パリへその外科医を訪ねて発ったのです」

少しだけ悲しそうな面持ちであったが、ここまで話したジョルジヨは、

責任を果たし終えたように、自分の言葉に安堵し、小休止をした。

キッチンからクッキーを持ってきたジョルジヨは、冷めたお茶を淹れなおし、

クッキーを圭子に勧めてから、再び話を続けた。

「今までどんなに苦しくても痛みがあっても手術には応じなかった彼は、

圭子さんにお会いして心変わりをなさったと思います…。

生きる望みを持たれたのです。あなたとの世界に生きたいがために…。

そして、お父上の親友でいらっしやいますその外科医に関しては、お父上も心臓を患ってその医師のお世話になり治癒なさったことで

すし、
立派な外科医でいらっしやいますから、安心してお任せできるので
すが…。

私がとても気になるのはこのお部屋のことなのです。ここは普段鍵
が掛っていて、

誰も無断で入れないはずが今日は鍵が開いていたことです。

この部屋だけはどんなことがあっても、今まで鍵を掛け忘れることは
なかったのですし、もしものことを考えて、身辺整理をしたのでは
ないかと

思われるほど、綺麗に整理し掃除までしていったセルジオが、
鍵を掛け忘れたとは思えないのです…。

私が入って鍵を探す間にこのキャンバスを見つけた次第です。

あなたのことは今日、発つ前になにかあつたら面倒を見てほしい、
と連絡先の入ったこの携帯電話を預けてゆきましたので、

思わずあなたを呼び寄せてしまいました…。お許しください…」

圭子はセルジオのパリ行きは、未来に向けて大きな決断をしたから
だと

聞かされて安堵したが、常に物事に対してひるむことなく即刻、
決断するセルジオなのに、今まで自分の身体の状態を知りながら、
治療に専念しなかった原因は一体なんだったのか、圭子は気になっ
た。

そんな圭子を慮ったのか、ジョルジヨはなぜか空を仰ぐようにして、
テーブルの端を見つめながら再び話し始めようとしていた。

ジョルジヨの様子から話そうとしていることの内容が予測できた圭
子も、

その場の雰囲気呑み込まれ、身を硬くして構えていた。

「…セルジオは前の奥様のことでずっと意地を張って生きました。

私は彼の性格も根性もなにもかも知っているつもりでしたが、

まさか、二年もの間、屈辱の苦しみと悔しさの中で生きるとは思っていませんでしたから、私は毎日の彼の拳動が心配で…。というのも、奥様が家を出て行ったそれ境にして、急にそれまでとはまったく異なり、冷静さを失い、時には自暴自棄になつて一週間もお酒を飲み続けたり、食事を取らなかつたりして、自分の身体を苛め抜きました…。苛め抜くことで嫌な思い出を払拭なさろうとしていたのではと…。前妻と彼とのことはご存知ですか？なぜお別れになつたのか？」

丘の上のプレネステイ 二は地平線の向こうに太陽が今や沈もうと
していた。

長かつた今日への別れが始まり、明日に向けて荘厳なまでに静かで優雅な残照を残して去りゆく太陽は、ゆっくりと丘から消えようとしていた…。

圭子はその余韻の中で、明日の陽光に巡り会う朝までに、今まで拒否してきた彼の過去を聞こうと身を構え、パリにいるセルジオに呼びかけた。

“これからジョルジョからあなたのどんなことを聞こうとも、私はあなたの言うとおり、何も心配しない。

だってあなたの世界にジョルジョのように私も入ることができるから…。

苦しみも哀しみも分かち合うことがようやくできるから…”

第21章に続く

第21章 バラ模様の箱

第21章 バラ模様の箱

ジオルジヨは話が一段落したことで夕刻になって気温が下がり始めたことから、碧い部屋を後にし母屋へ圭子を案内した。

重厚な雰囲気にも包まれた広いリビングには、中央奥に設けられた大理石造りのマントルピースに既に火が入り、暖かで優しい空間が用意されていた…。

圭子は目の前でカフェを用意して自分をもてなすジオルジヨに、突然、懐かしさを思っていた…。

なぜか懐かしい香りがする彼の傍らにいる自分が幸せにも思えた…。

口には出せなかったが、セルジオを思う共通の気持ちを持ったジオルジヨの傍にいと安堵し、

安らいだ気持ちになることを、圭子はこのとき知った…。

圭子はセルジオが描いたのであろうか、

マントルピースの上に架けられている一枚の絵画に気がついた。

それは水平線の彼方から上がる日の出を、

背を向けて眺めている少女の絵だった。

圭子は昨日、初めて訪れたのが夜であったことで、

この絵に気がつかなかったことを少しだけ後悔しながら眺めていると、

ジオルジヨが後ろから声を掛けてきた。

「それはセルジオの作品です。コートダジュールの海辺で、いつも寂しげに海を眺めている女の子をスケッチしたと言っていました。」

でも、その子はいつも朝日を眺めているのではなく、

夕刻の寂しげな海原を眺めていたんだと言っていました。でも、そんな子供をキャンバスには描きたくなかったのでしょうか。スケッチと記憶を元にして昨年、ここで完成させた絵がこれです。眩しい朝日に向かって立つ女の子ですが、後ろ向きの姿に一抹の寂しさを感じさせますね…。

私はこの絵が大好きで、セルジオに無理を言っただけ飾らせてもらったのです」

笑いながらジョルジョは圭子にそう言っただけ説明をした。そして、思い出したように膝を叩き、

「忘れるところでした。まだお話をさせて頂きたいのですが、その前に

セルジオから預かっているあなたへのプレゼントをお渡ししたいと思います」

そう言っただけそそくさとリビングから出て行った。

数分後、大きな箱を三つも抱えてジョルジョは戻ってきた。

「パリに発つ前に圭子さんに直通電話が通じるからといって、携帯電話とこの箱をセルジオから預かりました。

あなたに渡してほしいと言われましたが、

あなたはもしかして受け取らないかもしれない、とも。だから、もし、受け取ることを拒んだら、その時は無理に渡さないでほしい。

あなたの気持ちを大切に、と言われました。

パッケージから察すると多分、洋服が入っていると思います。

彼の家族との会食の日のためのものと思われませんが…」

そう言い置いてジョルジョは気を利かせて奥へ引き上げた。

赤いバラの花の絵柄が美しい大きな箱が二つ、
小さな箱が一つ、テーブルの上に置かれている…。
出逢ったその日、作品を入れて持っていた圭子の紙袋が

赤いバラの模様であることをセルジオは見逃していなかったから、この箱も赤いバラ模様であり、昨晚のディナーテーブルに飾られていた

一輪の花も赤いバラだった…。

セルジオが残したバラの絵柄の三つの箱を眺めていた圭子は、セルジオに無性に逢いたくなくなった…。

無理と知りつつも今共にここにいてほしいと願った…。

いてほしかった…。そう思った途端、逢えない切なさから、突然、涙がほとばしった…。圭子は誰もいなかったから、

涙を拭うこともせず、箱を抱きしめて思い切り泣いた…。

一つの箱には清楚な色合いのブルーのワンピースが入っていた。

二つ目の大きな箱にはグレーのつばの狭い帽子と手袋、そして、

オフホワイトのショールが、そして、三つ目の小さな箱には靴と

銀ラメの入りの正装用のバッグが入っていた。

そして、その箱の一番下には、封筒に入った

手紙と共に箱に入った真珠のネックレスが入っていた。

圭子の気持ちが落ちついた頃を見計らって、入れ替えたお茶とクッキーを持ってジョルジョが圭子の前に現れた。

圭子は箱をもう一度開き、ジョルジョに中の物を見せようとする、彼は箱の上に手を置いて

「箱は開けなくていいのですよ。私に見せる必要はないのですから。でも、あなたはお優しい。こんな下僕にまで見せようとなさるその心根が

セルジオの心を動かしたのですね。私がもう少し若かったら、あなたを

きつと離さないでしょう。きつとお二人とも幸せになると思いますよ。セルジオをよろしくお願いいたします」

しかし、圭子はそつと笑いながら箱を開け、ジオルジヨに見せた。「私にはあまりある品物ばかりです。こんな高級な品々は身に着けたことはありません。でも、セルジオが私のために選んで下さったものです。」

ご家族に気に入られるような洋服なのでしょう。

初めてお会いする私にとつても気に入られる身仕度は必須条件ですから、

だから気持ちよくこれらを頂きます。ありがとうございました…」

ジオルジヨは圭子の言葉の一つ一つにうなずき、うれしそうな顔をして

圭子の顔を見つめていた。そして、お茶が終わると

「前の奥様とセルジオの離婚のいきさつをお話しましょうね。」

お辛いかも知れませんが…。でも、彼のすべてを知っておいてほしいのです。私のためにも。なぜって？セルジオ同様に私もあなたと苦しみも喜びも共有できるからですし、分かち合えるからです。

もちろん、お二人の幸せまでは共有するつもりはありませんから、安心なさってください」

ジオルジヨは優しく笑いながらも、これから話す内容が相手には辛らつなものであることから、いくらなしが身構えて、圭子の顔を見た。

しかし、圭子はジオルジヨの気遣いがうれしく、これから聞く話の中に

何があるうともセルジオを信じ、未来へ向けての自分の覚悟をしっかりと見つめようと決っていた。

圭子の手には、箱の中に入っていたセルジオの精一杯の

愛の告白と感謝の言葉が連ねてある手紙が握られているから、だから勇気が出、決して心の揺らぐことのない覚悟もできていた…。

第22章に続く

第22章 セルジオの手紙

第22章 セルジオの手紙

ジオルジヨはセルジオの過去を圭子に話すのを躊躇っていた。愛する人がパリに旅立った寂しさを少しでも癒す時間を与えず、なおも圭子を悲しませたり、苦しめたりするのが哀れに思ったから、自分から話そうと言い出したにも拘わらず、躊躇いが大きかった。圭子はさっきのジオルジヨの気遣いの中に未だいたが、ジオルジヨの躊躇いには気付かず、その間、セルジオが残した自分への手紙を心の中で再び開き、無言で読み返していた…。

“この手紙を読む頃、僕はパリにいると思う。”

なぜ圭子に黙って発ったのか…、君はきっとそう思うだろうね。僕は君と別れた後も歓びの中にいる圭子を守りたかったからだ。昨夜から続く幸せの中に少しでも長い時間いてほしかったからだ…。数時間でもいい、僕たちの幸せな時間の中にいてほしかったから、だから何も言わずに発った…。ジオルジヨには何も言つなと言いついてきたが、

彼はこの箱を渡すときに僕との約束を破ることは

目に見えていたし、僕も圭子に僕のすべてを知ってほしいから、

だから、今は圭子にパリ行きの理由を話したいと思っっているのです

…”

ここで、一枚目は締めくくってあった。

二枚目の便箋には一枚目とは異なり、セルジオの思いがほとばしるように

して、びっしりと文字で埋め尽くされていたが、圭子はその文面の一言一言を反芻し、胸の内にとっかかりと記憶した。

悲しいときも嬉しいときも、どんなときもいつでも記憶を紐解いて、

読み返すことができるように、記憶した…。

“僕は昨夜、あの碧い部屋に圭子と共に生きる決心をしました。今までの僕はすべてを失ったと思っていたが、圭子と出逢ったことにより、

僕はもう一度セルジオ・カルツェイという人間を振り返り、反省し、出直したいと思ったのです。圭子に会って初めて自分の生せいに対する愚かな思いに気づかされたから、やり直したくなったのです。

それは君の生へのひたむきさ、人に対する愛情の深さ、物事に対する賢明さ、そして、湧き出る英知に心を打たれたからでもある。

あの日、部屋で日本食を食べただろう？あの時、伝統的な日本の弁当の

説明をしてくれたね。その中で弁当の四つの仕切りの話は僕に大きな感銘を与えた。それは食べる人の気持ちをとことん考えて、同じ類の食物を一つの仕切りに集めるのは、

お互いの匂いの相乗効果を考えることだからというくらいだった。そこまで考えて弁当を作る日本人の気持ちがうれしかったし、食べる人のことをそこまで思いやることに驚きを隠せなかった。

そして、もうひとつ、食べた後、弁当箱を洗う圭子の物に対する思いやりの深さ…。

とにかく、物や人を大切に考える君に目から鱗だった。

恥ずかしいことだが僕の今の生き方は生への冒流とすら思えてきた…。

神様が与えてくださったこの命を僕は無駄にしようとしていたからです…。

だから、圭子にふさわしい人間になるよう、まずは僕に与えられたこの命を守ることから始めなければいけないと思ったのです。それと愛する人にようやめぐり逢えたから…、心身共に健康になり君と張り合って人生を生きたいから…、

そして、帰ったらあのキャンバスに君と僕の未来を重ねたい…。だから少しの時間を僕に下さい…。

僕の故郷のプレネスティ 二の碧い部屋で待っていてください。心配は要りません。世界で一番の名医(?)に僕の命を預けるのですから。

それと世界で一番愛するひとがこの丘で待っていてくれるのですから、

僕は必ずプレネスティ 二で待つ君のところに戻ってきます…。”

圭子は懐かしい香りがするプレネスティ 二の風の中で、

セルジオと過ごす数カ月後の生活を夢みながら、

心の中で手紙を読み続けていた…。

第23章に続く

第23章 ジョルジョの哀しみ

第23章 ジョルジョの哀しみ

頃合いをみてリビングに戻ってきたジョルジョは、今度は果物とコルネットを入れた籠を手にかけていた。それらをテーブルに置くと、

「この丘は夜になると一気に四、五度気温が下がるのです。寒いでしょう。」

もう少し暖かくしましょう。それと夕食までにはまだ時間がありますから、

これらをおやつのもりで食べてください。それともし、よろしければ

今夜はこちらにお泊りになられたらいかがですか？

私はまだお話を続けさせてもらわなければなりませんから、今夜ゆっくりとお時間を頂ければ、うれしいのですが……」

と言ってジョルジョはマントルピースに薪を足した。

圭子もなぜか今日はローマへ帰る気にはなれないでいたから、ジョルジョの申し出を受けることにし、即答した。

「ありがとうございます。私もなぜか今夜はローマに帰る気持ちになれないのです……。彼の病気がことが心配で、ローマに帰っても落ち着かないと思いますし、こんな晩にセルジオの過ごしたこの家で、

幼い頃から親代わりになって面倒を見てきたジョルジョさんと一緒に過ごさせてもらえれば、気持ちが悪く落ち着くと思います。

それとジョルジョさんと一緒にあれば私はどんなにか心丈夫かしれません……。

お言葉に甘えさせて頂いてよろしいですか？

明日の私の予定ですか？大丈夫です。こちらに来る前に
仕事先には連絡を入れておきましたから」

ジヨルジヨはうれしそうにうなずき、マントルピースの前の
一番暖まる特等席だからと言って、深紅色のソファを圭子に勧めた。
「まず私のことはジヨルジヨとお呼び下さい。セルジオの未来の奥
様に

なられる方ですし、親しみをいただけるようで私はうれしいのです
から」

そう前置きをした。圭子はうなずいた。ジヨルジヨと呼ぶことが
圭子にとっても親しみが倍増するようでうれしかった…。

「セルジオは四年ほど前に結婚をなさいました。

お相手はフランス人で名門のお嬢様でした。

同じフランス人の父上のお目に適ったお嬢様であったと思います。

セルジオもメデイチ家の末裔のお母上の子供ですから、

名門ということでは負けませんが、なにせお相手はそれよりも

歴史的にも名高く、ヨーロッパ中にその名を轟かせた

ハプスブルグ家の系統を引き継ぐ名家でした。

お父上は家と家とのご結婚ともいえる大変なことを、息子のセルジ
オに

背負わされたのです。もちろん、セルジオもそれは重々承知してお
りました。

お相手を心から気に入ってご結婚を決意したとは思えませんが、

しかし、セルジオも納得して結婚したのでから、

愛することができると思っていたと思いますし、

事実、ご結婚当初はお二人ともお幸せそうでした。

いつもご一緒に散歩をなさったり、乗馬を楽しんだり、

ヨットで遠出をなさったり、傍もうらやむ仲だったのですよ。

でも、結婚して1年ほど経った頃から、お二人の別行動の回数が多

くなりまして…。

傍目にもお二人に不協和音が発していることが判るようになりまして。

その原因は色々ありましたが、すべてに共通していたのは家柄の格の違いを常に全面に出し始めた奥さまの言動でした。

マリー・アントワネットの時代に遡るお話は、夜な夜な

奥様のカトリーヌ様から常に聞かされていたようです…。

ここだけのお話ですが、私から言わせてもらえばフランスでは当時から滅びゆく名家でもあったでしょうにね。

また、奥様側のフランスの習慣とセルジオ側の習慣の違いも、原因の一つに挙げることができたと思います」

ジョルジョはここまで一気に話し続けて喉を渴きを覚えたのだろう、マントルピースの棚の上に置いた飲みかけたカフェを手にし、また話を続けた。

「その一つの例を申し上げます。」

奥さまはフランス式のパーティーがお好きでした。

豪華な洋服と豪華な食事、退屈なスピーチ、そして、社交ダンスなど。

でも、セルジオはイタリア式のパーティーに拘り、

庭で開くガーデンパーティーや屋内だったら立食パーティーなどを

主張なさった…。洋服もラフな格好で参加できますし、親戚縁者、友人、

そして、近所の誰でもが参加できるそんなパーティーを開きたかったのです。

フランス人のお父上に似ず、イタリア人のお母さまに似ているセルジオは、

考え方もイタリア式でしたから、それがお父上にも気に入らなかつたようで、

いつもお父上とも意見の相違で衝突が絶えませんでした…。

そして、奥様とも意見が食い違ったまま。どちらも譲らずいつも喧嘩のような状態で終わるのです。

家柄の相違は奥様がこだわったことですが、その結果、奥様はお父上以外、セルジオ家族を上から見下ろすようなそんな雰囲気が生じてきたのです。

それがはつきりしたのは、ご結婚して二年目の夏、ご懐妊なさっていた時です。

その頃のお二人の仲はまだ修復可能な範囲にありましたので、子供ができたことをきっかけに、お二人の仲が元に戻ればよろしいのにと、

私は願っておりましたが、結果は裏腹に最悪の状況を生み出してしまいました。

ジオルジヨはその先を話すのが辛いのか、圭子に言った。

「少し休ませてください…。私は当時を思い出すのが未だに辛く、悲しくなってしまうのです。もしかして話している途中で、圭子さんに

私の涙を見せるかもしれません…。もしそうなくても気になさらないで

下さいね。年を取りますと涙が安くなるものですから…。」

圭子もジオルジヨが悲しいと言ったセルジオの過去を聞くための心の準備を整えた。

いつものように胸に掛けた勾玉のネックレスを握り、母親の面影を追いながら、

心静かにジオルジヨの話に構えていた…。

第24章 哀しい過去

第24章 哀しい過去

ブレネステイ 二の丘の初秋の風は冷たく、夕刻になってカルツティ家の家を取り巻くようにして流れ始めた風の音が冷ややかになってきた。ジオルジヨは冷え込みがひどくなる前にと行って、窓の雨戸を閉め、分厚いカーテンを引くとマントルピースの前に戻った。

そして、時を足しながら、いつの間にも持ってきたのだろうか、手に持っていた甘栗を火の傍に置いた。

セルジオは栗の皮が解ける頃合いを見定めるのが上手だったと言いながら、ジオルジヨは火の傍らで栗を転がした。

圭子は初めて見る光景だったから、うれしく、栗の焼けるのを子供のようにして待っていた。

ジオルジヨはそんな圭子を優しく笑いながら見つめた。

「近い将来、私はセルジオと一緒にこのマントルピースの前で、幼子のようにはいしゃいで栗の焼けるのを待つ圭子さんの姿を見ることができそうですね。…早くその日が来てほしいと心から思います」

マントルピースの前で圭子に背を向けたまま、数個の栗が程よい具合で

焼けるのを待つジオルジヨは、そうやって話の続きを始めた。

「奥さまは生まれてくる子供のために実家へ帰ると言いだしたので

す。
カルツティ家では子供の養育に支障が出ると言わんばかりでした…。セルジオは大きなショックを受けました。屈辱を受けたショックで

す。

でも、ショックだけでは終わりませんでした…。
唐突に実家に帰ると奥様から告げられた時の場所が問題でした。
折り悪しくも乗馬をなさっている時だったのです。
それが運命の分かれ目でした。

馬鹿にされた怒りでセルジオは馬を急発進させたのです。
それだけで終われば良かったのですが、その急発進の際、
奥さまの馬が驚き、奥様の馬も急発進なされた…。

走り出す心の準備ができていなかった奥様でしたし、
ご懐妊ということとで横座りで馬の上にいちゃったから、
疾走する馬から投げ出されて大怪我を負ってしまったのです。
お子様もその折に亡くされたのです…。

この事件が今までの生活のすべてを塗り替えました。
当然ながら離婚を持ち出され、高額な慰謝料の請求、
その上、相手は弁護士を雇って刑事事件として告発なされた…。

決してセルジオ一人が悪いわけではありません。

奥様への注意が不足していたことは確かですが、刑事事件になさる
とは…。

でも、セルジオは自分の子供を自分の手で殺してしまったと悔やみ、
悲しみ、苦しみ、その償いの一環として、相手の言いなりになり、
事件への罪を認めてしまったのです…。

彼は自分の存在をこの世から消したかったのかもしれない。
以来、屍のような生活が始まりました…。

子供への償いのためでしょうか、心臓の手術が決まっていたの
に、

手術を勝手に延期し、発作が出るときのみ薬を飲むという今です。
彼は自分を責め抜き、苛め抜くことで子供への罪滅ぼしをなさって
いるとしか思えません。例えそうであってももう許されていいでし
ょう。

もう、前を向いて生きて欲しいのです…。

でも、私のそのたつての願いを圭子さん、あなたが叶えてくれました。

私はどんなにあなたに感謝してもし足りないほどです…。ありがとうございます…。」

ジオルジョは辛そうに当時を振り返り、セルジオの過去と今を圭子に告げた。

しかし、話し終わると悲しみにこらえ切れず、圭子の前で嗚咽とともに涙を流し始めた…。

しかし、ジオルジョは休むことなく涙声のまま話を繋げた。

「でも、まだ安心は出来ないので…。セルジオは奥様のカトリーヌ様との

問題だけではなく、お父上ともお心を通じ合わせる事ができなくなって久しいのです。

お互いに意地を張っている部分もありますが、セルジオがお母上の母国である

このイタリアを拠点にして生涯を生きると決めた国籍選びのときから、

二人の関係は険悪になりましたね…。お父上はセルジオにフランスを国籍を選んでほしかったから、彼がイタリアを選んだときには、

激怒なさいました。それ以来、セルジオはあまりご実家のあるモンテカルロには

お戻りにならなくなりました。今回の心臓の手術の件で、

お二人の心に変化が見られればうれしいのですが…。」

ジオルジョがどれほどセルジオを愛し、心配しているのか…。

パリにいるセルジオにこの気持ちが通じますようにと、願いながら圭子はそつと勾玉を握り直した…。

プレネステイ 二の丘には哀しみに満ちた夕暮れ時が迫っていたが、

その哀しみを打ち破るかのように栗の皮がはじけて破れる音がした。哀しみの淵にいた二人は思わず顔を見合わせて笑った…。そして、束の間の笑いに、圭子は明るい未来をすがつた。

“ パパ、ママ、いつだって言ったわよね。過去は未来のためにあるんだ。

しかし、未来を作るのは今日、今なんだから、昨日失敗をしても恐れてはいけないよ。

明日という未来は今から作るものなんだから。過去が作るんじゃないんだから。

そう言ったわよね？だからセルジオは今に生きるって言ったから、もう大丈夫よね？私は彼の今を信じていいのよね？”

第25章に続く

第25章 苦渋の嘘

第25章 苦渋の嘘

ブレネステイ 二から戻り、二ヶ月ほどの経過があった初冬のある日、

圭子はマルコと共にジオルジョに呼び出されて、セルジオと初めて会った

ホテル・ビラ・リーベラに向かっていた。

車を運転するマルコは、圭子とこうして出かけるのは久々だからうれしいと言いながらも、ジオルジョがどうして圭子のことを

知っているのか判らないし、どうして自分と一緒に来てほしいと

言ってきたのか、皆目見当がつかないと不思議がっていたが、

まずはお得意さんの呼び出しを尊重しなければならぬと、

言い聞かせ、圭子と共にスペイン広場を目指して車を走らせていた。

しかし、呼び出しの訳を知らないのはマルコだけで、圭子はなぜ今日ジオルジョにこうして呼び出されたのか判っていたから、

マルコの辛く顔を見ることができなかった。

ジオルジョは昨晚遅く、圭子に今日の呼び出しの目的を電話で伝えてきた。

パリにいるセルジオの指示であることは言うまでもないが、

ジオルジョの考えもあって、圭子を助けるための狂言を

マルコの前で打つことになったからと言った。

というのも、まだ圭子がセルジオとの関係をマルコに打ち明けていないことを

セルジオは心配しているからとジオルジョは付け加えた後、

「圭子さんはなにも心配なさないでいいのです。」

いつまでも彼に黙っている訳にもゆかないでしょうし、だからといって圭子さんが伝えたのではマルコはひどく傷つくと思いますよ。ですから大きなショックを与えないで済む方法を思いつきましたので、安心なさってください」
そう言つて今日、ホテルまで二人でやつて来ることを望んだ。人を騙すことは決して本意ではなかったが、ジオルジョの案に従うしか圭子には術のないことで、昨夜、今日を約束した。

ホテルに着くとフロントに行くまでもなく、

ジオルジョがロビーの片隅から二人に向つて歩いてきた。

そして、優しい笑いを浮かべ、腰を低くしてマルコに挨拶をした。

「マルコさん、お元気そうですねによりです。今日はお呼び立てしまして申し訳ありません。」

セルジオの願いを私が代弁することになりましたが、

実はマルコさんに協力をお願いしなければならぬことがあるのです…。

…そうそうこちらのお嬢さんは圭子さんでしたね？セルジオから聞いております。

このお嬢さんにも来て頂く方が良くとセルジオが申しますので、突然で心苦しかったのですが、お二人にご足労をお願いした次第です。

まずはお茶でも頂きましょう」

ジオルジョの案内で、ロビーの片隅に三人が座ると同時に、待ち構えたかのように、バラの模様が入った箱を三つを抱えた青年がやってきた。ジオルジョの前にその箱をおもむろに置くと、青年は三人に一礼をし帰って行った。

時を同じくしてカフェが運ばれてきた。ジオルジョはテーブルの上に置かれた

三つの箱を下に降ろし、ウェイターにカフェを並べさせた。

ウェイターが去ってゆくと、ジョルジヨはもみ手をしながら口を開いた。

「早速用件に入らせて頂きますが、よろしいですか？

カフェを飲みながらお聞きくださって構いませんから」

そう言った後、マルコの顔を見つめ、隣に座る圭子には、

少しだけ笑って“私に任せてください”と無言の言葉を送ってきた。

圭子は大胆なジョルジヨの態度に思わず顔を伏せたが、

そんな圭子を見たジョルジヨはますます大胆に言った。

「圭子さん、そんなに緊張なさないでいいのですよ。大丈夫ですからね」

マルコはその言葉に一瞬、不信を抱いたようで、ジョルジヨと圭子を交互に

見たが、ジョルジヨはその反応を敏感に読み取り、すぐさま本題に入った。

「マルコさん、実はあなたに圭子さんのことをお願いがあるのです。

というのも来月、セルジオのお父上が経営するホテルチエーンの

デモンストレーションパーティーがミラノで開かれるのですが、

残念ながらセルジオにはお相手がありません。

お父上からはなんとかこの一週間以内にエスコートする相手を決めなさい、

とやいのやいの催促を受けています。

しかし、セルジオは今、心臓の治療をパリで受けていますので、

私が代わりにお相手をお探ししている次第です…。

でも、私にはお若い女性の知り合いなどいませんし…。

困り果てている私にセルジオが、圭子さんをお願いしてみてください、

い、ただし、マルコさんの承諾を得てと言ってきました…。

というわけで、マルコさんがよろしければ圭子さんをお貸し頂きました

いのですか？

もちろん、圭子さんが受けて下さるか否かが前提条件になりますが、マルコさん、圭子さん、いかがでしょうか？助けていただければどんなにか

セルジオが喜ぶことか…」

マルコは真っ赤な顔をし、慌てて

「僕に圭子を貸してくれって？そう言われても圭子は僕のものではないし、

誰のものでもないよ。だから僕に断らなくても圭子が承諾さえすれば、

それでいいんだよ。ジョルジョ、言っておくけど僕は圭子とはなにもないんだよ。

関係ないから気にしないで。だから、もし、圭子が良ければ承諾してやったら？」

むきになってそう言うマルコの顔を圭子は見ることができなくなっていた…。

マルコの返事はジョルジョの思った通りの言葉で返ってきたからである。

「でも、セルジオがパリで心臓の治療をしていることは知らなかった。

大丈夫なんですか？心配はないのですか？」

「彼のことは大丈夫です。手術は大成功でしてね、間もなく退院してこのローマに戻ると思います。

でも、マルコさんに圭子さんのことを快諾して頂いて助かりました。圭子さんとはなにもないのでね？もし、このままお父上が気に入って

お嫁さんに、なんてことになるかもしれせん。それでもよろしいですか？

なにせ、セルジオいわく、圭子さんは素晴らしい女性ということですから。

もちろん、こうしてお会いした限り、私もそう思います。お美しいですね」

ジオルジヨは伏線を張るようにして、セルジオの相手として見初められたときのことまでも持ち出していた。

そして、何食わぬ顔をして丁寧にマルコに頭を下げ、感謝の念を表した。

僕に感謝する筋合いの話ではないよ、と言いながらも、

彼に頭を下げられたことで、意気揚々としているマルコの姿が哀れであった…。

圭子は悔やみながら悲しくなってきた。人の良いマルコをこんな形で騙すことが、悲しかった…。

ジオルジヨは圭子の気持ちを察して次の言葉を探していた…。

必死に探す彼の姿を圭子は涙の奥で見えていたが、

ジオルジヨの苦しみも手に取るように解るだけに、

悲しみが一層ひどくなり、マルコには見せてはならない涙が、

今にもこぼれ落ちそうになったとき、ジオルジヨは口を開いた。

圭子の気持ちを慮って、言葉を選んだ…。

「マルコさん、実はこの案は私が提示したものです。

セルジオを助けんばかりの気持で…。セルジオには昨日、

私のこの案をお知らせし、承諾を得ていますが…。

どうぞ、一時、圭子さんをお貸し下さい…。お願い致します…。

なお、先日注文致しましたスーツ三着は、その時に着用する予定で
すので、

叔父様にそれまでに間に合わせるように、とお伝え下さい。

それからこの箱には当日圭子さんが着用する洋服やバッグなどを
用意させて頂いております。今日、お車で来ていただいたのも

これをお持ち帰りしてほしかったからです。どうぞよろしくお願い

致します」

パリに発つ前、セルジオの置き土産として見せられたパーティー用のドレスなど一式がバラ模様の箱の中に入っている。マルコはこれらをどんな気持ちで見ると見るのだろうか…。何も知らないマルコを騙しきる自信が今の圭子にはなかった…。

第26章に続く

第26章 嘘の積み重ね

第26章 嘘の積み重ね

帰り際、ジョルジヨはセルジオのパリのアドレスのメモをそつと手渡ししながら、圭子の耳元で、

「きつと上手くゆきますよ。気になさらないで下さい。

これでお二人がご結婚なさっても、マルコさんはなにも言えないと思います。

長く人生を生きていますと、このような方便も必要になることはあるのです。

お二人が幸せになるためには、私はいつだって協力しますから」

そう言つて慰めてくれたが、圭子は釈然としないままジョルジヨに別れを告げた。

あまりにも快調にことが進み、マルコを嘘の中に丸め込んでしまつた、

そのことが辛く悲しく、圭子の心を荒んだものにしていった…。

マルコはトラステベレへ帰る途中、なにも知らないで、いつもより弁舌爽やかにお喋りに興じ、機嫌よく今日の出来事を振り返っていた。

それだけに圭子の心苦しさは大きくなり、

マルコの話に曖昧な返事を返しながら、真相を話したい衝動に駆られていた。

このような事態を招いたのは、嫌なことを先送りしていた自分が原因であることを重々承知していたから、マルコはじめセルジオ、ジョルジヨまでに嫌な思いをさせていることが悲しかった…。

しかし、ここで真相を話せばジョルジヨの折角の骨折りを無駄にし、

なおかつ彼を裏切ることになる…。それにセルジオの自分への心遣いも無にすることになり兼ねない…。二重にも三重にも彼らに迷惑を掛けることになる…。やはりこのまま嘘を突き通すことしかないのだろうか…。圭子は何度も考えても悩んでも答えは同じだった…。

部屋に戻った圭子は、疲れた身体をもてあまし気味にソファに身体をゆだねると、別れ際にジオルジヨから渡されたパリのセルジオのアドレスのメモのことを思い出した。

どこに入れたのか記憶がまったくなかった…。

プレネステイ 二の丘では心ここにあらず、といった心境だったから、

メモを手にしたところまでは覚えているが、その後は…。

圭子はバッグはもちろん、コートポケットまでも探したが、メモは見つからなかった…。もしかして、マルコの車の中かもしれないと思った。

マルコに見られるかもしれないとも思ったが、見られても誰のアドレスなのか、きつと判らないだろうと思いい、そのことは心配はしなかったが、セルジオに今の気持ちを訴えたくても、それができないのが辛かった。

しばらく呆然としてソファに横たわっていると、携帯電話がメールを着信した。ジオルジヨからだった。

「アドレスのメモを落としてゆかれましたので、メールを送ります。口頭よりもメールに明記した方がミスがないと思いましたのでお送りします。」

それと今日はお疲れ様でした。精神的にお疲れですよ。

実は私も大変疲れました…。嘘を口にしながら

マルコさんに申し訳なくて、申し訳なくて…。

でも、これで良かったと思います。お互いに…。そう思うことにしました。

ですから、圭子さんも嫌なことを忘れて、セルジオにメールを送ってやってください。

彼からも送られてくるとは思いますが、今日は一日検査漬けのようですから、

向こうからの返事は少し時間が掛かると思います。では、また」

セルジオのフランスでの新しい携帯電話にもどかしくメールを書いた。

「私との連絡も可能ということで、早速、あなたにメールを書いています。

手術後の経過はジョルジヨに聞いています。大成功だったそうですね。

お疲れ様でした…。あなたがローマを去ってから、二ヶ月ほどの経過が

あります。その間、私はあなたの手術のことなどは、ジョルジヨから入る

「セルジオは大丈夫ですよ。手術も成功し、今は経過を見ている段階。

元気になる一歩手前ですが、確実に健康な身体を取り戻すまで、もうしばらく待ちましょう”このフレーズの情報しがなく、

心配していましたが、でも、ジョルジヨの言う通り元気になったようですね。

安心しましたし、とてもうれしいのです。おめでとう…。

そして、報告があります。

今日ジョルジヨに呼び出され、私をあなたの相手として選ぶことをマルコに承諾してもらいました…。

私が彼に話せなかったから、あなたやジョルジヨを心配させてしま

い、

今日のような狂言まで打たなければならなかった…。そのことで、今苦しんでいたところです。

彼を騙した自分が悲しくむごい人間に思えて仕方ありません。

こんなことまでして私はあなたとの幸せを掴もうとするなんて…。

ジオルジヨは長い人生には嘘や方便の一つや二つは仕方のないこと、そう言っただけ私を慰めてくれましたが、心からそう思えないのです。

人を騙すということは、自分をも騙すことになりませんか？

自分を裏切ることになりませんか？今更悔やんでも遅いのですが…。

…久々のメールが私の愚痴ではきつと嫌な思いをなさって

いると思います。ごめんなさい…。圭子」

メールを書き終えた後も、圭子は悶々として時間を過ごしていたが、シャワーを浴びた後、しばらくベッドに身体を横たえた。

精神だけではなく、なぜか身体の疲れもひどかったからである。

そして、心地よいベッドのぬくもりの中でようやく気持ちにゆとりができた

圭子は、落ち込んだときに何度も思い出す父親の言葉を反芻した。

「圭ちゃんの夢は？どこに行ってしまった？夢を語れない人間には進歩はないよ。」

先のない道をただ惰性で歩んでいるだけだ。多分、今の圭子がそうなんだろうね。

だとしたら現実を打破しなければいけない。どうしたらいいって？圭子の夢はまだしぼんでいないと信じる。だから初心に戻って夢を追い続ける

しかないと思う。ただ、夢を追い続けることは大変に難しい…。

でも、夢を諦められないのなら、答えはひとつ。追い続けるしかないんだ。

何が何でも追い続けなければ、後悔するから」

第27章に続く

第27章 優しい声の中で

第27章 優しい声の中で

セルジオからの返事は一夜明けても送られてこなかったこともあり、圭子は自分の気持ちを吐露する場がなかったことで、

昨日からの罪悪感に苛まれ続けていた…。

それに目覚めが悪かったのか、激しく痛む頭を抱えていると、

八時過ぎ、何も知らないマルコがいつものように様子伺いに顔を出した。

「よう！！圭子お嬢さんは元気かな？これからはジョルジョのように圭子のことを“お嬢さん”って呼ぼうかな。結構似合っているしね」昨日からの続きなのか、圭子とは裏腹にマルコは至ってご機嫌の様子であった。

圭子は痛みを我慢しながら苦笑いをしてマルコの言葉を聞き流した。そして、いつものように部屋にマルコを招きいれ、キッチンでカフエを淹れていると、

マルコはキッチンまで顔を出し、圭子を相手に昨日の出来事を振り返った。

「ここだけの話なんだけど、セルジオは圭子のことを好きになったと思うね。」

だからこんな大きな役目を頼んできたと思う。そうとしか考えられない。

俺は昨日、帰りながらそう確信したね。きっとそうだって。

そうでなければこの話、変だと思わないかい？

相手は誰でもいいってわけじゃないだろう。

少しでも気に入った相手でなければ、例え芝居でも親に

恋人だって紹介はしないとと思う。少なくとも俺はしないね。

そんなこんなを考えるとセルジオは圭子を気に入ったと思うんだ。でなければたった一度しか会っていないのに、圭子を選ぶとは思えないからね。圭子は彼のことをどう思っているか知らないけれど、

でも、この先のことを考えると僕はぞつとしたよ。

だって、一時とはいえ、あまりにも異なる世界へ足を突っ込むんだから、

そりゃ大変なことだと思うよ。それとジオルジヨの言う通り、

もし、相手の両親が圭子を気に入ってしまったら、どうするんだい？

そのときになって、実はこれはお芝居でしたなんて言えないと思うよ。

そうなったら大変なことになる。断るなら今の内だよ」

マルコはいつしか真面目な顔をして、圭子に向けて疑問やら質問やら確信やらを投げかけてきた。圭子は焦っていた…。

“何か言わなければいけない。いつものように明るく冗談を交えながら

何か言わなければ、きっとマルコは不審を抱く…。でも、何を言えばいい？

何かを言うためにはまた、嘘に嘘を重ねなければならぬ…”

そう自問自答しながら圭子は言葉煮に窮していた…。

そして、この先もことある度にこのように言葉に窮し、あるいは嘘をつき、

つじつまを合わせなければならぬことを知った…。

今日も明日もマルコに会う度に嘘を突き通さなければならぬ…。

一つの嘘がいくつもの嘘を誘うことの苦しみを今、圭子を身を以て味わっていた。

後悔しても今更遅いことを知りつつ、今日の嘘を悔やみながら、

すべてを疑うことなく信じきっているマルコに、心の中で何度も何度も

頭を下げ、謝り続けていた…。

そのとき、突然、携帯電話が鳴った。ジオルジヨからの連絡だった。なにがあったのだろうか？セルジオの身になにか起きたのだろうか？愛する人の身を案じた圭子は、怖さで電話に出る勇気が出ず、呼び出し音の中で彷徨っていた…。目がうつろだったに違いない、マルコはそんな圭子に不信を抱き、顔を見つめていたが、次第にそれまでの柔和な目から相手を探るような鋭い目つきに変わっていった…。

いつもの陽気で人の良いマルコの目でないことに気がついた圭子は、一瞬慌てたけれど次の行動を冷静に考え、自分の気持ちを悟られないようにするために、どうしたらいいのか呼び出し音の中で思案した…。そして、圭子はマルコからは逃げずに、勇気を振り絞って、彼の探るような目の中で電話に出ることを決心した。

そして、相手に今自由に話せないことを解ってもらうために、相手には喋らせず自分からあることないことを口にした。

「どうしたのですか、ジオルジヨさん。今朝も私の忘れた手袋のことで、

お電話を頂いていますが、まだ何か？私は今朝、手袋は今度お会いするときにお返しして頂ければ、いいのですと、お答えしましたよね？もちろん、ご心配頂いたことはうれしく思いますが…。ありがとうございます」
いくらなしか上ずった声になってしまったことを後悔しながら、電話をくれたのは昨夜で、今朝でなかったジオルジヨだったし、忘れ物は手袋ではなくアドレスが書いてあるメモだったから、自分の目論見に気がついてくれることを祈りながら、返事を待った。しかし、電話の相手はジオルジヨではなかった…。

「圭子…。傍に誰がいるんだね？声が変わだから…。マルコなんだろう？答えなくていい了解しているから。色々話したいが、今は用件だけを手短かに言おう。今日プレネステイ 二に来てほしい。来れるかな？大丈夫なんだね。OK。マルコにはなんと言おうか…。そうだ、圭子の洋服の直しがあるので、とでも言つて。嘘が辛いと圭子はメールで言ってきたが、僕も辛い。でも、今だけだから我慢して欲しい…。頑張るんだ。いいね」

電話の相手はセルジオだった…。思いがけなかった…。電話の奥からジョルジョではなく、突然愛する人の声が届いたとき、圭子は感激の涙があふれ出そうになってしまった…。うれしくて思い切り泣きたかったけれど…。思い切りセルジオの声にすがって泣きたかったけれど、でも、マルコには決して見せてはならない涙だったから、懸命に堪えた…。堪えながらマルコの視線から逃れるために、笑顔を見せながら、カフェを淹れてくると言つて、キッチンに入った。そして、セルジオの声の余韻を胸に抱き、堪えられなくなっていた涙を流した…。彼はプレネステイ 二に戻っている…。あと数時間で愛しい彼に逢える…。彼の優しい声の中で、圭子は幸せすぎて何もかもが見えなくなっていた…。これまでの苦しみも哀しみも後悔も何もかもが消えようとしていた…。

第28章に続く

第28章 陽炎の人

第28章 陽炎の人

キッチンから新しく淹れたカフェをマルコの前に持ってきた圭子は、今朝から痛んでいる頭に加えて、身体が異常にだるくなっていることに気がついた…。胃の辺りの気持ち悪さも感じた…。

でも、圭子はマルコの前で崩れてはならなかったから、身体を支えていたテーブルから手を離し、凜として立った。

そして、先刻の電話の内容を知りたがっているマルコに、プレネスティ ニへ行くことを簡単に告げた。

嘘をつきたくなかったから、プレネスティ ニ行くことは告げたが、呼び出された理由は用事があるようなのとだけ答えて、追い出すようにしてマルコを部屋の外へ誘った…。

店に行く前に僕が送ってゆこうかと、閉めるドアを前にしてマルコが言ってくれたが、

圭子は首を振った。迎えに来てくれるからとは言えなかったけれど、少しでも嘘はつきたくなかったから、黙って首を振り続けてドアを閉めた…。

閉め際にそっとつぶやいた。

「マルコ、ごめんね…。本当に許して…。ごめんなさい…」

マルコが出て行った後、午後一番に車が迎えに来るまで、

もう一度シャワーを浴びて、それから、と考えながら部屋の片づけを始めた圭子は、セルジオのために何かプレゼントを持ってゆきたいと考えていた。

退院祝いとしてであるが、二人の思い出になるような素敵な品があれば…。

そう思いながら、仕事部屋に入った圭子はめまいがひどくなり、

同時に吐き気も襲ってきたから、立っていることができなくなってしまった…。

この二三日、マルコのことと食事を満足にとつていなかったから、貧血を起こしていることを承知していた。だから、心配はしていないが、

晴れやかな顔でセルジオに再会できないことに心を痛めた。

久しぶりの逢瀬にはもっと爽やかで明るい顔でなければ…。

圭子は昨日作り置いておいたチキンスープを無理やり身体に流し込み、

大事を取って、一時間ほど横になって体調を整えた。

しかし、シャワーを浴び、身支度を整えようと動き出すと、

先刻の気持ち悪さやら頭痛が戻ってきた。

結局、約束の時間が近づいた夕刻までも気分が優れることは

なかったが、約束の時間が迫ってきていることで、

圭子は足取りも重く外に出た。迎えの車はまだ来ていなかったが、

圭子は出口の壁に身体を預けてしばらく立っていた。

大きな道路に背を向けるようにして建つ圭子のアパートの表玄関は、西側に延びる細い路地に面してあったから、

アパートの住人の出入りは人目にさらされることがなかった。

圭子はそんな立地条件が気に入って借りていたが、

逆に人目を避けられることを逆手に取った待ち伏せも多かった。

圭子は待つてもなかなか来ない相手に少し苛立ちを覚えたのを機に、アパートの西側に延びる大通りまで行ってセルジオの車を待とうと歩き出した。

しかし、歩くと同時に突然、圭子の前にマルコが姿を現した。

どこかに隠れていたのだろうか、出てくるのを待っていたようなあまりのタイミングの良さに、圭子はもしかして自分の行動を

監視されているのかもしれないと思った…。

圭子の前に立ちふさがるようにして立ったマルコは、上から下までを点検するかのよう圭子を眺めた。

初めて待ち伏せされた圭子は、相手がマルコであっても怖く、身体が萎縮して動くことができなくなっていたが、マルコはそんな圭子の態度にはきづかず、横柄な態度で口を開いた。

「やはりお嬢さん扱いだね。お車でお迎えなんだ。

対したもんだ。圭子にはもう俺なんか必要ないのかもしれない」
それだけを言いに来たのか、間もなくマルコは去っていった。

アパートの前で意味もなく立っていれば、車の迎えを待っていることぐらい、

誰でも判るだろうに、と圭子は部屋で待たなかった自分を悔やんだ…。

しかし、悔やみながらどの道、マルコはセルジオが車から降り、自分の部屋に入る

ところまでも見届けるであろうから、マルコからは逃げられないことを知った…。

どうしてマルコとこんな関係になってしまったのか、沈んだ気持ちをもてあましながら、

車が来る方向に少しずつ足を運んでいた。

しかし、車はなかなか来なかった。身体の調子も良くなかったから、仕方なく圭子は部屋へ戻ろうと身体を右方向に向けたとき、

左手の路地の向こうから自分の立つ方向に歩いてくる人影が見えた。人が歩いていても不思議はなかったが、なぜかその人が気になった圭子は、

立ち止まって路地に向けて目を見据えて見ようとしたが、

しかし、陽炎のように揺れている空気の中を隠れるかのように歩くその姿は、

はつきりせず、また、今見ている陽炎の路地やその人の姿は、現実なのか、
夢の中の出来事なのか、必死に考えるうちに次第に意識が薄れ、
圭子は陽炎に吸い込まれるようにその場に倒れ込んでしまった…。
意識が薄れて暗闇の世界に入ろうとする自分に陽炎の人が駆け寄っ
てきた。

しかし、その人が必死に自分を呼び止めようとしている姿を、
圭子は遠くに見ながら気を失った…。

痛みと苦しさで意識が薄れてゆく中、駆けつけた陽炎の人の声が
まるで子守唄のように圭子を優しい空気で包み込み、いつしか、
心地よい闇の中で眠りに誘っていた…。

第29章に続く

第29章 再会

第29章 再会

路地から走つて来る陽炎の人の面影を遠くに見ながら、圭子は眼が覚めた。自分のベッドの上で目覚めたことが一瞬理解できなかったが、懐かしいセルジオの顔が、目の前にあったことすべてを了解した…。

陽炎の人がセルジオであったことも、自分を助けてこのこの部屋に運んでくれたのが誰であったのかもすべてを了解した…。

そして、改めて自分の部屋を見回すと、ベッドの傍らに初めて逢つたあのときのままの優しい笑顔のセルジオがいた。

“圭子、もう大丈夫だ。一人で寂しかったね…。辛かったね…。でも、僕がいるからもう大丈夫だ。安心して眠るがいい”

無言でそう言うセルジオの顔が目の前にあった…。

うれしかった…。うれしさに耐えられなくて大粒の涙が流れた…。そんな圭子を相変わらず笑顔のまま見つめていたセルジオは、大きな手で圭子の涙を拭いた後、頬に愛しく口づけをして言った。

「気が付いたね。どこか痛いのかな？ 苦しいのかな？ 汗がすごい…。医者を呼ぼうと思ったけれど、トラステベレには知り合いの医者はいないし、様子がさっぱり判らないから、とにかく、圭子の指示の元で、

この部屋に入った。幸いにも鍵が掛かっていなかったから良かったけれど、

とにかく、ベッドで休ませようと思って…。しかし、鍵を掛けずに出掛けようとしたことは良くない。この辺りは物騒だからね」

道路に倒れた後、意識を完全には失っていなかったのであるう、

倒れている自分を前にして、困り果てているセルジオをこの部屋に案内できたことに圭子は胸をなでおろしたが、あの時、鍵も掛けずに出掛けた自分の精神状態を振り返った。痛みがひどかったのだろうか、

或いはマルコのことと苦しんでいたのだろうか、きつと心ここにあらずの心境だったから、部屋に鍵を掛けることなど頭の片隅にも考えていなかったのであろう…。

しかし、運良く部屋に戻るチャンスがあった…。

圭子は様々なアクシデントに見舞われたこの二三日であったが、鍵を掛け忘れた部屋にすぐさま戻ることができたそのことが、先行きの自分の良い暗示を呈したように思え、うれしかった。

そして、圭子はベッドから起き上がるうとした…。

数ヶ月ぶりの再会の抱擁をしてほしかったから…。

セルジオの腕の中で思い切り泣きたかったから…。

だから起き上がるうとしたけれど、

身体は自由が利かないほど痛み苦しんでいた…。

少しでも身体を動かそうとすると気分が悪くなり、

セルジオを心配させようとしていたから…、

だから何事も起こらないようにそっと再びベッドに臥した。

しかし、セルジオはすべてを知っているかのように、

圭子をしっかりと胸に抱き、優しく諭すように言った。

「もう心配しないでいい…。圭子は僕が守るから…。

僕が圭子の身体を治してみせるから…。」

なぜ、倒れたのかははっきりとした理由は判らないが、

この二三日精神的な疲れから、食事を満足に取っていなかったことで、

貧血を起こしたのではないのかと自己診断をしていた。しかし、胃の辺りが妙に重くはつきりしないことで、もしかして、

それだけのことではないのかもしれないとも思ってもいた…。

「多分、どこも悪くはないと思います…。このところ、

色々ありましたから、食事を満足に摂っていなかったからだと思えます。ですから軽い貧血を起こしてしまったのではないのかと…。

それよりもあなたのお身体はいかがですか？

手術は上手くいったとジョルジョから聞いていますが…。

退院なさったのですか？もうパリには戻らなくていいのですか？」

圭子は堰を切ったかのように、セルジオを質問攻めにした。

セルジオは笑いながら、一度に全部は答えられないだろう、

順番に答えるから、少し静かにした方がいいと圭子をたしなめた。

そして、セルジオはそんな圭子をそつと抱きしめた。

「会いたかった…。心臓の治療より圭子に会えなかったことの方がはるかに苦しく辛かった…。圭子を遠く離れたところに一人にしたことが、

悔やまれた…。しかし、これからは時折パリの病院へ行くこと意外は、

圭子の傍にいられるから。今は僕の身体より圭子の方が心配だ。

一刻も早くプレネスティ 二へ行こう。向こうには僕の主治医がいるから、

すぐ圭子を診察してもらおう。いいね？」

圭子はセルジオの介護を受けながら、精神的に安定したのか、三十分ほど休むと、身体を起こすことができるようになった。

それを見たセルジオは、圭子をベッドからそつと降ろし、

目の前で身支度を整えさせた。

そして、圭子の外出の準備が整ったのを見届けた後、

この建物の東側の空き地に待たせてある車をアパートの出口に回すようにと、スタンバイしているドライバーに電話で指示し、

次にジョルジョにも電話で手短に今の圭子の状況を説明した。そして、自分たちがプレネステイ 二に着く頃に間に合わせるように、
医者を呼んでおくこととベッドを用意するようにと、
指示していたが、その途中でセルジオの声が甲高くなり、
まだ電話の途中にも関わらず、圭子の顔をじつと見つめ、
放心状態になっていった。その様子を見ていた圭子は、
ジョルジョがセルジオになにを言ったのか、おおよその見当がついた。

電話を切ったセルジオは顔を紅潮させ、圭子に質問を始めた。

「いつから気持ちが悪くなった？ 食事の何が食べられなくなった？
好きな食べ物と嫌いな食べ物が今までと違ってきた？ それから、
臭いに敏感になったのはいつ頃から？ それと…」

圭子は笑いながら、セルジオの口を手でふさいだ。

「ジョルジョの想像通りかもしれません…。私もそのことはついさ
つき、

気がついたばかりで…。でも、まだ病院で診てもらっていませんか
ら、

確かではないのです。もし、そうだとしたらあなたは…」

セルジオは喜びではきれそうな顔をして、圭子の手を握り、

「そうだとしたら？ 僕は最高にうれしい！

僕はこの瞬間のためにパリから戻ったんだね？ ありがとう圭子！

僕はなんとという幸せ者か。神様にも感謝しなければいけない」

そう言ってジョルジョに再び電話をした。

「僕と圭子の二世が今ここにいるかもしれないから、

とにかく、産科の医者呼び寄せておいてほしい。

これからそっちへまっすぐ戻るから、温かい飲み物と

食べる物も用意しておいてくれ。それとまだ色々あるけれど、

とにかくここを出よう。出てプレネスティ 二に戻ろう。
そうだあれも用意しておいて。いいね？」

圭子はジオルジヨに電話をするセルジオの高潮した顔を眺めながら、
胸に架けていた母の勾玉のネックレスを握り締めた。

そして、両親に妊娠したことを報告しながら、
身体に宿った我が子を無事に出産できるその日まで、守ってほしい
と願った。

そして、マルコにも心の中で最後の別れを告げた…。

第30章に続く

第30章 プレネステイ ニでの新生活

第30章 プレネステイ ニでの新生活

夕刻のラッシュ時を迎えたローマの市街地を一気に走り抜け、郊外の爽やかな田園地帯に出た車は、

いくらなしかスピードを落とし、丘をめがけてひたすら走った。

初めてプレネステイ ニを訪れたあの日と同じように、残照に映える丘を指して走り続けた。

圭子は時折、車の窓を開けて、初秋の爽やかな風の中で興奮して高潮した顔を冷やした。

風は圭子の体内を吹き抜け、懐かしい香りだけを残して

去って行く…。圭子は香りの余韻の中で、一瞬ではあつたが、

プレネステイ ニの風にすべてを託して生きる自分を垣間見ていた…。

見覚えのある村の入り口に差し掛かると、圭子と並んで後部座席に座っていたセルジオは、携帯電話を手にし、

ジヨルジヨに間もなく着くことを知らせた。そして、圭子の肩を抱き、

これから始まる二人だけの新生活を前にして、大きく深呼吸をした。圭子もそれにつられるようにして居住まいを正した。

そして、目の前に広がるカルツティ家の丘を感慨深げに仰いだ。

美しかった…。残照の鈍い光に輝く丘は優しい美しい世界を

広げ、訪れる者すべてを受け入れる準備を整えているようだった。

丘の上に建つカルツティ家のゲートが開き、アプローチを進むと、大きな赤いバラの花束を手にしたジヨルジヨが玄関で待つのが見えた。

圭子は懐かしい香りの漂うカルツティ家のすべてが好きだとそのとき思った。

故郷の香りがするこの庭も並木道も何もかもが大好きだと思った。そして、初めて訪れたあの晩と同じように、ここが私のこれからの居場所なんだと感じていた…。ここが既に定められていた私の生きる場所だったと感激の中で改めて思っていた…。

セルジオは玄関の扉の前に立っているジオルジョにVサインを出し、花束を受け取って、車から降りる圭子に恭しく差し出した。

「今の僕の精一杯の感謝の気持ちと圭子を新しい住人として迎えるジオルジョの喜びの気持ち、そして、圭子への感謝と僕の祈りを託した

この花束を受け取ってくださいますか？

まだ見ぬ僕の二世にもこの芳しい花の香りを捧げたいと思います…。圭子、今日から君は僕の妻として、母としてここで生きてほしい…。」そう言った後、圭子を抱きかかえてバラの花束と共にリビングに入った。

そして、ジオルジョが用意してあったシャンペンで乾杯を済ませた後、セルジオが改めて言った。

「実は今夜ここで圭子にプロポーズをし、その記念と僕の快気祝いを兼ねたミニパーティをジオルジョと三人でしようと計画していたんだ。

そして、圭子が僕との結婚を承諾したら、明日からでもここで一緒に暮らそうと思っていた。しかし、今は事情が違う。

結婚もここに住むことも仮の話ではなく、僕たちの子供のために明日からでもここで、一緒に生活をしなければいけない。

圭子の身に何か異変が起こったとき、僕やジオルジョが傍にいた方がいいと思うから。そうだろうか？ジオルジョ」

団欒する間もなく、産婦人科の医師が往診にやってきた。とりあえず妊婦の様子を見ることと簡単な診察をし、明日、丘の下の街にある病院での再診察をするという前約束をした後、用意されていたベッドルームで簡単な診察を受けた圭子は、妊娠3ヶ月目に入っていると診断された。予想していたことではあったが、やはりうれしく、セルジオに報告するにも涙があふれて言葉にならなかった…。そして、妊婦としてはもつとも不安定な時期にあることから、常に傍に誰かが付き添っていた方が良く、という医者からの勧めもあり、プレネステイ 二の丘の上の家での新生活はその場で決定された。決して大きな家ではないが、ローマを眼下に一望できる広大な前庭と二人だけの碧い部屋が自慢であったが、ジョルジヨの機転ですぐさま母屋の改築となり、その間、碧い部屋のにわか作りのベッドルームを使用し、改築が終わる十一月半ばに母屋に入ることになった。

圭子は七月にセルジオと初めて会い、三ヶ月後の今、妊娠を知り、彼と生活を始めるとは思いもしなかったことだけに、未だ、実感として捉えにくく、時折、すべてが夢の中の出来事ではないのかと今を疑うことが多くなっていた…。それはジョルジヨに言わせれば、幸せすぎるからということであったが、圭子はそれだけはないような気がしていた…。それはまず、使用人が数人いる現実的でないプレネステイ 二の生活に慣れないことがひとつの要因ではあったが、それだけではなく、セルジオの家族とまだ会っていないことが、大きな不安材料になり、先の見えない道を歩んでいるような気がしていた…。

いつの日か、この丘に子供と自分だけが取り残されてしまうような、

そんな怖さとセルジオの虚構の世界に生きているような、
そんな孤独感に襲われる日があった…。

第31章に続く

第31章 別れの時

第31章 別れの時

ブレネステイ ニで始めた新婚生活が数週間を過ぎたある日、夕食を終えた後、セルジオは二人だけで結婚式を挙げたいと言いだした。

圭子はその申し出はうれしかったが、素直に受けることはできなかつた。

兄弟はともかく、未だ、両親にお目通りが叶わないまま、カルツェイ家の

長男の嫁になりたくはなかったから…。

「結婚式ですか？私はまだ望みません。式はいつだっていいのです…」

そう言うと、セルジオは傍らにいるジョルジョと顔を見合わせた後、二人はやはりとうなずき合った後、セルジオは圭子の手を取った。そして、しばらく言葉を探した後、言った。

「圭子はまだ僕の両親と会っていないことが不安なんだね…。でも、僕は圭子の身体に宿った子供のために、そして、なによりも圭子のために式を挙げたいと思っている。」

もちろん、ジョルジョを立会人として二人だけで挙げる式のつもりだ。

式が嫌だったら、婚姻届を出すだけでもいいが、でも、僕たちの子供のためにもウエディングドレスとタキシードを着た僕たちの結婚式の写真を一枚だけでいい、残して置きたいから、だから式を挙げたいと思っているし、

式を挙げてから両親に紹介しても遅くはないと思うが…」

「ご両親に妊娠のことは報告なさったのですか？」

圭子は気になっていたことを思い切つてセルジオに聞いてみた。結婚相手の自分のこともまだ伝えてはいないだろうから、当然、妊娠のことも伝えてあるわけではないと思つていたけれど、勇気を出して聞いてみた。

しかし、セルジオの答えは案に相違していた。

セルジオは顔を曇らせて上を仰いだ……。そして、

「報せた……。圭子との結婚の約束も報告だけはした……。

でも、君に会つていないから言いたいことを言っているだけだ。

だから、僕は無視しようと思つたんだ。いけないかな？

イタリアでは親が許さなくても結婚する人は多くいるんだよ。

お互いに大人なんだから、君の国だつて自由に結婚はできるだろう？

僕には親はいないと思つてくれていい。

ここで暮らせばモンテカルロにいる両親に会うこともない。

だから圭子はなにも気にしないで子供を産み、僕の妻として生きていつてほしい……。両親のことは今まで黙っていたことは謝るが、

彼らのことは圭子もないものと思つてほしいんだ……」

圭子は少しだけうれしかった。両親の了解は得られていないが、自分との結婚も妊娠も報告してしてくれたことが何よりもうれしかった。

セルジオの自分への思いの大きさもよく解つた……。

ただ、悲しかったのは、彼らが自分との結婚をおもわしく思つていなかったことを知つたことだつた……。

これから私はともかく、この子はどうなるのだろうか……。

セルジオの両親が自分たちの結婚を認めない、その理由は

聞くまでもなく、圭子がカルツティ家にとつて不相応な身分

であり肌の色が異なる日本人であるからだろうと圭子は思つていた。

だから、セルジオとの子供のこの子の先が心配だつた……。

この子はどうなるのだろうか…、そう思った圭子は、マルコの言った言葉を思い出していた。

「…この先のことを考えると僕はぞつとしたよ。

だって、俺にとっても高嶺の花的な存在のカルツティ家だよ。

そこに日本人の圭子が足を突っ込むんだから、

そりゃ大変なことだと思うよ。もし、嘘が誠になったらどうするんだ？」

先の見えない道に足を突っ込んでしまったのか、と不安を募らせながらも、

圭子はセルジオのたくましい胸に抱かれ、まだ見ぬ子どもにそつと語りかけた。

“…あなたは安心していいのよ。大丈夫よ。きっと時間が解決してくれるから。

日本のおばあちゃんとおじいちゃんには報せたのよ。そしたら、とても喜んでくれたの…。だから、少しだけ待って。きつと上手くゆくから…”

母屋は新たに子供部屋を増築したことで半月ほど完成が遅れた。

その間、狭いアトリエであったが、順調に育っている圭子の胎内に宿る二世と共に、幸せな蜜月の日々を送っていた。

そして、十二月の第二週の日曜日、圭子とセルジオは仮住まいのアトリエから改築が終わった母屋に引っ越した。

そして、その二日後、圭子は久しぶりにローマに戻った。

母屋の改築が終わるまで借りていたトラステベレの部屋を解約し、二年間お世話になった工房にも別れを告げるためであった。

部屋の片付けはマルコとマルコの両親が済ませておいてくれたことで、当日は車に荷物の運び込みと挨拶だけであったから、

半日もかからずにすべてを終えた。

夕刻までに帰ればよかったから、あまった時間を
日曜日で店が休みだったマルコと共に
思い出がいっぱい詰まったアパートで別れの時間に費やした。

一ヶ月ほど前にマルコの目から逃れるようにしてアパートを出た圭子は、

その後、ジョルジョの申し出でマルコに会ってもらい、
セルジオとのことの次第を説明してもらっていた。

報告を聞いた時のマルコのシヨックは大きかったようであるが、
マルコは既に先を読んでいたのであろう、

それまでの自分に別れを告げるために、あの日、
圭子を待ち伏せしていたと言う…。

自分を愛していない圭子の目を確認したかったからと言った…。

だから、ジョルジョがセルジオと自分のことを話したときには、
マルコは既に圭子のことはあきらめていたとも言い、

圭子の妊娠を聞かされた時も、ジョルジョが見る限り平常心だった
し、

躊躇いながらも祝福の言葉を述べてくれたと聞いていた。

マルコは一握りの焼き栗を手にして部屋で待つ圭子の前に現れた。
久々の再会であったからお互いに恥ずかしさと照れがあったから、
軽くハグをした後、照れ笑いですべてを水に流した…。

そして、圭子是用意してきたマルコの好きだった

自作のネクタイピンを渡した。感謝と愛を込めたプレゼントだと言
って、

マルコの手の中に渡した…。温かで大きな手だったことで、

圭子は思わず涙を流してしまっただが、マルコはすぐ後ろを向き、
圭子の顔を見ないで大きな声で言った。

「もし、なにか困ったことがあったら、すぐに連絡するんだ。

夜でも昼でも構わないから。俺のホットラインはいつだって圭子の

ためにあると思っただけだ。家族としての義務だからな。だから少しのことでもいい、不安になつたら真夜中でもいいから、携帯に電話をするんだ。約束してくれ…」

そして、前に向き直つたマルコは、今度は圭子の顔をしいかりと見つめて

「俺が言うのも嘘っぽいけれど、人生色々あるんだ。後悔のないように頑張るんだ！」

とそう言つて圭子に笑いかけ、別れの挨拶とした…。

爽やかで悲しいマルコらしい別れ方に、圭子はもう一度心の中で手を合わせ、

感謝をしながら彼の長い影が路地に消えるまで見送つた。

圭子は久々トラステベレを歩きたいと思つたが、車を待たせてあつたことと

セルジオが今朝、なぜか落着きがなく苛立っていることを思い出し、そのまま、プレネステイ 二へと向かつた。

今の時間、彼は打ち合わせでこのローマに来ているはずであつたが、仕事中は決して私的な電話をしないことは、圭子の信条であつたら、

気を取り直して仕事をしているだろうかと気になつたが、まずは彼が家路に就く前に家に戻ろうと先を急いだ。

しかし、あいにく時刻のラッシュにはまり、帰宅時間は

予想よりはるかに遅れて、夜七過ぎの帰宅となつてしまった。

迎えに出たジョルジョに着替えのため部屋へ行くことを告げて、足早にリビングを横切ろうとしたその時、

セルジオがソファから立ち上がり後ろから圭子を抱きしめた。

予期しない出現で驚いたが、自分を失いそうになる時には必ず後ろから自分を抱きしめるセルジオだつたから、

圭子は朝からの嫌な予感の中したのではないのかと、怖くて動くことができずにいた…。

圭子の肩に顔を埋めたままのセルジオも微動すら出来ないで、しばらく苦しみの中にいたが、立ちすくむ圭子の身体を案じたのだらう、

肩から顔を離し、圭子の正面に回ってソファに座ることを促した。

既にマントルピースには火が入っていたが、ソファに身体を寄せ合
って

座っても二人の震えは止まらず、セルジオの苦悩が手に取るように解る圭子には、愛する人の苦悩が寒風のごとく身体を吹き抜けていた…。

第32章に続く

第32章 淡いシルエット

第32章 淡いシルエット

ジヨルジヨに急かされるようにして苛立ちから逃げ出し、いつもの落ち着きさを取り戻したセルジオは、マントルピースの前の揺り椅子に座った圭子の後ろに立った。そして、身重の圭子を労わるようにして圭子の前のフロアに座るジヨルジヨがいた。誰もが新しい住人に敬意を表し、部屋中に圭子の歓迎を意味する温かな空気が漂っていた。そんな中、一人苦しむセルジオは、重い口を開いた。

「実は今晚これから両親がここに来ることになっている…。昨日、電話でジヨルジヨに言ってきたそうさ。

いつも一方的に何事も決める彼らに無性に腹が立つ。だから素直に受ける気にはならなかったから、

今日は無理だから、とジヨルジヨに断るように言付けて、僕は今朝ローマへ向かった。商談の約束があったからね。でも、昼過ぎにジヨルジヨから連絡が入り、

彼らは既にローマに来ているとのこと。つまり、彼らは僕たちの予定などお構いなしに、今夜ここに来るということだ。

僕は悲しかった…。いつだって彼らの思うままになる自分が悔しい。圭子はセルジオが苦悩し苛立っている原因を聞いて内心ほっとした。決して悪い知らせではなかったから、胸をなでおろした。そのとき、前に座っていたジヨルジヨが圭子に哀願した。

「ご両親が折角来てくださるのです。このご訪問はお互いに今より良い関係を築くチャンスになっても、これ以上は悪くなる訳がありません。ですから、セルジオの気持ち一つでチャンスを生かせるか否かが決まります。圭子さん、そう思いませんか？」

ジヨルジヨの言うとおりであったから、セルジオをなんとか納得させることが先決問題であった。

圭子はジヨルジヨに自分に任せてと目配せで合図を送った。

圭子は頭を抱えて座り込んでいるセルジオを抱きしめた。

苦しみを共有したかったから…。そして、抱きしめたまま、言った。

「長いものには巻かれる」という日本のことわざがあります。

「ご存じないと思いますが、強いものに従うとよいことがある、という意味合いを持つことわざです。」

勝ち目がない時は相手に従うことも一考ではありませんか？

今までの経緯を鑑みても、彼らに盾を突いても始まらないと思いません。

とにかく、ご両親がここへ来てくださる気持になったことだけは確かです。

それだけでも喜ぶべきことと思いませんか？

きつと、いいことがあります。私はそう信じたいのです。

この子のためにそう信じたいのです…。」

少し目立つようになったお腹にセルジオの手を乗せて、優しく彼を諭した。

言葉は発しなかったが、ジヨルジヨはセルジオの顔を見てうなずいた。

圭子の意見に相違ないと大きく何度もうなずいた…。

圭子の最後の「この子のために」と言った言葉に心が揺らいだ

セルジオは、圭子の説得を納得したのだろうか、

いつしか憤りから解放され、落ち着きを取り戻し始めた。

そして、圭子とジヨルジヨにこれからどうしたらいい？

と聞いてきた。その言葉を聞いたジヨルジヨはうれしさのあまり、

思わず手を打ち、圭子とセルジオに代わる代わる何度もハグをした。

そして、彼らを迎える準備ができていないことで、

急に慌て出した二人を前にした圭子は、笑顔で言った。

「時間があまりありませんから、頑張りましょう。私はまず着替えをしますから、

ジオルジヨは夕食の準備に取り掛かるように皆に伝えて。

セルジオはリビングの片づけとジオルジヨと一緒にテーブルのセッティングを

なさってください。お花を飾ることも忘れないでね」

そう指示し自室に向かった。

部屋に戻った圭子は、外出から戻って初めて落ち着く時間を得たことで、

ベッドの端に腰を掛けて一息つき休んだ。そして、初めて会う両親のために、どんな洋服を着たらいいのか思案しながら、

着替えるために立ち上がろうとしたが、ひどいめまいが襲った。

辛うじて床に転がることは避けられたが、

立ち上がる力はず、そのままベッドに臥してしまった。

何度か起き上がろうとしたが、やはり身体が動かず、

その後、訳のわからない苦しみ襲ってきた…。

片づけが一段落したセルジオがドアをノックして入ってきた。

明かりのない薄暗い部屋を見回したセルジオは、

ベッドに臥したまま苦しんでいる圭子を見つけた。

うめき声を上げ、身体を擦じらせて苦しんでいる圭子を見た…。

セルジオは部屋の明かりを点けることも忘れ、

ベッドに駆け寄った。

「苦しいのか？ 苦しいんだね？ どうしよう！ ジオルジヨ！ ジオルジヨ！」

圭子はお医者様を呼んで下さい、しきりにセルジオに頼んでいるが、その声は彼の悲鳴に近い焦りの声にかき消され、通じなかった。

ジオルジヨも来ないと知った圭子は、力が尽きるようにして、

セルジオの叫び声中で、徐々に意識が薄れていった。しかし、すべて白い世界に塗り潰される直前、圭子の前に見知らぬ女性が立ちはだかった。見知らぬその人は圭子の身体をさすりながらセルジオに怒りとも思える口調でなにかを訴えている…。ベッドの周りには数人の人がいるように思えたが、圭子にとってセルジオ以外はすべて見知らぬ人に思えた…。これは夢の中の出来事なの？なにが起こったの？私の赤ちゃんは今どこにいるの？どうしたの？

圭子は救急車の中で意識を取り戻した。セルジオの姿は見えなかったが、見知らぬ初老の女性が圭子の手をしっかりと握り、時折、額の汗を拭いてくれている。

物静かで上品な顔立ちのその女性は、圭子の手を取った。

「気が付いたのね。あなたはこれから病院よ。でも、もう大丈夫。お腹の赤ちゃんは無事よ。だから安心して眠っていいのよ」どこかで聞いたような優しい声で、その女性は言った。

誰に似ている声なのか思い出そうとしたが、痛みが薄れたにも拘らず、いつしかまた意識が朦朧とし、何もかもが見えなくなっていた…。

ただ、脳裏には女性の優しい笑顔と碧いキャンバスに描かれた我が子の姿が

見え隠れしながら楽しそうに舞っているの残影があった…。

それは碧く光るシルエットであったが、幼子は桜の花びらの如く優雅で優しく、

柔らかな空気の中で舞っているように見えた…。

第33章に続く

第33章 風の中のぬくもり

第33章 風の中のぬくもり

診察室から個室に移された圭子は、疲れから翌日の朝六時までぐっすりと眠った。目が覚めた圭子は、昨夜、自宅でベッドに座った後、

激しい痛みとめまいに襲われ、救急車で病院に運ばれたことははっきりと覚えていたから、今、病院の一室にいることになんら疑問は抱かなかつたし、胎内の子供の無事も

意識が朦朧とする中であつたが、昨夜のうちに知らされていたから、心配はしていなかつた。また、朝から部屋には看護師以外、誰も訪れて来なかつたが、部屋のテーブルには赤いバラの花が飾られ、

枕元にはセルジオと自分の写真が置かれていることも、すべてセルジオとジョルジョの心遣いによるものと思つていた。

八時過ぎ、軽い朝食を済ませると担当医が圭子の元を訪れた。

「気分はいかがですか？もう大丈夫ですよ。しかし、倒れた原因は、過労と過度の貧血ですから、今後、精神的な休養を含めて、身体を酷使しないことと食事をしっかりと取ることが重要です。

今のところ胎児の発育は順調ですから心配は要りません。退院ですか？明日にでも可能です。カルツティ氏が来られたら決めましょう」

そう言つて去つて行つた。

胎児が無事であつたことや、思いもかけず退院の許しが早々と出たことで、気持ちが軽くなつた圭子は、

昨夜、彼の両親が訪ねてくる予定だつたことを思い出し、家やセルジオがどうなつているのか心配になつてきた。

しかし、セルジオが病院に来るまではどうにもならないことを承知していたから、午後の面会時間までを悶々として過ごしていた。そして、午後の回診が終わり、病院の決まりだからと言って、看護師の介助で車椅子で病院の庭を散歩していると、セルジオが回廊伝いに圭子に向って歩いてくるのが見えた。ジオルジョと一緒にあったが、その横に並ぶようにして二人の人影があった…。

セルジオは圭子の前に立つと両手を差し出して手を取り、車椅子から圭子を抱き上げた…。壊れ物を触るようにそっと抱き上げ強く抱きしめた…。

「二人分だから少し重たくなったようだね。この分だと来月にはもう抱き上げることができなくなりそうだ」
「そう言いながら傍らに立つジオルジョに合図をした。ジオルジョは陰になっていた二人を圭子の前に導き、二人に敬意を示すように自分は二歩も三歩も下がった。

「こんにちは。お加減はいかがですか？ 昨晩は大変でしたねでも、あなたの手の力はすごかった。私の手を握りしめるものだから、ほら見て、このあざ。すごいでしょう？ これは昨晩、あなたにつけられたのよ」
「そう言つて明るく笑つたその人は、救急車の中で自分に付き添つていてくれた女性であることを思い出した。圭子はその彼女がなぜここにいるのか理解できなかったが、頭を下げ、お礼を言いながらセルジオに誰？ と目で合図を送った。ジオルジョは女性の肩越しにセルジオにうなずいた。圭子に紹介をすべきだとジオルジョはうなずいた…。

「…この人は僕のママのアンジェラ。後ろにいるのがパパのジヨセフ。」

昨日の夜、圭子が倒れた時、丁度家に来た。ジオルジヨも僕も苦しんでいる

圭子を前にして慌てふためいているところに、ちょうど来たんだ。おたおたしている僕たちを見るに見兼ねて、ママが圭子の面倒を……。ママがいなければ僕はどうしていいのか判らなかつた……。助かつた……」

ジオルジヨがセルジオの後を続けて言った。

「圭子様がお倒れになつた直後かもしれないませんが、呼び鈴が鳴りました……」。

ですので、セルジオが私をお呼びになつていてもすぐに行けなくてその代り、玄関に入った途端、奥様が異変にすぐさま気づいて下さり、

圭子様のお部屋に飛び入つたのです。その後は皆様の知るところで……。奥様たちが運良くいらつしやつて下さつて助かりました。私とセルジオだけでは

慌てるだけでなにも手につかなかつたと思います……」

圭子は初めて会うセルジオの両親に、顔向けできない失態をしでかしたと悔やまれたが、気を取り直して挨拶をした。

「よくいらつしやつて下さいました。昨日は夕食をご一緒と思ひながら、

こんな失態を見せしてしまつてとても恥ずかしく、また、最初からこのようなご迷惑をお掛けしてしまつたことを心よりお詫び致します。

こんなところで失礼とは存じますが、中野圭子です。どうぞよろしくお願い致します。

そして、セルジオと縁あつてあの丘の家で

ご両親の了解を得ないまま、今共に暮らしております……」。

「ご両親には申し訳ないと思っております。お詫び致します…。でも、もしよろしければ私たちのことをお話させて頂ければ、どんなにかうれしいか…。お時間を頂きたいと存じます…」
ここまで言ったとき、父親のジヨセフがおもむろに口を開いた。
「ここではなんだ、とにかく、圭子さんを迎えに来たのだから、一刻も早く、病院から連れ出した方がいい。病院は胎児には良くない。」

セルジオ、早く退院することを医者に言ってきなさい」

セルジオはその言葉が終わるか終わらない内に、庭を離れ院内に入っ
て行った。

ジヨルジヨは両親を導くようにして元来た道を戻り、
圭子と看護師は病室へ向かった。

庭には既に冬の冷たい風が吹き始めていたが、
圭子はその風の中でセルジオの両親の残したぬくもりの中に身を置
いた。

立ち止ったまま空を仰いだ圭子は、懐かしい香りの風の中で一時、
身を任せながらお腹の中の我が子に話しかけた…。

「愛しい私の赤ちゃん、パパのパパとママを連れてきてくれてあり
がとう…。

ママがとても会いたかったことをあなたは知っていたから、連れて
来てくれたのね…。ありがとう…。でも、パパが心配なの。

お二人を見る目が怖かったから、とても心配…。でも、

ママはパパとあなたを守るために頑張るから。あなたが導いてくれた
この対面がうれしかったから、だから頑張ってみる。それよりも
この風の匂いを覚えておくのよ。

おじいちゃんとおばあちゃんの香りだから…。」

第34章 圭子の祈り

第34章 圭子の祈り

病室に戻った圭子は、僅か一夜の宿であったから、退院するための部屋の片付けは簡単に済み、看護師と共にセルジオの迎えを待った。

看護師はこの先、胎児が安定する二カ月後まで、圭子に付き添う約束になっていると言った。

なにも聞かされていなかった圭子は、驚いた。

そんな必要はないとも思ったから、

病室に戻ってきたセルジオに聞いたとすと、

「ごめん…。ママの一存で今朝病院と話をつけてきてしまった。

僕や君の了解も得ないで決めたことに腹が立ったが、

冷静になって考えてみると僕もその方がいいと思ったから、

勝手に決めてしまったママを咎めはしなかった…。

君と子供の安全と健康を優先して考えたいから。承諾してくれるね？」

圭子はセルジオの母親の心配りがうれしかったこともあり、看護師の付き添いをその場で承諾した。

二人のやり取りを聞いていた看護師は、改まった様子でセルジオと圭子を前にして挨拶をした。

「改めてご挨拶をさせて頂きます。名前はエレナです。歳は24歳。看護経験はまだ数年しかありませんが、奥様とは仲良くやれそうな気がしますので、よろしくお願い致します。

また、カルツティ家の看護師に指名されたことを誇りに思います…。ありがとうございます」

圭子はエレナの歳が自分よりも二つも年下とは思えなかった

から、驚きと若いのにしつかりと自分を掴んでいる彼女が眩しく思えた。

セルジオは入院費用の支払い時にエレナの具体的なスケジュールを決めてきたからと言い、今日明日は家を取り込むので、

明後日から家に寝泊りをして二ヶ月間働いてもらうことを告げた。

病院からはセルジオの両親とは別々の車で圭子たちは家に戻った。家に着くと先に帰ったジオルジョが、両親をリビングに通してお茶を用意し接待を始めていたが、両親への挨拶は

セルジオと圭子の着替えが終わってから、

というジオルジョの言葉で、二人は自室へ入った。

圭子は病院の帰路、セルジオは圭子の気持ちを案じてか

「昨夜、両親と少し話し合った結果、僕たちの結婚を許して

もらうことができたから…。今日もこれからきつと圭子を交えて、

両親とこの先のことなど話し合うことになると思うが、

僕たちの結婚が許されたことを念頭に置いて、彼らに接して

ほしい。圭子は決して卑屈になることはないからね。いいね？」

と言ってくれたが、圭子は反対していた自分との結婚が

一夜の内に許されたことに疑問を抱いていた。

なぜ、それも簡単に許してもらえたのか聞きたいと思ったが、

その質問は一步間違えばセルジオの両親を侮辱しかねないものになることが解っていたから、聞くことはできなかった…。

着替えを済ませた二人は、すぐさま両親の待つリビングに向かった。ジオルジョの機転であろう、テーブルには両親の共通の好みと聞いているブルスケッタとイタリアン・カフェが既に用意されていた。

両親と対面して椅子に座った二人の前にも、カフェが運ばれてくる

セルジオは改めて圭子を紹介し、来年五月の出産予定日前までにこの丘で二人だけの結婚式を挙げるつもりだと自分の希望を述べた。両親は圭子に子供が授かったことで、セルジオの希望をそのまま受け入れるつもりなのか、その件に関しては異論を唱えなかったが、父親のジョセフは圭子の顔を見て

「日本のご両親は承諾していますか？ご家族も。それなしでは当方としましては…」

セルジオはもちろんです、問題は一切ありません、と圭子の代わりに答えた。

母親のアンジェラが父親をつついて

「圭子さんは普通のお身体ではないのです。これ以上は深刻なお話は避けてください」

と言って夫の話の腰を折ると同時に、話は自分が引き継いで言葉をつなげた。

「でも、圭子さん、カルツティ家の家族になるおつもりだったら、ここでの生活だけで過ごされては困ることもあります。

セルジオはどう思うの？だって、生まれてくる子供は、カルツティ家の血を引き継ぐのよ。だから教育も含めて私たちも色々相談しながら子育てをしてもらわないと困ります」

最初から相手の望みなど一切聞く耳を持たない、といった感じで圭子の顔を見据えるようにして、アンジェラは一方的に意見を述べた。

それは意見というより命令に近い言葉であったから、圭子はセルジオに助けを求めると、彼は首を振り無言で答えた。

“君は何も言わないでいい。なにも心配しないでいい。すべてこの僕に

任せてくれればいい…。嫌な思いをするけれどしばらくの間だけだから、

我慢をしてほしい……”

圭子はうなずいた。大丈夫よと笑ってうなずいた…。

その夜、両親とセルジオの会話は弾まず、
気まずい雰囲気の中で夕食を共にした。

圭子もジョルジョも必死になってその場の雰囲気を変えようと、
あの手この手で頑張ってみたが、気まずい雰囲気は夕食の間中、
変わることはなく、圭子たちの努力は徒労に終わった。

両親はホテル・リーベラに部屋を取ってあるということ、
夕食後、セルジオは両親にローマまで車で同行した。

しかし、運転はジョルジョであったから、セルジオが同行するのは
不自然であった。だから、圭子はセルジオの悶々とした両親への思
いを、

ローマに行ってから両親に訴えるつもりであろうと予測した。
もちろん、身重の自分に余分な心配を掛けたくない気持ちからであ
った。

圭子は家を出る前のセルジオに言った。

「ご両親が今日私たちの家に来てくださったことに感謝をしなけれ
ばいけないと

思います。ですから、少しの腹立ちがあっても、少しの憤りを感じ
ても、

今はご両親に敬意を表して、忘れてください。時間の流れがきつと
カルツィ家の家族みんなに幸せをもたらせてくれますから……」

そして、何事も荒立てないようにとセルジオの背中に十字を切って
送り出した…。

母の勾玉のネックレスにもお腹の我が子にもセルジオを守って、と
お願いもして送り出した。

第35章に続く

第35章 ジョルジョとマルコ

第35章 ジョルジョとマルコ

両親がプレネステイ 二の丘を去ってから三時間ほどの経過があったが、

セルジオもジョルジョも丘には戻って来なかった。

既に深夜を回ろうとしている。

圭子は心配で眠ることはできなかった。

電話を掛けて様子を伺おうと何度も思ったが、

悲しい異変が起きていたらと考えてしまい、

恐怖が先立ってためらわれた…。

そして、真夜中を過ぎ午前二時を回ったとき、

携帯電話の呼び出し音が鳴った。

待ちに待った電話であったから、圭子は誰からの電話なのか、

確認しなくても判っていたから、電話に出た途端、

「セルジオ？セルジオなのね？もしかしてジョルジョ？」

と叫んでしまった。しかし、電話の先の声はセルジオでも、

ジョルジョでもなかった…。

マルコからの電話は久しぶりだったから、圭子は驚いた。

「…ごめんなさい。間違えてしまって。でも、こんな時間に

どうしたの？叔父様が叔母様になにかあったの？…どうしよう」

「勝手に人の不幸を決めるなよ。そうじゃないんだ。

俺は今、セルジオとジョルジョと一緒にんだ。

と言っても彼らはロビーに俺は入口近くのブース。

だから彼らにこの電話の話は聞こえていない。

だから、圭子に今夜の出来事を少し話そうと思ってね。

きっと心配していると思ったから。俺がどうして

彼らと一緒になのかって？ ジョルジョに呼び出されたんだ。セルジオが親と大喧嘩をしてしまったからって。喧嘩の原因が問題らしいけれど、セルジオは今は圭子に合わせる顔がないから、ってそっちに帰る事を拒んだらしい。だから、今日はセルジオは僕が預かることになった。細かい内容はジョルジョから聞くといい。彼は間もなくプレネスティ 二に帰るはずだから、親子の喧嘩なんかよくあることだから、圭子は心配はしなくていい。セルジオは大丈夫だから。今、圭子に会わせると言わないでもいいことを言いそうだから俺が預かるだけだからね。もちろん、ジョルジョが身重の圭子を心配してのこと。大げさに考えなくていいからね。セルジオがこっちに来るからもう電話を切るよ。心配は本当にいらぬから」

やはり来るものがきたと思った。恐れてはいなかったが、簡単にことが運ぶわけがないと心の中では思っていた。圭子であったから、このような事態に慌てはしなかった。ただ、折角の彼の両親との初対面の日に、予想していた事態が起こってしまったことが悲しかった…。願わくば、何事もなくセルジオに今までの悲しく辛い過去を一時でもいいから忘れてほしかったし、生まれ来る孫の話で温かな時間を過ごしてほしかった…。だから、マルコの電話を切ったあと、誰もいないリビングで、圭子はお腹の中にいる我が子に少しかけ話しかけてみた。寂しかったから…。誰かと無性に話をしたくなかったから…。「パパは大丈夫なの？ パパはあなたのことを守ろうとして戦っているのかな？ もし、そうだったら今夜のパパを許してあげてね」

窓辺に立った圭子は、我が子と共に夜空を仰いだ。すると二人を待つようにして、静かな丘の夜に戻ろうとしているプレネスティ。二の夜空に、大きく弧を描くように星が流れて行った…。真綿に包まれた子供とパパとママが手をつないで夜空を散歩するように、いくつもの流れ星が圭子の涙を慰めるようにして夜空を美しく流れ去った…。

マルコの電話から二時間近く経過があった夜明け近くに、ジオルジョが一人で戻ってきた。睡眠不足もあるのだろうが、セルジオと両親のもめ事に付き合ったことで、心身共に疲れた風であり、憔悴しきった顔が哀れでもあった。しかし、玄関に迎えに出た圭子の顔を見ると微笑んで言った。

「ご両親がとんでもないことを言い出しましたね…。セルジオは我慢ができなかったのです…。私でさえ我慢の限度にきていましたから…。

まあ、とにかく座りましょう。ゆっくりとご説明致しますから。でも、ご心配には及びませんよ。

なんだってセルジオはお強くなりましたし、微力ながらこの私とマルコさんが付いていますから。ちょっとやさそつではなくじけませんよ」

圭子は戦闘的な態度で話をする思ったよりも元気なジオルジョに安心した。

リビングに落ち着いたジオルジョは、朝食を食べていない圭子と自分のためにキッチンからカフェとリコッタチーズ、コルネット、そして、フルーツを運んできた。そして、まずは腹ごしらえをしてから、

昨夜のセルジオの奮闘記をお話しましょうと言い、また、自分の疲れを吹き飛ばすとおきの手は、食欲を満たすことなの

ですよ、

そう言って旺盛な食欲ぶりを圭子に見せた。

圭子も朝食のお相伴に預かりながら、頼もしい味方のジヨルジヨの顔を感謝の気持ちで見つめていた。そして、

ジヨルジヨといいマルコといい、自分はなんと素晴らしい家族であり、

友人を得ているのだらうと改めて思っていた。

血のつながりはなくとも、この二人とは家族以上に信頼し合い、

愛し合って生きている実感を噛みしめながら、

ジヨルジヨの淹れたカフェを口にした…。

そして、彼のオーラを浴びた圭子は、なぜか幸せがすぐそばに
来ているような、そんな気がしていた…。

第36章に続く

第36章 セルジオの戦い

第36章 セルジオの戦い

圭子はジョルジヨの話を聞くまでもなく、セルジオの思いが両親にスムーズに受け入れられなかったことは判っていた。というのもセルジオが出掛けに圭子を抱きしめてこう言ったからである。

「僕たちの生活は例え親であつても邪魔されない。親の言いなりには決してならないから…。この丘のこの家が僕たち家族の家だから…。何があつてもカルツティ家の圭子ではなく、僕の妻であり子供の母親だから。」

そして、何があつても僕たちの子供はイタリアの大地で育てるから…。
…。
対面と世間体を第一に考える彼らの言いなりには決してならないから…。」

圭子は思いつめたセルジオの顔を思い出していた。
きつとご両親を目の前にして一人で頑張ったのだらうと思った。
自分とこの子を守るために…。

一息入れたジョルジヨはさあ話しましょう、と言って圭子と共にリビングのソファに座った。しかし、圭子はジョルジヨの話を腰を折るようにして先に口を開いた。

「ジョルジヨさん、昨夜のお話を聞く前に、ひとつお尋ねしたいことが

あるのですが、よろしいですか？この家を初めて訪れたときからずっと気になっていたことなのです。もしかしてご両親との不協和音の

原因につながりがあるのかもしれないと思っています…。」

ジオルジヨは少しだけ首を傾げて、圭子の疑問が何なのか考えていたが、

「この家に来たそのときから気になっていることですか？圭子様に何かを感じさせるものがあつたということですね。それが何なのか、私も気になりますから、どうぞおっしゃってください。幸か不幸か、今日はセルジオがいませんから、その他にも何か気になることがありますたら、遠慮なくお尋ね下さい」

そう言つて、ジオルジヨは圭子の言葉を待った。

「この家を初めて訪れた晩、庭に建つあのアトリエに行きました。とても素敵なアトリエでしたが、名前が気になつて仕方なかつたのです。」

ここは山間部です。海を連想させるものは一切ありません。

なのにアトリエの名前は“碧い部屋”…。セルジオが命名したと思えますが、

それには意味があるのだらうと私は思ったのです。

ご存知でしたら教えて頂けませんか？

そして、今なぜ知りたいのかと申しますと、

ご両親との軋轢のすべてがあ部の部屋に隠されているようなそんな気がしてならないのです…」

ジオルジヨは驚いた顔で圭子を見つめた。そして、気持ちを整えるかのように、大きく深呼吸をして意を正した。

「さすがですね、圭子様のその観察力？いいえ、直感力。その上、物事を冷静に見られるその頭の良さ、セルジオにも勝る利発なお人です。」

…そうですね。その通りなのです。ご両親がもつとも忌み嫌うのがあの部屋です。

ですから、ご両親にはこの家も当然ながら嫌な場所になると思いません。

そして、セルジオが幼い頃から故郷として愛しているこの丘も…。
これからお話することは圭子様にとって、
お辛い話になりますが、よろしいですか？」
汗を拭きながらジョルジョは圭子にそう断って話を始めた。

「“ 碧い ” というのは前妻との間に出来たお子さんのお名前なので
す。

以前お話させて頂きましたように、そのお子様は不幸にも
お生まれにはなっていないが…。

でも、彼は女のお子様とお判りになったとき、

コートダジュールの深く碧く澄んだ海と空にあやかった

美しいお名前をつけようと日夜考えて、

碧いという名前に決めたのですが、

前妻のカトリーヌ様はその名前が気に入らず、というより、

ことごとくケチをお付けになるお方でしたから、

名前が気に入らないというよりは、勝手につけられてはたまらいと

思いになられたと言った方が正しいかもしれません。

とにかく、お気に召さず争いが始まりました。

しかもそれだけで命名の件は終わらず、

お父上までセルジオの命名にケチをつけましてね。

それはあまりにも卑劣な仕打ちでした。

セルジオに向かってお父上はこう言ったのです。

“ ロイヤルとはなんだ。これが名前なのか？馬鹿げた名前だ。

イタリア人とフランス人のセンスの違いだ”と…。

これはイタリア人のお母さまへの侮辱にもなりました。

もちろん、セルジオはこれだけのお名前で済ませようとは

思っただけでなかったのですよ。

セルジオはニッケネームのつもりだったのです。

紺碧の海の色がセルジオにとっては特別な意味を持ち、

心の拠り所であったから、呼び名として命名なさっていたのに、

家族の誰ひとり、彼を理解していなかった…。

彼らにはセルジオ独特のロマンの世界を理解できなかったのです。

そして、流産なされたことで怒り狂ったお父上は、ある日、

こんな縁起でもないものを描いたからだと言って、

セルジオが生まれてくるはずの子供を思っただけ描いていた絵を

碧い絵具で一気に塗り潰してしまわれたのです…。

セルジオとカトリーヌ様の目の前で塗り潰しました…。

我が子を描いた自分の作品を、目の前で潰されてゆく過程を

放心状態で見つめるセルジオはその後、自分を取り戻す努力もせず、

元妻から刑事事件として訴えられても、罪を云われるままに認め、

慰謝料も相手の法外な金額の請求にも一切のクレームもつけず、

通常の状態に戻れないまま、いつしか塗り潰されたキャンバス

の中に

自分の子供が閉じ込められてしまったと思ひ込んでしまったので

す…。」

ジオルジヨはまだ続きがあるのですが少し休ませてください、

と言ってキッチンに入った…。

圭子は悲しみを背負ったままに背を丸めて歩くジオルジヨの

後姿を眺めながら、セルジオはその日を境にして、

両親との戦いだけではなく、自分との戦いも

始まったのではないのかと思っただ…。

前妻との間に出来た子供への愛情は未だ大きく、

哀しみに包まれたまま今に生きているから、

その愛惜と苦しみの戦いはさぞかし辛かろうと想像もできた。

ジオルジヨもきつとセルジオと同じように苦しみの中にこの二年間、

生きてきたのかもしれないと思っただ…。

だから圭子はキッチンに消えたジオルジヨの後姿に手を合わせ、

感謝の祈りを捧げた。

“ ジョルジヨ、ありがとう…。身を提してまでも彼を守ってくれてありがとう…。

苦しかったでしょう…。辛かったでしょう…。

さぞかし疲れたでしょうね…。

でも、もう少しだけでいいの、頑張つて…。

この先も私と一緒にセルジオを守ってあげてほしいから…。

彼はこの先、きっとあなたを心の拠り所として生きてゆくと
思うから…。

だから見捨てないで、いつまでも愛してあげてほしいの…。”

第37章に続く

第37章 幸せの旅立ち

第37章 幸せの旅立ち

キッチンから戻ったジオルジヨは、真新しいゆり椅子を重そうに運んできた。それをマントルピースの前に置くと圭子を手招いた。「注文しておいたこの椅子がたった今届きました！私どもスタッフから

圭子様への結婚とご懐妊のお祝いです。セルジオお勧めの品なんですよ。

喜んで頂ければうれしいと思います。さあ、ここに来て座ってみてください。

椅子の高さなどを調整を致しますから」

プレステイ 二の春の新緑の緑をイメージして塗り直してもらったと

そうジオルジヨは椅子の色を説明した。

マントルピースの前に置かれたゆり椅子は、全体的には深い緑に彩られていたが、要所要所には、ジオルジヨの説明どおり、

春の新緑を思わせる明るいグリーンとくすんだ黄色との組み合わせで、

楽しい色のバリエーションを見せている。

それはまるで子供が授かるうれしさを表現するかのように、

圭子の目の中で色が小気味よく乱舞し始めた。

そして、そのときも圭子は、ジオルジヨの幸せオーラを浴びたような気がし、

大きな幸せがすぐ傍に待ち構えているような、

そんな気がしてならなかった…。

ゆり椅子に座った圭子を満足そうに眺めたジオルジヨは、

マントルピースを背にして圭子に足元に座った。
そして、言葉を選ぶようにして静かに話し始めた。

「セルジオはお父上との争いを境にしてモンテカルロのご自分部屋から

出ることはなく、散歩はもちろん、お食事も部屋で一人で済ませるように

なりました。私は事ある度に外出を進めたり、皆様と交流を持たれるように

口説いたりしましたが、馬の耳に念仏でして、何を言っても聞き入れて

くださいませんでした。精神を病んでいたことは承知していましたが、

病院へ行くことも、カウンセラーを訪ねることもお進めしたのですが、

すべて無視されました…。心配でした…。うつ状態でしたから、私は一時も目を離すことはできませんでした…。

そして、時が経ったある秋の日、セルジオは突然、行動を起こしたのです。

私はうつ状態から脱したのかと喜びましたが、そうではなかった…。お父上に青く塗り潰されたあのキャンバスをコートダジュールからこのプレネステイ 二の丘に運ぶためだったのです。

この家もお父上のもですが、イタリアにはあまり足を向けない父親でしたから、実際にはセルジオ一人がお使いになっているようなもので、

彼は常々、自分の故郷はこの丘だと申すほど気に入った場所であり、モンテカルロよりもこの家の方が落ち着いて暮らすことができましたから、

原型を留めないほど塗り潰された我が子の肖像画を、自分の生きる場所であるこの地に飾りたかったのだでしょう…、

庭に建てたアトリエを“碧い部屋”と名付けて、そのままキャンバスと共に閉じこもっておしまいになりました。誰一人寄せ付けませんでした…。私でさえも自由に入ることができませんでした。

生まれて来るはずの、しかも自分の手で殺してしまったと思われる

セルジオの子供への供養と心に描いた亡き子供と二人だけで過ごせる唯一の場所がこのアトリエだったので…。

今思えば、セルジオが自分が殺してしまった、と思う根拠はお父上の暴拳に端を発したのではとも私は思うのです…。

それから以前にお話をしたように、自分の殻にこもって、何もかもを捨てたような、そんな生活をなさってきました…。

しかし、お仕事だけは完璧にこなしていましたし、まるでジキルとハイドの

ように明るい仕事用の顔と夜の暗い顔を使いこなしてもいました。ただ、心配だったのは仕事から帰ったセルジオはいつも疲れきった表情

です…。前を向いて歩いていませんでした…」

圭子はさぞかし辛かったであろうセルジオのこの数年と

傍らで常に彼を見守ってきたジョルジヨの苦労も合わせて思い、彼ら二人への憐れみと感謝の気持ちで涙があふれていた。

「でも、半年前ですか、突然、圭子様をお部屋に招待なさったときには、

驚きました。それに加えてあのときの生気に満ちたセルジオの

顔にも驚きました…。あんなに生気に満ちた顔はここ何年も

見たことがなかったから、夢ではなく現実だと判ったときの私は、飛び上らんばかりのうれしさでいっぱいでした。

セルジオの心に潤いが戻ってきたと知ったとき、

私は感涙にひとりむせびました…。

あなたにはなんと感謝していいのか、
また、なんとお礼を言っているのか、言葉もありませんでした…。
今も同じ気持ちです。圭子様なくして今の彼はいないのですから…」
そう言つて圭子の手をしっかりと握り、

「これからは私のあなたへの恩返しが始まるのです。なにもかもお任せ下さい」

圭子はここまで自分を信頼してくれてくれるジョルジョに感謝しながら言つた。

「ありがとう。そこまで私を思つてくださつたなんて…。

でもね、ジョルジョの支えはセルジオだけではなく私にも必要なの

…」

と彼の顔を見て言つた…。感謝の気持ちを含めて言つた…。

ジョルジョはそんな圭子をしっかりと抱きしめ、これから家族としてお互いに助け合つて生きてゆくことを約束してくれた。

気がつくくとプレネステイ 二の丘には早朝の冷気が降り始めていた。

それは未だ闇の中にいるカルツティ家の重々しい雰囲気とは異なり、爽やかで清々しい情景が窓の外に広がり始めていた…。

夜明けを報せる鳥たちのさえずりを聞きながら丘に立った圭子は、

初めて逢つたあのローマのホテルで、セルジオが素晴らしいと言つた母の勾玉のネックレスを握り締めながら、

地平線の彼方から上り始めた朝陽に向つて祈つた。

“愛する彼を過去の地獄から救つて下さい。これから生まれてくる赤ちゃんと

碧いキャンバスに生きるセルジオの大切な幼子のために、

彼を過去から解放し、未来に向かって生きる勇気をお与えください

…”

最終章 1 セルジオの決意

最終章 1 セルジオの決意

その日の午後、マルコに付き添われてセルジオは帰ってきた。セルジオは思ったより明るい顔をして、迎えに出た圭子を抱きしめた。

マルコは熱い抱擁をする二人を温かなまなざしで見つめていたが、ジョルジョのせかさされるようにして、先にリビングに入り、カフェとケーキが並ぶテーブルについた。

初冬の午後の鈍い光が差し込んだリビングは、

昨夜とは異なり、静かで平和な時間の流れの中にあつたから、いつもよりなお一層、格調高い雰囲気を漂わせていた。

マルコは豪華なシャンデリアや壁に架けられた名画などに目を見張り、

大理石造りの大きなマントルピースに声を上げて喜んだ。

そして、初めて訪れる圭子たちの愛の棲みかに興味は尽きず、セルジオと並んで入ってきた圭子に言った。

「こんな素晴らしい住まいに圭子とセルジオは住んでいたんだ。

圭子は幸せなんだってこのリビングに座った途端、感じたよ。

良かったね、圭子。いい人に見初められて。俺もうれしい…」

心からそう言っているのが圭子にもセルジオにも、

そして、ジョルジョにも判ったから、マルコの言葉に

みんな思わず涙ぐんでしまった。

少しの団欒を終えた後、セルジオがシャワーを浴びたいと言ったのを機に、

圭子はマルコにセルジオ自慢の庭を案内するために外に出た。

風が少し強かったが、丘からの眺めにマルコは満足したようで、終始、圭子の幸せな今の生活を喜びながら、散策を楽しんでいた。そして、アトリエの前に置いてあるベンチに圭子を座らせると、その前に膝まづくようにして腰を低くしたマルコは、圭子の手を握り、改まった口調で言った。

「圭子は僕が想像したよりも気丈だったんだね…」。

安心した。ジョルジョの話だと色々困難に遭ったそうだけれど、俺とのホットラインには一度もお助けコールはなかったし、ジョルジョの話だと圭子は必死に頑張つてセルジオを助けたって…。それまでの圭子からは想像がつかないが、でも、頑張ったんだね。それに比べセルジオは少し軟弱かな？
でも、お似合いの夫婦かもしれないな…。そんな気がしている。ただ、こんなことは序の口。これからがもつともつと大変だろうと思う。

でも、ジョルジョも俺も付いているから…。だから圭子の思うとおりに
生きてらいい。このカルツティ家の中で、目いっぱい自己主張したらいい。

セルジオを助けるにはそれしかないと思うからさ…」

圭子に優しい笑いを向けながら立ち上がり、背を向けた。
そして、背を向けたまま話を繋げた。

「それからいつだったかあの茶番劇はジョルジョから聞いたよ。僕に圭子をあきらめさせるためのあの嘘さ。ジョルジョが無理やり圭子とセルジオを説得して実行したんだって言うていた。

彼っていい人だね。でも、もうあの茶番劇は今や意味はないし、時効だよ。気にしないでいいから…」

マルコは天を仰ぎながらため息をついた後、
身体の向きを圭子に向けた。

「知ったところでどうにもならないとは思うが、
気になるだろうから昨晚のこと話そうか？さつき、
ジヨルジヨに頼まれたんだ。チャンスを見て圭子に話して下さい」
圭子がうなずくと隣に座って、昨夜を振り返った。

「父親のジヨセフと母親のアンジェラとは同じ親でも息子への思いに
少しずれがあるようだったけれど、セルジオの前に並んで座り、
圭子との結婚を許す代わりに、モンテカルロに帰ることを強要され
たという。
もちろん、圭子も一緒だ。しかし、セルジオは帰ることは断固とし
て拒んだ。
理由はモンテカルロに帰れば両親の思うがままになるからだ。
帰ればセルジオも圭子も自分たちの理想とする世界を持ってなくなる
のは

必至だったから、セルジオは何が何でも拒みたかったらしい。
もちろん、話し合いは決裂。それだけだったら、俺の出番はなかつ
たけれど、
そのとき、前妻との間に起きた事件を両親に蒸し返されたそうだ。
当然、セルジオは熱くなり、感情的になり珍しく爆発をしたという
のが
簡単なあらまし。彼は圭子と子供をなにがあっても守り抜くつもり
だったんだ」
マルコはこれでとりあえずはこの丘での生活は守れるはずだと言っ
て、
話を終えたが、圭子は、この先これで済むわけがないと思っていた。
まだ始まったばかりである。カルツティ家の孫が生まれれば、
争いのままでいられるわけではないとも思っていた…。

マルコはその後、仕事があるからと言って夕食の誘いを断って

ローマに帰って行った。

セルジオはマルコを戸口まで送った後、
碧い部屋に来てほしいと圭子に言い置いて先に庭へ出た。

空気の入れ替えのため、アトリエの窓のすべてを開いていた圭子は、
アトリエは寒いからリビングでとセルジオの後ろに呼びかけたが、
彼は思うところがあるのか、圭子の言葉を振り切ってアトリエに向
かった。

後を追うようにしてアトリエに行くと、セルジオは待ち構えたよう
にして

圭子を戸口で抱きしめた。そのときのいくらなしか悲しげな表情が
気になった。

そして、そんな圭子に追い討ちをかけるようにセルジオは哀しいこ
とを言った。

「ここを出る。このプレネステイ 二の丘を出たいんだ…。いいね？
ここから僕たちは明日にでも出て行くんだ。そして、

どこか新天地で僕と圭子で新しい世界を築き、生まれてくる子供を
迎えたい。僕たちの生活を誰にも邪魔されたくないから、

だからなるべく早く、極力早くここを出たい…」

セルジオの形相は話している間にも憤りの激しさを増し、

親に対しての反感をむき出しにした激しく冷ややかな表情へと
変化していった…。それは今までの彼とは異なる、

心のない冷ややかなものであった…。

圭子はそんなセルジオを前にして涙を流した…。

自分を捨てていると感じたから、見るのも耐えられないほど辛く、
悲しかったから、思わず涙があふれ出てしまった…。

けれど圭子はそこで頑張った…。背筋を伸ばし気を取り直して、
セルジオの顔をしっかりと見つめた。涙を拭いながら見つめた。

最終章 2 に続く

最終章 2 プレネステイ 二の丘

最終章 2 プレネステイ 二の丘

「…私はここが大好きです。あなたがどう思うと、どう言おうと私はあなたと生まれてくるこの子とジョルジョとでここで暮りたいと思っと思っています。

なぜならここがもう私の故郷になってしまったから…。

日本を離れ、家族とも離れてとても寂しかったときに、

あなたにめぐり逢い、このプレネステイ 二の丘ともめぐり逢ったのです。

あなたも私の故郷でした…。あなたの香りと丘の香り、

そして、ジョルジョもすべて私の心の拠り所となってしまうたから、私はここから離れることはもう辛過ぎます…。

ここには私の家族が根を降ろしているのです…。

それと私とあなたでこのキャンバスをこのアトリエ「碧いアトリエ」と共に守らなければいけません。そう思いませんか？

このキャンバスを守らなければ、あなたが今まで

ここで生きてきた証を見失います…。

だって、この中には碧いあの子とモンテカルロからこの丘まで、共に生きた思い出が詰まっているではありませんか？

お父様に塗り潰された我が子の肖像がもしれませんが、

色を剥がせばあなたが描いたあの子が蘇ってくるのですよ。

忘れた方が気持ちは楽になるかもしれませんが、

でも、あの子と過ごした苦しみは、あなたの大切な生きた証です…。

それとキャンバスの片隅に、あなたは僕の最後はここで…

と書いていますし、あなたが愛する場所はこの部屋であると私は思っっています。

同時に私も愛する人の愛の棲みかがここだと信じています。

「この部屋は誰にも干渉されてはならない。

僕の人生の最後はローマでもなく、モンテカルロの家でもなく、この自然に囲まれたスローライフの中で、自然の仲間として常に自分を

見失うことなく、ここ、プレネステイ 二の碧い部屋で迎えたい。そして、僕の生への別れの時が来たならば、

この部屋に多くの友人を呼び、別れの儀式を執り行う……」

あなたが書き置いたこの文章は、私に読ませたかったのではなく、あなたは自分自身に書き残したかったのだと思います……。

それなのに簡単に自分の領域をご両親のために捨てるのですか？なぜ、そう簡単に両親の言いなりになるのですか？

なりたくないと言っておきながら、結局は逃げておしまいになる。それって言いなりになるのと同じです。

この部屋で私たちは契りを結び、その結果、この子が誕生するので

す。この子は既にあの碧い子と一緒に、このキャンパスの中で舞っています……。

なにかの因縁としか思えないのです……。ですから、

あなたと私の子供の名前はもう一度、“碧い子”にしましょう。

あの子が帰ってきたと思いませんか……。

本当に帰ってきたのかもしれない……。

そして、あなたが命名したこの子を連れていつか、ご両親に会いにゆきましょう。私はモンテカルロに帰るのも拒みません。

彼らの言うままにはなりません、だからと言って、

彼らの希望も取り入れてあげなければ、この子が可哀だから。

お二人はこの子にとっては大切なおじいちゃんであり、おばあちゃんですもの。

セルジオ、愛するこの子のために我慢をし、耐えることができませんか？

長いものに一度は巻かれて、得をする方法を見つけても遅くはない

と思います。

私はあなたを愛しています。そして、愛するあなたの子供は、
なお一層の深い愛と多くの人々の愛で包んであげたいのです…。
ですからこの子のためにもう一度、セルジオ・カルツェイに戻る気
持ちは

ありませんか？モンテカルロのご両親の息子としてこの先、
生きることではできませんか？急には無理だとおっしゃるなら、
責めて数ヶ月前、私とローマで初めて会った

あのときの魔術師のような深い愛情を持つイタリア人として、
この子のために生きてほしいのです…。」

セルジオは息つく暇もなく、思いを語る続ける圭子を啞然として
ただ見つめているだけであった。

頬を流れる涙を拭いもせず、これから生まれてくる子の
ために懸命に自分を説得する圭子の姿勢に感動し、
聞いているセルジオの頬にも幾筋も幾筋も涙が流れ、
留まることがなかった…。

お茶を運んできたジョルジヨも圭子の言葉に魅入られ、
ドアの前で微動だにできなかつた…。

涙の中で自分に微笑を送るに圭子に両手を広げたセルジオは、
腕の中に飛び込んできた圭子をしっかりと抱いた…。

そして、うなずいた…。もう心配を掛けないようにしようと、
約束もした…。圭子が最初に出逢ったあの声で言った…。

だから、圭子は初めてセルジオに自分のわがママを言った。
言うておかなければ圭子自身が自分を見失いそうだったから…。

セルジオが自分の生きる場所であることを知っておいてほしかった
から…。

「私は静かな丘の生活を何としても守りたいの。」

この子と愛する人のために何としてでも守り抜かなければ、
私が生きた屍になってしまふから…。
ここへ来た目的はたったひとつ“愛する人と生きたい”から…。
私は苦しみも哀しみも歡びも愛する人と共有したいから、ここに…。
だから、お願いセルジオ、自分を捨てないで。
捨てたら私は行くべきところを失ってしまうの…。
だってあなたが私の生きる場所だから…。」

完結

最終章 2 プレネステイ 二の丘（後書き）

長い間ありがとうございました…。

次回作は三日後からの掲載を予定しております。

市川昭子

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5223j/>

【碧いキャンバス】

2010年10月9日15時38分発行